

回顧

Rétrospective, 1978 • 4–2022 • 3



永井隆則

Takanori NAGAÏ



著者近影 (2022/01/13, Kyoto)

回顧

Rétrospective, 1978 • 4–2022 • 3

永井隆則

Takanori NAGAI

本冊子は、京都大学の学生時代から京都国立近代美術館勤務を経て京都工芸繊維大学を2022年3月31日に定年退職するまでの45年間にわたって実施してきたキュレーション、研究、教育、社会活動等を網羅した記録集である。

Ce document retrace l'ensemble de toutes les activités de curation, de recherche, d'enseignement et activités sociales réalisées en 45 ans depuis mes études à l'université de Kyoto, puis dans mes fonctions de conservateur au Musée National d'art Moderne de Kyoto, puis comme enseignant à l'Institut de Technologie de Kyoto, jusqu'à ma retraite le 31 mars 2022.

● 表紙図版

表：ポール・セザンヌ 《山高帽を被ったセザンヌ》1885-86年、個人蔵

裏：ポール・セザンヌ 《林檎とオレンジ（部分）》1899年頃、パリ・オルセー美術館蔵

目 次 Table des matières

45年間の研究生活を回顧して

Rétrospective de ma carrière de 45 ans de recherche 7

活動記録 Données d'activité

I. 略年譜 Biographie sommaire 22

【出生年、出生地 Date et lieu de naissance】

【学歴 Formation】

【職歴 Expérience professionnelle】

【留学 Études à l'étranger、海外派遣 Missions à l'étranger、招聘
Invitations à l'étranger、在外研究 Recherches à l'étranger】

II. 学位 Titres universitaires 23

1) 国内 Nationaux

2) 海外 Étrangers

III. 国家資格 Qualifications 24

IV. 業務歴 Récapitulatif des travaux 24

1) 京都国立近代美術館での担当展覧会

Curateur d'exposition au Musée National d'Art Moderne de Kyoto

2) 京都工芸繊維大学での担当科目

Enseignement à l'Institut de Technologie de Kyoto

3) 最終講義 Conférence finale

V. 社会活動 Activité sociale 26

1) 非常勤講師 Professeur non titulaire

2) 学会 Société savante

1. 所属学会 Société savante d'appartenance

2. 幹事、委員 Secrétaire, Commissaire

3) 各種賞推薦人 Parrainage de divers prix

VI. 学位論文

Mémoire de licence, mémoire de maîtrise, thèse de doctorat 28

1) 日本語 En japonais

2) 外国語	En langues étrangères	
VII. 著作	Ouvrages	28
1) 単著	Auteur unique	
2) 編著	Éditions	
3) 共編著	Co-éditions	
4) 共著	Ouvrages collectifs	
1. 単行書	Livres	
i. 日本語	En japonais / ii. 外国語	En langues étrangères
2. 展覧会図録	Catalogues d'expositions	
5) 辞典	Dictionnaires	
6) 報告書	Bulletins	
VIII. 学術論文	Articles académiques	34
1) 日本語	En japonais	
1. 雑誌等、掲載論文	Dans les revues	
2. 単行書掲載論文	Dans les livres	
3. 展覧会図録掲載論文	Dans les catalogues d'expositions	
2) 外国語	En langues étrangères	
IX. 小論	Essais courts	41
X. 解説	Commentaires	44
XI. 報告	Rapports	44
XII. 書評、新刊紹介	Comptes-rendus de livres, présentation de nouvelles parutions	46
1) 書評	Comptes-rendus de livres	
2) 新刊紹介	Présentation de nouvelles parutions	
XIII. 展覧会解説	Commentaires d'expositions	47
1) 日本語	En japonais	
2) 外国語	En langues étrangères	
XIV. 展覧会の記録記事	Articles d'archives d'expositions	49
XV. 作家、作品解説	Présentation d'artistes, d'œuvres	51

XVI. 翻訳 Traductions	62
XVII. 発表要旨 Résumés de présentations orales	63
XVIII. 学会口頭発表 Présentations orales dans des réunions savantes	64
1) 日本語 En japonais	
2) 外国語 En langues étrangères	
XIX. シンポジウム口頭発表 Présentations orales dans des colloques ...	65
1) 日本語 En japonais	
2) 外国語 En langues étrangères	
XX. 学術講演会 Conférences scientifiques	66
XXI. シンポジウム座長 Président de colloque	69
XXII. シンポジウム、学会のコメンテーター Commentateur de colloque, de réunions savantes	70
XXIII. シンポジウムの司会 Animateur de colloque	70
XXIV. 学会の司会 Animateur de réunions savantes	71
XXV. 研究プロジェクト Projets de recherche	72
1) 国費 Budget de l'État	
2) 民間 Budget de fondations privées	
XXVI. 海外での調査研究活動 Activités de recherche à l'étranger	74
XXVII. 外国人招聘事業 Projets d'invitation de chercheurs étrangers ...	79
XXVIII. 学術行事の企画・開催 Organisation d'événements académiques	82
1) シンポジウム Colloques	
2) 学術講演会 Conférences scientifiques	
1. 外国人 Étrangers	
2. 日本人 Japonais	
3) 「アート・メディア・テクノロジー」(デザイン・建築学課程造形史研	

究室企画連続講演会)

Série de conférences : *Art, média, technologie*, organisée par le laboratoire d'histoire de l'art et de design

- 4) 「デザイン学特別講義」(A : 前期、B : 後期) (デザイン学専攻主催)
Cours spécial de science du design (A: premier semestre, B: deuxième semestre) organisé par la section Design
- 5) 学会 (京都工芸繊維大学) Réunions savantes à l'Institut de Technologie de Kyoto

XXIX. 受賞歴 Histoire des prix 96

XXX. 書評対象著作物

Ouvrages destinés au compte-rendu 96

XXXI. 被引用論文一覧表

Liste des ouvrages et articles cités par d'autres chercheurs 98

- 1) 論文、著書の中での引用
Citations dans des articles et ouvrages académiques
- 2) 文献表に引用された論文、著作 Citations dans des bibliographies

XXXII. Curriculum Vitae (仏文履歴) 115

Date et lieu de naissance

Formation et diplômes

Carrière

- 1) Conservateur de musée
- 2) Enseignement universitaire

Bourses

Invitations

Conférences

Publications

- 1) Livres
- 2) Écrits sur Cézanne
- 3) Catalogues d'expositions

Projets de recherche avec les subventions de recherche scientifique

- 1) Subventions d'État
- 2) Subventions privées

45年間の研究生生活を回顧して

Rétrospective de ma carrière de 45 ans de recherche

京都大学文学部／文学研究科時代

西洋美術史の研究を始めたのは、京都大学文学部哲学科美学美術史学科に進学してからである。当時の美学美術史学科研究室では、コンラート・フィードラー (Conrad Fiedler, 1841-1895) を中心とするドイツ語圏の美学・芸術学がご専門の吉岡健二郎先生 (1926-2005) と日本仏教彫刻史を専門にされていた清水善三先生 (1931-2012) が教育研究に従事されていた。美学と日本美術史の二人の教授を補佐する形で、それぞれの分野の助手が1名ずつ配属されていた。西洋美術史がご専門の先生が不在だったため、京都大学教養部 (現在の総合人間学部) から乾由明先生 (1927-2017) が、京都工芸繊維大学から上平貢先生 (1925-2012) が出講され、それぞれ、フランス近代美術史、イタリア・ルネサンス美術史を講じられていた。美学美術史学科は、伝統的に京都学派の伝統を受け継ぐ美学の先生方が中心となって運営されてきた関係上、私が学科に在籍した頃、美学・芸術学の研究を志す学生が多くそのため美術史を学ぶ学生も理論に関心を持つ傾向が強かった。ロココ美術の島本浣 (1947-)、イタリア・ルネサンスの岡田温司 (1954-) 諸先輩がその最たる存在だった。また、今日のように、専門の教員の元に学生が配属されるゼミ制度はなく、研究発表は分野の別なく全員参加で行われた。そうした教育体制も独特の学風を作り上げていた要因だった。こうした環境で、まず興味を抱いたのは主任教授の吉岡先生が研究されていたコンラート・フィードラー、そしてメルロ・ポンティ (Maurice Merleau-Ponty, 1908-1961) だったが、最終的にはフランスの画家、ポール・セザンヌ (Paul Cézanne, 1839-1906) を研究対象として選んだ。そのきっかけとなっ



ポール・セザンヌ《マンシーの橋》1879-80年、パリ、
オルセー美術館

たのは、ヨーロッパ旅行だった。当時、大学生の間でバックパッカーが大流行していて、これに倣って、3回生の夏休みに、1ヶ月間、ロンドン、ブリュッセル、ミュンヘン、ハイデルベルク、ウィーン、ローマ、フィレンツェ、バルセロナ、マドリッド、パリを訪ね歩いた。卒業論文のテー

マを探すためだったが、最後に滞在したパリのジュ・ド・ポーム美術館(別名、印象派美術館で1947年開館、86年閉館。その後、オルセー美術館に所蔵品が移管され、現在、ジュ・ド・ポーム国立美術館と改名して近現代美術の専門館として再利用されている)で見たセザンヌの作品、特に《マンシーの橋》に感銘を受けた。セザンヌに関心を抱いたのは、フィードラーの芸術論の実践例がセザンヌだという吉岡先生のご指摘やメルロ・ポンティの現象学セザンヌ論を読んでいたからでもある。米澤有恒(1943-2011)、上倉庸敬(1949-)、梅原賢一郎(1953-)、岡田温司といった先輩方にお話を色々伺った結果、さらに、吉岡先生から美術史の方が向いていると指摘されたことが決定的となって、美学・芸術学ではなく西洋美術史を専門としてセザンヌを研究する道を選択した。しかしながら、美学・芸術学研究が主流の環境に飛び込んで最初は美学理論に興味を持った関係上、私のセザンヌへの関心は、歴史的事実を調査、収集、整理する作業を第一の目的とする実証主義美術史の立場からではなく芸術論の解明に向けられていた。はじめて公にした論文「セザンヌと後世代」(『京都大学文学部 美学美術史研究室 研究紀要』第4号、美学美術史研究室編、1983年3月、23-53頁)を当時、神戸大学教授で、セザンヌ研究の第一人者だった池上忠治先生(1936-1994)にお送りしたところ、「これは美術史ではなく芸術学的美術史です。」と批評して下さいました。

先生の立場からすれば、私の美術史は認められない邪道だが、私が目指している研究の在り方を的確に捉えた批評だったと思う。今でも私の立場は少しも変わっていない。研究室の伝統に関係付けて私自身の方法を正当化する意図は全くない



留学前の壮行会（吉岡先生（中央奥右）、佐々木丞平先生（左列奥から手前に3番目）、筆者（中央奥左）、研究室の皆さんと共に）、1983年6月17日（金）、京都市左京区百万遍の居酒屋

が、美学美術史学科の歴史的な古層に「美学なき美術史は盲目であり、美術史なき美学は空虚である。」（中村二柄『美術史学の課題』、岩崎美術社、1974年、45頁）という考え方、つまり、理論と歴史の両輪がそろってはじめて充実した芸術研究が可能になるという前提があって、そうした立場を学んで研究者としての道を歩み始め現在に至った。

プロヴァンス大学／社会科学高等研究院時代

京都大学大学院博士後期課程の2年目で、セザンヌの生まれ故郷、エクス・アン・プロヴァンスに留学しプロヴァンス大学大学院（Université de Provence、現在の Université d'Aix-Marseille I）博士第3課程に登録した。今でこそ、エクスのグラネ美術館（Musée Granet）のセザンヌ・コレクションは充実してきたが、当時は、オルセー美術館所蔵の作品が数点、寄託されているだけで、エクスに居てもセザンヌの絵を見る機会は全くといってよいほどなかった。セザンヌが描いた風景がふんだんに残っていたものの、セザンヌ研究の方法として現在、確立されている「場所」研究、作品と実際の風景を比較する作業には一向に興味がわかなかった。ローヴ街道の最後のアトリエやシャトー・ヌワールを訪問しサント・ヴィクトワール山に登山したぐらいである。プロヴァンス大学の美術史研究所（市内、ガストン・



エクス・アン・プロヴァンスの下宿で（大家さんのお孫さん2人とムスタングと共に）、1984年4月

ド・サボルタ通り23番地、サン・ソヴール大聖堂のすぐ近く）では、ル・コルビュジエ（Le Corbusier, 1887-1965）研究の第一人者、ジェラルド・モニエ（Gérard Monnier, 1935-2017）教授のご指導の元、博士論文提出資格課程論文（D.E.A.）を提出した。エクスに滞在したのはわずか1年で、作品も資料もない中での生活は、研究には殆ど意味をなさないと感じて、2年目からパリに移ったのだが、後々、1年間のエクス滞在が実に大きな意味を持ってきた。エクスでは学生寮に入らず、セザンヌがモチーフとして描いた石切り場に向かって市内中心部から登って行くシュマン・ド・ビベミュスという道沿いに建つ「Les Chênes (Mme.Magueritte Leleu 邸)」に寄宿した。その名の通り、邸宅の庭に巨大なナラの木があって、本宅と離れて立つ亡くなったご主人の仕事を借りて生活をした。ルルー夫人には3人の娘さんがいたが、いずれも実家を出てしまっていてムスタングという巨大だが実に物静かな黒い毛をした犬と暮らしていた。いわば、用心棒代わりに寄宿していたようなもので、さらに、もともとパリ生まれの夫人はパリにいる娘さんに頻繁に会いに出かけて美術展見学などを楽しまれた。留守中の家の管理とムスタングの世話が、下宿代が安い代わりに私に課せられた仕事だった。夫人は家族がやってくると、しばしば食事に誘って下さりご家族との車で遠出にもご一緒させて頂いた。そうした交流が一般的なフランス人の感じ方や物の見方を知る格好の機会となり、何よりもフランス人に対する心理的な壁を取り払っていった。フランス人に対する親密な感情が育まれたとあって良い。

博士課程2年目（1984年）からパリの社会科学高等研究院（École des

Hautes Études en Sciences Sociales) に登録しユベール・ダミッシュ (Hubert Damisch, 1928-2017) 教授のご指導を受けることとなった。メルロ・ポンティに哲学をピエール・フランカステル (Pierre Francastel, 1900-1970) に美術史を学んだダミッシュ教授は、美学美術史学に記号論を導入して芸術の理論研究を推進し、実証主義を前提とするパリ第四大学や美術館の美術史研究者とは一線を画していた。教授のゼミは、京都大学の美学美術史学科の学風を考えれば大きなギャップではなかったが、講義はともかく難解だった。多くのフランス人が講義に参加していたが彼らにとっても同様だった。残念なことに、3年目から (1985年秋から1986年夏まで)、教授は、ニューヨークのコロンビア大学とカリフォルニア大学バークレー校で教鞭をとられることになり、1年間、不在となった。その間、パリ第一大学に着任されたばかりの、ジャン・クロード・レーベンシュテイン (Jean-Claude Lebensztein, 1942-) 教授の講義を聴講させて頂いた。毎年、テーマを決めて、関係する理論書や画家の言葉を紹介しつつ、事例として多くの画家達の作品を取りあげていく形式だったが、本質的な内容を簡潔な概念で鮮やかに切り取って作品に即して具体的に説明する語り口には目を見張るものがあった。レーベンシュテイン教授とは、その後、ずっと現在に至るまで交流が続いている。2004年、2009年には京都工芸繊維大学に招聘して講演会やシンポジウムへの参加をお願いした。さらに、2009年の招聘の際には、教授に同行して各地の美術館を訪問しセザンヌ作品の調査を実施した。レーベンシュテイン教授はパリ生まれで、日当たりの良い高層アパートの最上階に一匹の猫と暮らす独身者である。長年、一人暮らしをされてきたためか料理の達人で、ブランケット・ド・ヴォーやポトフといったフランスの家庭料理をご馳走していただく機会があり、今となっては実に楽しく懐しい思い出である。

ダミッシュ教授とは、2005年、台湾に招聘されて日本に立ち寄られた際に再会した。現役時代とはうってかわって、定年後は自由人であり、か



ジャン・クロード・レーベンシュティン教授を囲むシンポジウム後の懇親会（敬称略 右：稲賀繁美、レーベンシュティン、田中英道、吉田典子、左：筆者、大久保恭子、浅野春男、高橋明也、林道郎）、2009年9月5日（土）、下鴨茶寮（京都市左京区の料亭）

つての厳しさが和らいで、その後、しばしばパリのご自宅に招いて下さって色々とお話を伺う幸運に恵れた。ダミッシュ夫妻は大変な社交家で、自宅に多くの知人を招いては奥様の手料理でもてなし、最後に、大きな布を取り出してきて記念のサインを求めるのを常とされていた。私も沢山のサインで埋め尽くさ

れた布の中によく、ソフィー・カル (Sophie Calle, 1953-) のサインの下に空白を見つけて、そこに署名させて頂いた。学生時代は全くの子供扱いだったが、博士論文を出版 (2007年) した後でようやく、一人前扱いして頂いた気がする。一度も日本に招聘されていないと嘆いておられたダミッシュ教授を2011年、招聘する準備を進めていた矢先に東日本大震災が発生して計画が頓挫したのは誠に残念な話だった。その後、病床に伏せられ、ついに実現することはなかった。

パリでは、多くの若い日本人留学生と知り合いになった。これもまた、その後のかけがえのない財産となった。高橋明也 (1953-、現、東京都美術館館長)、隠岐由起子 (元帝京平成大学准教授)、大野芳材 (1952-、元青山学院女子短期大学教授)、稲賀繁美 (1957-、現、国際日本文化研究センター名誉教授/京都精華大学教授)、三浦篤 (1957-、現、東京大学教授)、木俣元一 (1957-、現、名古屋大学教授) 諸氏との出会があったが、皆さん、その後、研究者として目覚ましい成果と業績をあげられて現在に至っている。同世代に同じ分野の優れた研究者がいたことは大きな励みや刺激となった。さらに、様々な大学出身の研究者との出会いは、その後、学閥意識から自由になって多くの方々と交流していく上での基礎的経験となった。

京都国立近代美術館時代

1986年の帰国後、運良く、京都国立近代美術館で研究員を探しているというお話を京都大学の吉岡先生から頂戴し、1987年10月から正規職員として勤務を始めた。採用の名目は工芸担当だったが、実際は、西洋美術の海外展担当であった。当時はバブル経済の絶頂期で、しかも、京都国立近代美術館は、1986年10月、新館を立てて再開したばかりだったので、次から次へと新聞社やテレビの事業部の企画するブロックバスター展(大規模大量動員の共催展)が持ち込まれた。それを担当することが私の役目となった。といっても、購入・寄贈作品のデータを作成するなどの様々な事務作業、作品の貸出や常設展示などの日常業務も大きな仕事であった。美術館学芸員と言えば、文学部で美術史を学んだ経歴を持つ人達が殆どである。美術史の学習において、美術資料や作品の読解能力、美術史に関する専門知識や論文の作成方法を身に付けることが基本となるが、学芸員の仕事をこなすにはそれだけでは不十分である。例えば、展示という行為は美術に関する知識や美学芸術理論のみでは実現し得ない。以前、私は、以下のように書いたことがある：

「展示とは、美術史や芸術学の観点からの判断、空間設計、安全性、快適さのほか、スケジュール(時間的制約)、コストなど、様々な側面からの条件を満たす行為であり、展示が実現するためにはさまざまな分野の人びととの共同作業、協力関係が必要となる。展示の主体である美術館人は、美術史や芸術学、美術に関する見識を持つだけでは不十分で、デザイナーやコーディネーター、造形作家の感覚、経済観念、素材や工作にかかわる常識などじつに多くの知識と能力を経験として身につけていることを要請される。展示とは、この意味で〈高度の熟練技能を基礎とした総合作業〉にほかならない。」(『現代美術館学』昭和堂、1998年、143頁)

展覧会を実現するために、学芸員は、グラフィック・デザイナー、空間デザイナー、新聞社やテレビの事業部、輸送会社など多くの分野の専門家

と共同作業を行い全ての仕事を束ねる中心的存在となる。その意味で学芸員の仕事はディレクションだと見做してよい。現状の文学部の教育システムでは学習の機会が提供されない素養は何か、当時は十分な言葉にはならなかったが、京都工芸繊維大学に転職してデザイン史を教えデザイナーの先生方のお話を伺いデザイナーを目指す学生たちの卒業研究に携わるようになって初めて明確に言語化できるようになった。学芸員に求められるのは、ヴィジュアルとかプロダクトとかスペースとか、具体的なデザイン分野のノウハウではなく、それらを貫いているデザイン・マインド、デザイン思考である。確かに、大学では学芸員資格を取得するための専門科目や学芸員実習が提供されているが机上の空論に過ぎず、医学部のインターン制度と同じく美術館の学芸員にもインターン制度を設けるべきだと1998年刊行の上掲書で提唱した。同じ考えを抱いていた人が文化庁にいたらしく、ほぼ同時期、国立美術館で学芸員のインターン制度が導入されその後、全国の美術館に普及して現在に至っている。いくら講義や書物で病気とその治療法についての一般的知識を得て頭で理解し記憶していても、現場での実践感覚や経験の積み重ね、換言すれば、臨床の知なくしては、目の前の患者一人一人に対して、個別に正確な診断を下し適切な治療を行うことはできない。ミシェル・フーコー (Michel Foucault, 1926-1984) の『臨床医学の誕生』 (Naissance de la Clinique, 1963) で記されている臨床の知と同様、学芸員も書物の世界、知識や論理のみの世界で完結するのではなく、社会経済の変化に伴って徐々に表面化する新たな価値を経験の積み重ねに基づく実践感覚から読み取っていく能力が求められる。後々、中村雄二郎 (1925-2017) がデザインを臨床の知だと理解しているのを知って (『臨床の知とは何か』岩波新書、1992年 / 『デザインする意志』青土社、1993年)、学芸員の仕事を一種のデザイン活動と見做すのは的確な認識だったと確信するに至った。

美術館時代の貴重な経験としてアメリカ訪問がある。1991年7-8月、松本透氏 (1955-、現、長野県立美術館館長) と共にアメリカ合衆国国務省に

招聘され、各地の美術館を訪問し各館の学芸員と交流したことはかけがえない財産となった。通訳として同行して下さった西村一郎さん(米国人名、Mike Nishimura, 1930-



ワシントンD.C.の西村一郎さん宅にて、1991年7月22日(月)

2016)は、旧制第三高等学校を卒業後、アメリカにわたりピッツバーグのデューク大学(Duquesne University)、ワシントンD.C.のジョージタウン大学大学院(Georgetown University)で政治学を学ばれた後、国務省の仕事を中心に通訳として活躍されていた方だった。奥さんはアメリカ人で3人の子供さんもアメリカ人として育て職を得、ご本人もアメリカ国籍を取得されていた。私の近所にお住いだった阪倉篤義(1917-1994)先生(京都大学名誉教授、国文学)が旧制三高時代の先生だったこと、さらに京都大学の教養部(現在の総合人間学部)で美学を講じられた新田博衛(1929-2020)先生が三高時代の同級生だったということもあって、随分、懇意にして頂いた。大学に転職して以降も、アメリカを旅行する時には必ずと言ってよいほどお会いして色々のご教示頂いた。アメリカに長期間滞在する機会はなかったが、アメリカ人やアメリカ社会との心理的距離が縮まり、アメリカ人研究者と比較的臆せず交流できるようになったのは、西村さんのおかげである。

京都工芸繊維大学時代——改革の嵐の中で

やや、横道にそれるが、美学美術史の研究者は、旧帝国大学系の国立大学や大手私立大学で美学・芸術学・美術史学科が制度として存在している場合を除いて、実に居心地が悪い。美術系の大学では、制作の先生方がリーダーシップを取り、論文指導を行う美学美術史系の先生はその脇に位

置付けられている。それ以外の大学では、一般教養の教員としてさらに辺境に追いやられている観がある。美学・芸術学・美術史の独立した学科が存在しない大学で教える研究者は、どこでも居場所を巡って試行錯誤を繰り返しているのが現状である。私が赴任した当時の京都工芸繊維大学工学部意匠学教室では、制作の先生方と美学美術史の先生方が一緒に教育に当たっていた。数年後に組織改編を巡って教員間で議論した際に美学美術史学を「史論デザイン」としてデザインの一分野として位置付けるよう提唱した。論文作成が、あるテーマをもとに資料や作品を調査、分析、読解して得た情報、認識や解釈を他者に伝達すべく構成し直す作業である以上、デザイン活動の一つと見做せると考えたからであった。残念ながら、これは、誰にも理解して頂けなかった。その後、建築の歴史系教員と旧教養部の人文社会系の先生方と共に「文化コース」というグループが形成され私もそこに組み込まれてしまった。数年後に、解散、美学美術史学は2015年から「価値創造学」、2018年から「キュレーション」として、デザイン分野によりやく復帰を果たした。工科系大学に「文学部」を作ってもナンセンスだというのが私の一貫した考えだった。「史論デザイン」から「キュレーション」に代わったが私自身が抱いた初期の構想によりやく辿り着いた気がした。また、それは、私が長年の美術館勤めを通じて身に付けてきたデザインの実践感覚とデザイン観が「キュレーション」というデザインの一分野として社会的に多くの方々に共有され認知される時代がよりやく到来したことを意味していた。「キュレーション」という概念によって、美学美術史学教員の役割を、美術館学芸員の養成のみならず、情報の収集・整理・発信としての情報デザイン分野の人材育成として明確に位置付けることが可能になった。モノのデザインからコトのデザインへとデザインの役割が大きく重心移動する中で、学芸員の仕事とそのモデルと見做されるようになった時代の流れに応えた組織改編であった。私個人は、学術講演会や国際シンポジウムの企画、外国人研究者の招聘事業、編著の企画・編集を「キュ

レーション」活動だと認識しながら自覚的に取り組んできた。それは同時に、古山正雄（1947-）第11代学長（2012-2018年在任）の元、2015年からスーパーグローバル大学創成支援事業の対象大学に選ばれて以降、キャンパス全体のグローバル化を促進するという全学的取り組みの一環として大学が推進してきた国際交流事業や国際シンポジウム開催という方針に應える取組でもあった。具体的には学内の国際課と連携しながら、国際化モデル研究室支援事業／シンポジウム支援事業による助成金を得て2015年から2021年度まで毎年、国際シンポジウムを開催した。その過程で民間の助成金を少なからず獲得でき外部資金獲得という大学の一つの目標にも甚だ微力ではあるが貢献できたと自負している。この一点に限って言えば、2015年度以降退職年度までは水を得た魚のようだった。

京都工芸繊維大学時代——研究

専門の美術史研究では、美術館時代は西洋美術担当であったとしても日本美術、工芸、写真、現代美術など様々なジャンルの常設展示や企画展に関与せざるをえず、専門の研究を深めることは困難だった。大学に移ってからは、学生時代に取り組んでいたフランス近代美術史研究、特にセザンヌ研究に立ち返ることができた。第二次安倍政権以降（2012年～）、大学改革が急激に推進され国内での大学間競争が激化する中で、古山学長が京都工芸繊維大学の生き残りをかけて、「オンリー・ワン」や「一点突破」の観点からデザインを主軸に据えた大学運営を提唱されたが、この考え方を私自身の研究の取り組み方の参考とさせて頂いた。2012年にセザンヌ研究で科学研究費を獲得して以降、セザンヌ研究をとことん極めるという明快な目標を設定した。2001年に独立行政法人国際交流基金文化人招へいプログラムで招聘したりチャード・シフ（Richard Shiff, 1943-）博士（テキサス大学教授でセザンヌ研究の第一人者）に、十年以上美術館に勤務してセザンヌ研究では長いブランクがあると嘆いたところ、「最近のセザンヌ研究は



「国際シンポジウム：ゾラの美術批評を再考する」リチャード・シフ教授を囲む全体討議風景（敬称略 左から吉田典子、リチャード・シフ、筆者、石谷治寛、寺田寅彦）2016年12月17日（土）、京都工芸繊維大学松ヶ崎キャンパス東構内東3号館1階K-101教室

質が低い」と形式主義研究の立場から暗に精神分析研究の台頭を揶揄されて安堵した覚えがある。招聘の御礼を込めてだったが、シフ教授は、その後、セザンヌの生まれ故郷、エクス・アン・プロヴァンスを拠点とする、ポール・セザンヌ協会会員に推挙して下さった。

特に2012年以降から現在まで切れ目なく継続して、セザンヌ研究をテーマとする科学研究費を獲得できたおかげで、セザンヌ協会の活動に積極的に参加し多くの研究者と出会い情報、意見交換を行うことができた。ジャン・アルユ (Jean Arrouye, 1934-)、フィリップ・セザンヌ (Philippe Cezanne, 1941-) 名誉会長、ドニ・クターニュ (Denis Coutagne, 1947-) 会長、フランソワ・シェドゥヴィル (François Chédeville, 1944-)、リチャード・シフ、ジョゼフ・リシェル (Joseph John Rishel, 1940-2020)、ジェイムズ・ルービン (James Rubin, 1944-) は、皆、私より一世代以上年上で、寛大な心で接して頂いた。イザベル・カーン (Isabelle Cahn, 1954-)、ミシェル・フレッセ (Michel Fraisset, 1960-)、ジェイン・ウォーマン (Jayne Warman, 1951-)、メアリー・トンプキンス・ルイス (Mary Tompkins Lewis) は、ほぼ同世代で、年下では、アンドレ・ドムブロフスキ (André Dombrowski, 1973-) やジャン・コラ (Jean Colrat) がいる。ウォーマンは、セザンヌ研究の大家、ジョン・リオルド (John Rewald, 1912-1994) がセザンヌのカatalog・レゾネを作成した際に助手を務め、リオルドの弟子だったリシェルと同様、アメリカ人特有の気前の良さで多くの貴重な情報を提供して下さった。総じて、セザンヌ研究の世界的サークルに参加して以降、私のセザンヌ研究は格段に深まっていった。そ

の成果は、『絵画における真実—近代化社会に対するセザンヌの実践の意味』（三元社、2022年3月）に現われているが、彼らとの交流を深めていく中で、調べてみたい考えてみたいテーマが次から次へと湧いてきて私のセザンヌ研究は未だ終わっていない。2012



「国際シンポジウム：セザンヌ、ジャズ・ド・ブッフアン、芸術と歴史」での発表風景、2019年9月21日（土）、エクス・アン・プロヴァンス

年の科研費の獲得を機に、パリの社会科学高等研究院博士課程に再登録し、エリック・ミショー（Éric Michaud, 1950-）教授のご指導の元、『L'idée de l'anti-modernisation sociale chez Cézanne（セザンヌにおける反近代化思想）』をテーマに博士論文の作成に取り組んだが、教授が定年退職を機に指導を辞退され、後任の指導教員を探す間に博士課程の制度改革が起り外国人の登録料が跳ね上がってしまったため、2018年9月で頓挫してしまった。その成果の一部は、『学術報告書（*Bulletin of Kyoto Institute of Technology*）』（京都工芸繊維大学紀要）（第14巻、2022年2月、71-107頁）に発表した。今後も、フランス語論文の続編を書き続けていく仕事が残っている。とはいえ、研究歴を重ねてから、他者の指導を受けたおかげで、他者の眼差しに導かれて私自身が長い間閉じこもっていた世界（誤解、偏見、思い込み）から外に出て新しい視界を手に入れるに至ったという思いがあって、未完に終わってはいるが、教授との対話は大きな意義があった。

京都工芸繊維大学時代——教育

教育については、還暦を過ぎてから状況が一変した。私の所属してきた意匠学教室やデザイン学部門、デザイン・建築学系デザインコースは、デザイナーの養成をミッションとしており、美学美術史、デザイン史に關す



〈新古典主義〉『近代造形史』講義風景、2016年4月18日（月）、
京都工芸繊維大学松ヶ崎キャンパス東構内東1号館2階E-121
教室

る卒業論文や修士論文を執筆する学生は少数であった。学部から修士、博士まで、私の研究室を希望する学生は、毎年、いるかいないかの状態だった。ところが、それまでも二、三の依頼があったものの、いずれもドタキャンで実現しな

かったが、中国人留学生が、毎年のように、研究生、その後は修士課程、博士課程の学生として指導を求めて来るようになった。彼らの共通点は、中国の大学で制作を学んでいる点にあり、制作もできて論文もかけるという私が理想としてきた学生たちで、日本語の大きな壁があるものの積極的に受け入れてきた。定年前なので受け入れを断らざるを得なくなった学生が多々いたのが残念だし、退職後、博士課程や修士課程に残る学生たちの面倒を最後までみられないのが心残りである。私の研究室から制作で卒業した学生もいたし、卒業研究のアイデア審査、中間審査、最終審査で制作の学生たちの発表を聞きコメントして助言する仕事は怠らずずっと続けてきた。制作と論文は別物でなく関連し合うと確信していたので、学生たちの発表を聞くのは実に楽しかった。学生たちのアイデアをこうすればどうか、ああすればどうかと学生たちと共に思いを巡らし助言することはイメージ・トレーニングになった。また、その時々々の学生達の関心を把握でき、私自身が現代社会の問題に触れて考える機会となったし、座学であるデザイン史の授業内容を社会の変化に対応して不断に更新していく上でも不可欠であった。制作の学生との思い出として、もう一つ楽しかったのは、シンポジウムや講演会を企画した際にフライヤーやポスターのデザインを学生たちにお願ひしてきたことである。アルバイト代を支払いながら



2016年度修士課程修了制作外部審査会後の集合写真（デザイン学専攻の学生達、先生方と共に、最前列中央に外部審査員〔武蔵野美術大学、故柏木博教授／キングストン大学デザインスクール、サイモン・メイドメント（Simon Maidment）教授〕、最前列左から2番目に筆者）2017年2月17日（金）、京都文化博物館本館6F

教育活動の一環としてデザイナーの卵たちに制作を依頼したわけだが、私の要望をどう理解してアウトプットしてくるかがいつも楽しみだった。パターンができあがっているプロのグラフィック・デザイナーの洗練された仕事と違って、皆、粗削りだが初々しさと若さがあり、回を重ねるうちに目を見張る成長を遂げた学生もいた。

最後になるが、文学部で学び学芸員として働きデザイナーの養成をミッションとする大学で教えた経験上、今強く思うのは、デザイン・マインド、デザイン思考、デザインの実践感覚、さらには「キュレーション」能力を身に着ければ、文学部で学んだ学生は今よりもっと力を発揮して社会貢献できるだろう、逆にデザイナーを志す学生が、文学部が得意とする思想性、精神性、価値を探求する能力に磨きをかけていけば、現代社会に潜む諸課題を発見する直観力やそれを解決する洞察力を鍛え上げ日常や社会を変革するより大きな力をもったデザイナーになっていけるだろうということである。換言すれば、文学部での学習が研究対象のコンテンツを深く掘り下げることを主眼に置くとすれば、デザイン系の学習は、コンテンツを明快に他者に伝達するフレームやプログラム作りを学ぶ場だとも言えよう。両輪を備えた人材こそ、今後の社会的力になり得ると確信するが、これを立証する機会と場がもはやないのが誠に残念である。

活動記録

Données d'activité

I. 略年譜 *Biographie sommaire*

【出生年、出生地 *Date et lieu de naissance*】

1956年5月29日 鳥取県倉吉市で出生

【学歴 *Formation*】

1976年4月 京都大学文学部入学

1980年3月 京都大学文学部哲学科美学美術史学科卒業（指導教授：吉岡健二郎）

1980年4月 京都大学大学院文学研究科博士前期課程進学（指導教授：吉岡健二郎）

1982年3月 京都大学大学院文学研究科博士前期課程修了

1982年4月 京都大学大学院文学研究科博士後期課程進学（指導教授：吉岡健二郎）

1983年10月 プロヴァンス大学 (Université de Provence)、Doctorant de IIIe cycle (第3課程)、D.E.A. 課程登録（指導教授：Gérard Monnier）

1984年6月29日 プロヴァンス大学 (Université de Provence)、Doctorant de IIIe cycle (第3課程)、D.E.A. 課程修了（歴史と文明：美術史）

1984年10月 社会科学高等研究院 (École des Hautes Études en Sciences Sociales)、Doctorant de IIIe cycle (第3課程)（指導教授：Hubert Damisch）

1986年6月 社会科学高等研究院 (École des Hautes Études en Sciences Sociales) IIIe cycle 退学

1987年9月 京都大学大学院文学研究科博士後期課程退学

2012年10月 社会学高等研究院 (École des Hautes Études en Sciences Sociales)、Doctorant（指導教授：Éric Michaud）

2018年6月 社会学高等研究院 (École des Hautes Études en Sciences Sociales) 退学

【職歴 Expérience professionnelle】

1987年8月 京都国立近代美術館学芸課研究補佐員 (1987年9月まで)
1987年10月 京都国立近代美術館文部技官研究職研究官 (1994年6月まで)
1994年7月 京都国立近代美術館文部技官研究職主任研究官 (1998年3月まで)
1998年4月 京都工芸繊維大学助教授 (工芸学部)
2007年4月 京都工芸繊維大学准教授 (工芸科学研究科)
2022年3月 京都工芸繊維大学 定年退職

【留学 Études à l'étranger、海外派遣 Missions à l'étranger、招聘 Invitations à l'étranger、在外研究 Recherches à l'étranger】

- ①留学：ロータリー財団奨学金奨学生 (1983年6月～1984年8月、パリ、トゥール、エクス・アン・プロヴァンス) / 私費 (1984年9月～1986年12月、パリ)
- ②海外派遣：文化庁主催海外の美術館調査 (1991年4月6日-4月20日、ウィーン、ミュンヘン、フランクフルト、パリ、ロンドン)
- ③招聘：アメリカ合衆国国務省主催インターナショナル・ヴィジター (1991年7月20日-8月20日、ワシントンD.C.、フィラデルフィア、ボストン、ニューヨーク、シカゴ、ダラス、フォートワース、ヒューストン、ロサンゼルス)
- ④文部省在外研究員 (1992年2月20日-4月21日、シカゴ、ボストン、ウースター、ニューヨーク、フィラデルフィア、メリオン、ボルチモア、パリ、エクス・アン・プロヴァンス、ロンドン、ケンブリッジ)

II. 学位 Titres universitaires

1) 国内 Nationaux

学士号 (京都大学文学部、1980年3月)

修士号 (京都大学大学院文学研究科、1982年3月)

博士号(文学)(京都大学、2006年3月)

2) 海外 Étrangers

Diplôme d'études approfondies

(プロヴァンス大学大学院第3課程 (Université de Provence, IIIe cycle) : 歴史と文明 [美術史] (Histoire et Civilisation [Histoire de l'Art])、1984年9月)

Ⅲ. 国家資格 Qualifications

学芸員無試験認定合格(1994年2月14日)

Ⅳ. 業務歴 Récapitulatif des travaux

1) 京都国立近代美術館での担当展覧会

Curateur d'exposition au Musée National d'Art Moderne de Kyoto

『ブリュッセル王立美術歴史博物館所蔵ヨーロッパのレース展』1987年
10-12月

『ジェリコー展』神奈川県立近代美術館／毎日新聞社との共催、1988年2-3
月

『荻須高德遺作展』神奈川県立近代美術館／朝日新聞社との共催、1989年
2-3月

『フランス絵画の精華ール・サロンの巨匠達』福岡市美術館／アジア太平洋
博覧会協会／日本経済新聞社との共催、1989年6-7月

『ヴァチカン展』国立西洋美術館／読売テレビとの共催、1989年8-9月

『現代美術への視点—色彩とモノクローム展』東京国立近代美術館との共
催、1990年1-2月

『ジョルジョ・モランディ展』神奈川県立近代美術館／京都新聞社との共
催、1990年4-5月

『ブリューゲルとネーデルラント絵画展』国立西洋美術館／朝日新聞社との
共催、1990年7-9月

『写真の過去と現在展』東京国立近代美術館との共催、1990年11-12月

- 『フィレンツェ・ルネサンス—芸術と修復展』世田谷美術館／NHKとの共催、1991年7-9月
- 『ゴッホと日本展』世田谷美術館／テレビ朝日との共催、1992年2-3月
- 『オーストラリア絵画の200年展』国立西洋美術館／日本経済新聞社との共催、1992年7-9月
- 『京都国立近代美術館創立30周年記念展 近代の美術—所蔵作品による』1993年4月
- 『ゴーギャンとポン＝タヴァン派展』文化村ザ・ミュージアム／中日新聞社との共催、1993年6-7月
- 『文化庁巡回展 長谷川潔展』文化庁／岐阜県立美術館との共催、1993年9月
- 『柳原義達展』東京国立近代美術館との共催、1993年11-12月
- 『ルフィーノ・タマヨ展』名古屋市美術館／京都新聞社との共催、1994年2-3月
- 『ギュスターヴ・モロー展』国立西洋美術館／NHKとの共催、1995年5-7月
- 『ピカソ 愛と苦悩—ゲルニカへの道展』東武美術館／朝日新聞社との共催、1995年10-12月
- 『身体と表現 1920-1980 (ポンピドゥー・センター所蔵品より)』東京国立近代美術館／NHKとの共催、1996年6-8月
- 『村岡三郎展』東京国立近代美術館との共催、1998年1-3月

2) 京都工芸繊維大学での担当科目

Enseignement à l'Institut de Technologie de Kyoto

学部講義：西洋美術史 (1回生)、デザイン史 (2回生)、近代造形史 (3回生)、博物館学 (3回生)

学部演習、他：総合意匠学演習、価値創造学演習「読解する」、「編集する」、ソーシャル・インタラクション・デザイン演習「キュレーション・オリエンテッド」、プロジェクト・デザインII「キュレーション」、プロジェクト・デザインIII分野別課題、プロジェクト・デザインIV (卒業研究)、デザイン・プラクシスIV「ポートフォリオ」

大学院博士前期課程講義：造形史特論 (→デザイン論特論→キュレーション)

ンとメディア)、展示デザイン特論(→展示と空間)

大学院博士前期課程演習、他：キュレーション講読演習、キュレーション
実地演習、価値創造学演習(→アドバンスデザインプロジェクトI,II)、
デザイン学特別講義A、B、修士論文指導

大学院博士後期課程講義、他：造形史論(→近現代美術史論)、博士論文指導

3) 最終講義 Conférence finale

「セザンヌとモダン・デザイン」

日時：2022年3月20日(日)14:00-16:00

場所 [対面]：京都工芸繊維大学60周年記念館1階記念ホール

オンライン配信：Webex Meeting

V. 社会活動 Activité sociale

1) 非常勤講師 Professeur non titulaire

1987-1988年(後期) 京都造形芸術短期大学(西洋美術史担当)

1993-1994年(後期) 京都大学総合人間学部人間学科(創造行為論担当)

1997-1998年(後期) 京都工芸繊維大学工芸学部造形工学科(西洋美術史
担当)

1999-2001年(通年) 京都大学文学部哲学科美学美術史学専攻/京都大学
大学院文学研究科思想文化学専攻美学美術史学専修(演習II担当)

2002年[前期集中講義] 神戸大学文学部社会文化美術史学専修(学部：美
術史特殊講義/近代造形史論担当)

2003-2004年(後期) 京都府立大学人間環境学部環境デザイン学科(デザ
イン史担当)

2006-2022年 京都大学文学部人文学科哲学基礎文化学系美学美術史学専
修/京都大学大学院文学研究科思想文化学専攻美学美術史学専修(演
習II担当[2013年度まで通年、2014年度~2022年3月は前期のみ]/
特殊講義担当[2018年度~2022年3月、後期のみ])

2002-2009年 関西大学文学部(学部：美学・美術史特殊講義a、b担当/
大学院(修士課程)：西洋美術史研究A、B担当)

2014-2018年 関西大学文学部(大学院修士課程：芸術表現論B担当)

2014-2020年 関西大学文学部(大学院博士課程:美学美術史特殊研究B担当)

2006-2022年 奈良教育大学教育学部(学部:西洋美術史I担当[前期、隔年]、西洋美術史II担当[前期、隔年] /美術概論担当[前期]、大学院:美術史・美術理論特論(西洋)担当[前期集中、隔年] /美術史・美術理論特論(美学芸術学)担当[後期集中])

2007-2011年、2015-2018年、2021-2022年(後期) 同志社大学文学部(西洋美術史(2)担当)

2020-2022年(後期) 京都市立芸術大学美術学部(美術史特講I担当)

2) 学会 Société savante

1. 所属学会 Société savante d'appartenance

美術史学会、ジャポニズム学会、日仏美術学会、意匠学会、美学会、国際美学会、日本評論家連盟、ポール・セザンヌ協会(Société de Paul Cézanne、フランス共和国)

2. 幹事、委員 Secrétaire, Commissaire

第1回世界博物館・美術館京都会議運営委員(1994年)

第2回世界博物館・美術館京都会議運営委員(1997年)

意匠学会会計幹事(1998年度-2000年度)

意匠学会委員(学会賞委員会)(2011年度~2013年度)

美学会編集幹事(1998年度)

美学会委員(編集委員会及び委員長、若手研究者フォーラム委員会及び委員長)(2007年度~2019年度)

美術史学会(編集委員会、例会担当、辻佐保子美術史学振興基金運営委員会)(2010年度~2012年度、2015年度~2019年度)

ポール・セザンヌ協会常任委員(2016年度~現在)

日仏美術学会常任委員(2015年度~現在)

独立行政法人日本学術振興会科学研究費委員会専門委員(1段 美術史)(2016~2017年度)

3) 各種賞推薦人 Parrainage de divers prix

京都新聞社展「日本画賞」：1990年度

京都賞（公益財団法人 稲盛財団）：第22回（2006）、第26回（2010）、第30回（2014）、第34回（2018）

京都美術文化賞（公益財団法人 中信美術奨励基金）：第24回（2011年度）～第32回（2019年度）

VI. 学位論文

Mémoire de licence, mémoire de maîtrise, thèse de doctorat

1) 日本語 En japonais

『セザンヌの芸術について』（京都大学文学部卒業論文）、1-50頁、1980年1月提出

『セザンヌ晩年の制作活動—その探求の意義と位置付け』（京都大学大学院文学研究科博士前期課程修士論文）、1-409頁、1982年1月提出

『セザンヌ受容の研究』（京都大学大学院文学研究科博士号請求論文）、1-430頁、2005年9月提出

2) 外国語 En langues étrangères

Le problème de la marge chez Cézanne pour l'introduction de l'histoire des matières et des matériaux picturaux aux XIXe et XXe siècles (Diplôme d'études approfondies pour l'histoire et la civilisation: l'histoire de l'art, IIIe cycle de l'université de Provence sous la direction de Dr. Gérard Monnier, mai 1984, pp. 1-61.

VII. 著作 Ouvrages

1) 単著 Auteur unique

『ジュニア・ガイドブック 京都国立近代美術館』（執筆・編集）、京都国立近代美術館、1994年3月（再版、1995年3月）

『美術との出会いがきつと楽しくなる所蔵作品基礎知識 京都国立近代美術館 ガイドブック』（1995年版の改訂版、英語表記付き）（執筆・編集）、京都国立近代美術館、1997年3月

『モダン・アート論再考—制作の論理から』思文閣出版、2004年4月（2017年3月、2刷）

『セザンヌ受容の研究』中央公論美術出版、2007年2月（2006（平成18）年度独立行政法人日本学術振興会科学研究費補助金 研究成果公開促進費〈学術図書〉による出版）

『もっと知りたいセザンヌ』東京美術、2012年3月（2019年8月、4刷）

『絵画における真実—近代化社会に対するセザンヌの実践の意味』三元社、2022年3月（2021（令和3）年度独立行政法人日本学術振興会科学研究費助成事業 研究成果公開促進費〈学術図書〉による出版）

2) 編著 Éditions

『越境する造形—近代の美術とデザインの十字路』（共著）晃洋書房、2003年11月（2016年4月、5刷）

『フランス近代美術史の現在—ニュー・アート・ヒストリー—後の視座から』（共著）三元社、2007年8月（2013年4月、2刷）

『デザインの力』（共著）晃洋書房、2010年11月（2015年4月、2刷）

『美術フォーラム 21 特集：日本におけるフランス—創造的受容』（共著）醍醐書房、2011年6月

『探求と方法 フランス近現代美術史を解剖する—文献学・美術館行政から精神分析・ジェンダー論以降へ』（国際共著）晃洋書房、2014年3月

『〈場所〉で読み解くフランス近代美術』（共著）三元社、2016年10月

『セザンヌ 近代絵画の父、とは何か?』（国際共著）三元社、2019年7月

3) 共編著 Co-éditions

『ピカソと人類の美術』（国際共著、大高保二郎との共編）三元社、2020年3月（2018年度公益財団法人鹿島美術財団美術振興事業 美術に関する出版援助による出版）

4) 共著 Ouvrages collectifs

1. 単行書 Livres

i. 日本語 En japonais

『セザンヌ』（朝日グラフ別冊美術特集 西洋編6）島田紀夫 編、朝日新聞社、1988年12月

『芸術学ハンドブック』神林恒道 編、勁草書房、1989年4月

『芸術の理論と歴史—吉岡健二郎先生退官記念論文集』京都大学文学部美学美術史学研究室 編、思文閣出版、1990年3月

『世界美術大全集 第23巻 後期印象派時代』池上忠治 編、1993年3月

『芸術学フォーラム—2 芸術学の射程』原田平作／岩城見一／神林恒道 共編、勁草書房、1995年7月

『パリで出会う名画50』高階秀爾 監修、小学館、1996年

『現代美術館学』並木誠士／米屋優／吉仲光代 共編、昭和堂、1998年5月

『美学・芸術学の今日的課題「日本に於ける美学・芸術学の歩みと課題」＋〈病〉の感性学』岩城見一 編、美学会、1999年

『シリーズ・近代日本の知 第4巻 芸術／葛藤の現場』岩城見一 編、晃洋書房、2002年5月

ii . 外国語 En langues étrangères

A Companion to Impressionism, ed. André Dombrowski, Wiley Publishers, New York, 2021.

2. 展覧会図録 Catalogues d'expositions

『ヨーロッパのレース展』内山武夫 編、京都国立近代美術館、1987年10月

『荻須高德遺作展』太田泰人 編、神奈川県立近代美術館／朝日新聞社、1988年10月

『フランス絵画の精華ール・サロンの巨匠達』池上忠治 監修、京都国立近代美術館／福岡市美術館／アジア太平洋博覧会協会／日本経済新聞社、1989年3月

『移行するイメージ:1980年代の映像表現展』河本信治 編、京都国立近代美術館、1990年9月

『ゴッホと日本展』永井隆則 編、京都国立近代美術館／世田谷美術館／テレビ朝日、1992年2月

『フランス近代絵画展』木村重信／原田平作 共編、ナビオ美術館、1992年9月

『京都国立近代美術館創立30周年記念展 近代の美術—所蔵作品による』京都国立近代美術館 編、京都国立近代美術館、1993年4月

『絵画の流れ—伝統と革新展』（平成6年度国立博物館・美術館地方巡回展図録）、文化庁 編、1994年7月

『日本の美—伝統と近代展』京都国立近代美術館 編、京都国立近代美術館、1994年10月

『ピカソ 愛と苦悩—ゲルニカへの道展』神吉敬三／大高保二郎 監修、永井隆則／岸本美香子 編、東武美術館／朝日新聞社、1995年10月

『近代日本の美術—東洋と西洋のはざまに展』（平成7年度国立博物館・美術館地方巡回展図録）、文化庁 編、1995年11月

『近代絵画の歩み—目と心の窓展』（平成8年度国立博物館・美術館地方巡回展図録）、文化庁 編、1997年1月

『変貌する世界—日本の現代絵画 1945年以降』（平成9年度国立博物館・美術館地方巡回展図録）、文化庁 編、1997年11月

『バリ・オランジュリー美術館展』木島俊介 編、日本テレビ／文化村ザ・ミュージアム、1998年11月

『セザンヌ主義 父と呼ばれる画家への礼賛展』新畑泰秀 編、横浜美術館／日本テレビ放送網、2008年11月

『コートールド美術館展 魅惑の印象派』大橋菜都子 編、東京都美術館／朝日新聞社／NHK、NHK プロモーション、2019年9月

『ロンドン・ナショナル・ギャラリー展』川瀬佑介／バート・コーネリス 監修、川瀬佑介 編、国立西洋美術館／読売新聞東京本社、2020年3月

5) 辞典 Dictionnaires

『美学の事典』丸善出版、2020年（分担：「フランス近代美術を中心とする、西洋近代美術の日本での受容」、258-261頁）

『フランス哲学・思想辞典』 ミネルヴァ書房、2023年(予定)(分担:「セザンヌ」)

6) 報告書 Bulletins

『1910年代前後の日本におけるセザンヌ(セザンヌ芸術の受容と紹介) “Cézannisme in Japan, 1902-1921”』 1989(平成元)年度文部省科学研究費補助金 奨励研究(A)研究成果報告書、永井隆則 編、永井隆則(京都国立近代美術館)、1990年3月、1-34頁

『'97世界博物館・美術館京都会議 会議報告書』 永井隆則 他編、京都新聞社事業局、1999年3月1日、1-100頁

『1930-40年代の日本におけるセザンヌの受容 Cézannisme in Japan 1922・1-1947・1』 1998(平成10)-2001(平成13)年度文部省科学研究費補助金 基盤研究(C)研究成果報告書、永井隆則 編、永井隆則(京都工芸繊維大学)、2002年3月、1-94頁

『1930-40年代日本に於けるセザンヌ解釈誕生の環境』 2003(平成15)-2004(平成16)年度独立行政法人日本学術振興会科学研究費補助金 基盤研究(C)研究成果報告書、永井隆則 編、永井隆則(京都工芸繊維大学)、2005年3月、1-92頁

『シンポジウム 「セザンヌーパリとプロヴァンス」展から見る今日のセザンヌ』(記録集)(共著) 国立新美術館 編・刊、2013年3月(永井隆則:基調講演「セザンヌ研究の現在—研究史から見る今日のセザンヌ像」8-33頁)

『中部大学民俗資料博物館連続講演記録2015』 中部大学民俗資料博物館 編・刊、2016年5月(永井隆則「アール・ヌーヴォーと植物、女性の表象 “Art Nouveau and the plants, women”」27-43頁)

VIII. 学術論文 Articles académiques

1) 日本語 En japonais

1. 雑誌等、掲載論文 Dans les revues

「セザンヌと後世代」『京都大学文学部 美学美術史研究室 研究紀要』第4号、美学美術史研究室 編、1983年3月、23-53頁（査読付）

「セザンヌに於ける地の問題」『美学』第150号第38巻第2号、美学会 編、1987年10月、49-63頁（査読付）

「ジェリコーの彫刻」『京都国立近代美術館年報 昭和62年』京都国立近代美術館 編、1989年3月、89-100頁

「マティエリスム／モデルニテ：19世紀半ば以降のフランス美術に於ける素描技法の絵画技法への侵入」『美学』第177号第45巻第1号、美学会 編、1994年6月、42-52頁（査読付）

「日本に於けるセザンヌ受容史の一断面—1920年代初頭の人格主義的セザンヌ像の形成と行方」『ユリイカ 特集=還ってきたセザンヌ』第28巻第11号（通巻379号）、1996年9月、188-198頁

「1920年代初頭のフランスと日本のセザニスム—知覚主義からフォルマリスムへ／知覚主義から人格主義へ」『鹿島美術研究』年報第13号別冊、財団法人鹿島美術財団 編、1996年11月、173-187頁

「アンリ・マティスの絵画と装飾」『デザイン理論』第38号、意匠学会 編、2000年1月、1-14頁（査読付）

「1920年代日本の人格主義セザンヌ像の美的根拠とその形成に関する思想及び美術制作の文脈について」『美術研究』第375号、独立行政法人文化財研究所 東京文化財研究所 編、2002年3月、38-56（336-354）頁（査読付）

「高村光太郎の印象主義論」『美術フォーラム 21 特集：印象派研究大全：日本と韓国における受容』第7号、醍醐書房 編、2002年11月、141-146頁（査読付）

「写実」のセザンヌ受容とその思想環境『京都工芸繊維大学工芸学部紀要 人文』第52号、京都工芸繊維大学、2004年3月、43-72頁（査読付）

「造型」のセザンヌ受容とその思想環境『京都工芸繊維大学工芸学部紀要 人文』第53号、京都工芸繊維大学、2005年3月、63-92頁（査読付）

「日本主義」のセザンヌ受容とその思想環境『京都工芸繊維大学工芸学部紀要 人文』第54号、京都工芸繊維大学、2006年3月、79-112頁（査読付）

「日本におけるフランス—創造的受容—「フランシスム」研究の構築に向けて」『美術フォーラム 21 特集：日本におけるフランス—創造的受容』第23号、醍醐書房 編、2011年5月、24-26頁（査読付）

「須田国太郎と西洋近現代美術—孤高か共鳴か？」『美術フォーラム 21 特集：日本におけるフランス—創造的受容』第23号、醍醐書房 編、2011年5月、153-158頁（査読付）

「セザンヌの描いた女性像」『ユリイカ 特集=セザンヌにはどう視えているか』第44巻第4号（通巻609号）、2012年4月号、80-97頁

「セザンヌ研究の現在—研究史から見る今日のセザンヌ像」『シンポジウム「セザンヌ—パリとプロヴァンス」展から見る今日のセザンヌ』（記録集）（共著）国立新美術館 編・刊、2013年3月、8-33頁

「文献学—セザンヌの友情の行方をにぎる手紙を解説せよ！」『美術手帖 特集：世界—受けたい印象派の授業』第66巻第1008号、2014年8月、82-87頁

「セザンヌに於ける〈模写〉の意味」『美術フォーラム 21 特集：模写と臨書—日本を基調にして東西の視覚文化の特性を考えてみる』第31号、醍醐書房 編、2015年5月、114-123頁（査読付）

「セザンヌの資料環境構築の現状」『美術フォーラム 21 特集：美術に関する知の蓄積と共有化に向けて：人と美術の関わりの豊かさとその語りの確かさのために』第35号、醍醐書房 編、2017年5月、89-99頁（査読付）

「書の美学とフランス近代美術」『美術フォーラム 21 特集：書の領分—今、書をどう見るか』第39号、醍醐書房 編、2019年7月、57-64頁（査読付）

「セザンヌ・コレクションの社会学」『美術フォーラム 21 特集：コレクターの眼差し—モノの向こうに何を見るか』42号、醍醐書房 編、2020年12月、28-35頁（査読付）

「セザンヌの「彩る感覚」からマチスの「装飾」へ」『ユリイカ』第53巻第5号（通巻773号）、2021年5月号、142-153頁

2. 単行書掲載論文 Dans les livres

「セザンヌに於ける時間の問題」『芸術の理論と歴史—吉岡健二郎先生退官記念論文集』（共著）京都大学文学部美学美術史学研究室 編、思文閣出版、1990年3月、385-394頁

「新印象主義」『世界美術大全集 第23巻 後期印象派時代』池上忠治 編、小学館、1993年3月、253-272頁

「美術展の批評的機能—現代に於ける美術館のひとつの可能性」『芸術学フォーラム—2 芸術学の射程』原田平作／岩城見一／神林恒道 共編、勁草書房、1995年7月、246-264頁

「1930年代日本のセザンヌ受容—「人格」から「造型」へ」『美学・芸術学の今日的課題「日本に於ける美学・芸術学の歩みと課題」+〈病〉の感性

学』美学会 編、1999年3月、17-26頁

「1910-20年代京都に於ける美術批評と芸術論」『シリーズ・近代日本の知第4巻 芸術／葛藤の現場』岩城見一 編、晃洋書房、2002年11月、103-120頁

「セザンヌとモダン・デザイン」『越境する造形—近代の美術とデザインの十字路』永井隆則 編、晃洋書房、2003年11月、28-45頁

「セザンヌの素描と身体—精神分析美術史を越えて」『フランス近代美術史の現在—ニュー・アート・ヒストリー—後の視座から』（共著）永井隆則 編、三元社、2007年8月、119-162頁

「アール・ヌーヴォーと生命主義」『デザインの力』（共著）永井隆則 編、晃洋書房、2010年11月、17-35頁

「シャピロからカルマイヤーまで—セザンヌの社会史研究の可能性」『探求と方法 フランス近現代美術史を解剖する—文献学・美術館行政から精神分析・ジェンダー論以降へ』永井隆則 編、晃洋書房、2014年3月、163-186頁

「セザンヌとジャズ・ド・ブッフアン—〈親密さ〉の表象」『〈場所〉で読み解くフランス近代美術』永井隆則 編、三元社、2016年10月、97-140頁

「セザンヌに変身するピカソ」『ピカソと人類の美術』大高保二郎／永井隆則 編、三元社、2020年3月、161-180頁

3. 展覧会図録掲載論文 Dans les catalogues d'expositions

「ゴッホの油絵画・デッサンと日本美術—ゴッホが日本美術に見たもの」『ゴッホと日本』（展覧会図録）、京都国立近代美術館、1992年2月18日-3月29日、永井隆則 編、テレビ朝日、1992年2月、169-191頁

「ピカソとミノタウロス」『ピカソ 愛と苦悩—ゲルニカへの道』(展覧会図録)、京都国立近代美術館、1995年10月31日-1995年12月17日、神吉敬三／大高保二郎 監修、永井隆則／岸本美香子 編、東武美術館／朝日新聞社、1995年10月、137-187頁

「なぜ、日本人はフランス近代絵画を愛好するのか？」『パリ・オランジュリー美術館展』(展覧会図録)、京都国立近代美術館、1999年9月21日-1999年11月14日、木島俊介 編、日本テレビ／文化村ザ・ミュージアム、1998年11月、189-194頁

「日本における「セザンヌ主義」—日本人画家によるセザンヌ受容(1905-45)に関する試論」『セザンヌ礼賛 父と呼ばれる画家への礼賛』(展覧会図録)、横浜美術館、2008年11月11日-2009年1月25日、新畑泰秀 編、横浜美術館／日本テレビ放送網、2008年11月、21-27頁

「セザンヌのアルカディア—プロヴァンス」『コートールド美術館展 魅惑の印象派』(展覧会図録)、東京都美術館、2019年9月10日~12月15日、大橋菜都子 編、朝日新聞社／NHK／NHKプロモーション、2019年9月、68-73頁

「ベルナル宛セザンヌ書簡」『コートールド美術館展 魅惑の印象派』(展覧会図録)、東京都美術館、2019年9月10日~12月15日、大橋菜都子 編、朝日新聞社／NHK／NHKプロモーション、2019年9月、75-98頁

「イギリスにおけるフランス近代絵画—英仏の往還」『ロンドン・ナショナル・ギャラリー展』(展覧会図録)、国立西洋美術館、2020年6月18日~2020年10月18日、川瀬佑介／バート・コーネリス 監修、川瀬佑介 編、読売新聞東京本社／国立西洋美術館、2020年3月、192-197頁

2) 外国語 En langues étrangères

van Gogh's oil paintings, drawings and japanese art—what van Gogh saw in japanese art, *Vincent van Gogh and Japan* (Exh. Cat.), The National

Museum of Modern Art, Kyoto, 18 February 1992–29 March 1992, The National Museum of Modern Art, Kyoto/Setagaya Art Museum/Televi Asahi, February 1992, pp. 182–191.

Picasso and Minotaur, *The love and the anguish—The road to Guernica* (Exh.Cat.), The National Museum of Modern Art, Kyoto, 31 October 1995–17 december 1995, The National Museum of Modern Art, Kyoto / Tobu Museum of Art/Asahi Shimbun, October 1995, pp. 347–352.

An Aspect of Cézanne Reception in Japan—The Formation and Development of “Personalist” Interpretation of Cezanne in the 1920’s, 国際版『美学』 *Aesthetics*, Vol. 8, March 1998, pp. 79–91 (査読付) .

Cézanne and Time, *XVth—International Congress for Aesthetics, 2001* (CD-ROM) , Society of Aesthetics International, March 2002 (査読付) .

Cézanne’s Reception in Japan during the 1930’s—from “Personality (Jinkaku) ”to“Plastique (Formality/Zokei) ”、『1930–40年代の日本におけるセザンヌの受容 Cézannisme in Japan 1922・1–1947・1』(平成10–13年度文部科学省科学研究費補助金基盤研究(c)(2)研究成果報告書)(永井隆則 編)、永井隆則(京都工芸繊維大学)発行、2002年3月、67–74頁

Reconsidering Modern Art Thoery: Reading Richard Schiff’s ‘Digital Experinec in Modern Art’、『京都工芸繊維大学工芸学部紀要 人文』第51号、京都工芸繊維大学、2003年3月、67–94頁(査読付) .

Recherche sur la reception de Cézanne au Japon et ses perspectives à venir 『日仏美術学会会報 (*Bulletin de la société franco-japonaise d’art et d’archéologie*)』第27号(2007年度)、日仏美術学会 編、2008年5月31日、pp. 33–44 (査読付) .

Cézannisme in Japan: A Study of the reception of Cézanne by Japanese

Artists(1905-45), *Homage to Cézanne—His Influence on the Development of Twentieth Century Painting* (Exh. Cat.), Yokohama Museum of Art, 11 November 2008-25 January 2009, Yokohama Museum of Art/Nippon Television Network Corporation, November 2008, pp. 205-210.

How Paul Cézanne rejected the fini concept, *Kyoto Studies in Art History*, No. 2, Kyoto University, March 2017, pp. 133-148 (査読付).

What Copying Meant to Cézanne, 国際版『美学』*Aesthetics* (オンライン版), No. 21, 美学会, February 2018, pp. 111-125 (査読付).

Cezanne et Jas de Bouffan—Représentation de l'intimité, *Les actes du colloque international: Cezanne, Jas de Bouffan—Art et Histoire*, février 2020

(<https://www.societe-cezanne.fr/2020/02/14/cezanne-et-jas-de-bouffan-representation-de-lintimite-takanori-nagai/>).

Zola accuse par sa plume, Cezanne par son pinceau, *Les actes du colloque international :Peut-on parler d'une amitié créative entre Cezanne et Zola?*, mai 2020

(<https://www.societe-cezanne.fr/2020/05/06/zola-accuse-par-sa-plume-cezanne-par-son-pinceau/>).

French Modern Painting in Britain—Anglo—French Exchange, *Masterpieces From The National Gallery, London*(Exh. Cat.), The National Museum of Western Art, 18 June-18 October 2020, The National Museum of Western Art/The Yomiuri Shimbun, March 2020, pp. 301-304.

Cézanne chez Gauguin, 国際版『美学』*Aesthetics* (オンライン版), No. 24, 美学会, March 2021, pp. 27-46 (査読付).

Cezanne's Arcadia-Provence, *La page d'accueil de la société de Paul*

Cezanne, 18 juillet 2021,

<https://www.societe-cezanne.fr/2021/07/18/cezannes-arcadia-provence-takanori-nagai/>

Impressionism in Japan: Awakening of the senses, *A Companion to Impressionism*, ed. André Dombrowski, Wiley, New York, 2021, pp. 452-465.

L'idée de l'anti-modernisation sociale chez Cézanne、『学術報告書(*Bulletin of Kyoto Institute of Technology*)』(京都工芸繊維大学紀要)第14巻、2022年2月、pp. 71-107 (査読付)。

La théorie de l'art chez Cézanne dans sa correspondance、『学術報告書(*Bulletin of Kyoto Institute of Technology*)』(京都工芸繊維大学紀要)第15巻、2023年2月 (à paraître) (査読付)。

IX. 小論 Essais courts

「ジェリコーのロマン主義と革新性」『視る』第249号、京都国立近代美術館、1988年3月、2-4頁

「荻須一親密さの美学」『視る』第260号、京都国立近代美術館、1989年2月、4-6頁

「ル・サロンの巨匠たち フランス絵画の精華」二つの展覧会『視る』第265号、京都国立近代美術館、1989年7月、6-8頁

「モランディ芸術の形成と展開」『視る』第275号、京都国立近代美術館、1990年5月、3-6頁

「マティエリスム／モダニスム—19世紀半ば以降に於ける素描技法の絵画技法への侵入」『視る』第300号、京都国立近代美術館、1992年6月、4-7頁

「「形象のはざま」展に寄せて—漱石の『草枕』に見る近代絵画論」『視る』第306号、京都国立近代美術館、1992年12月、2-5頁

「ギュスターヴ・モロー（1826-1898）の芸術論—批評空間の中でのモロー像（1）」『視る』第336号、京都国立近代美術館、1995年6月、2-3頁

「ギュスターヴ・モロー（1826-1898）の芸術論—批評空間の中でのモロー像（2）」『視る』第337号、京都国立近代美術館、1995年7月、2-4頁

「〈研究ノート〉ピカソ芸術の本質と魅力（1）」『視る』第344号、京都国立近代美術館、1996年2月、2-4頁

「〈研究ノート〉ピカソ芸術の本質と魅力（2）」『視る』第345号、京都国立近代美術館、1996年3月、2-4頁

「私の村岡体験」『視る』第366号、京都国立近代美術館、1998年1月、3-6頁

「日本に於けるセザンヌ受容史」『美術手帖（特集 新セザンヌ解剖学—いま「近代絵画の父」からなにを学べるか?）』第51巻第777号、1999年10月、68-69頁

「越境する造形—近代の美術とデザインの十字路口」『越境する造形—近代の美術とデザインの十字路口』（共著）、永井隆則 編、晃洋書房、2003年11月、2-7頁

「私のノートから—モダン・アートと日本」『鴨東通信』四季報No.53、思文閣出版、2004年4月、6頁

「フランス近代美術と日本」『国立国際美術館ニュース』第152号、国立国際美術館、2006年2月、2-3頁

「ロダン—創造の秘密—白と黒の世界」展に寄せて—ロダン、セザンヌ、リルケ』『Art Ramble アートランブル』Vol.15、兵庫県立美術館、2007年6月、4-5頁

「序論」『フランス近代美術史の現在—ニュー・アート・ヒストリー以後の視座から』(共著)、永井隆則 編、三元社、2007年8月、7-21頁

「竹喬のセザンヌ受容再考」『東京国立近代美術館ニュース 現代の眼—特集「生誕120年 小野竹喬」展によせて 竹喬と西洋近代絵画—そこからなにを学んだか』第580号、独立行政法人東京国立近代美術館、2010年2-3月、2-3頁

「はじめに」『デザインの力』(共著)、永井隆則 編、晃洋書房、2010年11月、i-viii頁

「セザンヌのバリ滞在の意味」『国立新美術館ニュース』第22号、国立新美術館、2012年5月、2-3頁

「はじめに」『探求と方法 フランス近現代美術史を解剖する—文献学・美術館行政から精神分析・ジェンダー論以降へ』(共著)永井隆則 編、晃洋書房、2014年3月、i-vi頁

「まえがき」『〈場所〉で読み解くフランス近代美術』(共著)、永井隆則 編、三元社、2016年10月、4-6頁

「世界に誇る吉野石膏コレクション 印象派からその先へ」展に寄せて』『Art Ramble アートランブル』Vol. 63、兵庫県立美術館、2019年7月、4-5頁

「デザインの現在」『須田記念 視覚の現場』第5号、一般財団法人 きょうと視覚文化振興財団 編・刊、2021年8月、60-62頁

X. 解説 Commentaires

「荻須高德のことば抄」『視る』第260号、京都国立近代美術館、1989年2月、7-8頁

「タブロー」『芸術学ハンドブック』神林恒道 編、勁草書房、1989年4月、166-170頁

「展示する、コラム⑥工作業者、コラム⑦美術品取扱専門業者」『現代美術館学』（共著）並木誠士／米屋優／吉仲光代 共編、昭和堂、1998年5月、119-147頁

「海外美術展の現状と問題点」『現代美術館学』（共著）並木誠士／米屋優／吉仲光代 共編、昭和堂、1998年5月、200-207頁

「模索する美術館—研究機関として」『現代美術館学』（共著）並木誠士／米屋優／吉仲光代 共編、昭和堂、1998年5月、398-415頁

XI. 報告 Rapports

「ヨーロッパ美術館調査報告」永井隆則（北村知之と共同作成）、文化庁文化部長主催『新しい美術展示施設等総合文化施設の在り方に関する調査研究会』非公開、1991年7月

「欧米の美術館活動—保存・修復・企画・公開・展示・研究」『視る』第302号、京都国立近代美術館、1992年8月、4-7頁

「京都国立近代美術館 ピカソ愛と苦悩—『ゲルニカ』への道」『文化庁月報』（10）（325）、1995年10月、42頁

「フランス近代美術史研究における社会史、フェミニズム理論の可能性」（「美術に関する国際交流援助」研究報告；2008年度助成；外国人研究者招致）

『鹿島美術財団年報』第27号(別冊)(2009年度)、2010年11月、584-585頁

「ピカソ芸術の研究」(「美術に関する国際交流援助」研究報告;2016年度助成;外国人研究者招致)『鹿島美術財団年報』第35号(別冊)(2016年度)、2018年11月、430-436頁

「ゾラの美術批評の再検討」『*Annual Report of The Murata Science Foundation*』No.31、公益財団法人 村田学術振興財団、2017年6月、513-516頁

「エクス・アン・プロヴァンス、セザンヌ研究・資料センターの開設」『須田記念 視覚の現場』第1号、2019年11月、83-85頁

「セザンヌ芸術の展開にジャズ・ド・ブッフアンのセザンヌ家旧邸を中心とするエクス・アン・プロヴァンスの環境がもたらした創造的作用に関する研究」(「美術に関する国際交流援助」研究報告;2019年度助成;海外派遣)『鹿島美術財団年報』第37号(別冊)(2019年度)、2020年11月、646-650頁

「国際シンポジウムーポスト印象派におけるユートピアの表象」『日仏美術学会会報』第39号(2019年度)、2020年5月、76-85頁

「国際シンポジウムー西洋美術におけるユートピアの表象」『日仏美術学会会報』第40号(2020年度)、2021年11月、131-132頁

「国際シンポジウム「西洋美術におけるユートピアの表象」(International Symposium-Representations of Utopia in Western Art)」『*Annual Report of The Murata Science Foundation*』No.35、公益財団法人 村田学術振興財団、2021年6月、283-284頁

「国際シンポジウム「ポスト印象派から後世代に継承されたユートピアの表

象」(Colloque international: L'héritage utopique de Cézanne, van Gogh et Gauguin à Signac, et à Matisse)」『*Annual Report of The Murata Science Foundation*』No.36、公益財団法人 村田学術振興財団、2022年(近刊)

XII. 書評、新刊紹介

Comptes-rendus de livres, présentation de nouvelles parutions

1) 書評 Comptes-rendus de livres

「ジョン・リオルド著『セザンヌとアメリカ』(John Rewald, *Cézanne and America: Dealers, Collectors, Artists and Critics 1891-1921*, Thames and Hudson Ltd., London, 1989)」『美術手帖』第41巻第614号、1990年9月、289頁

「坂上桂子著『夢と光の画家たち—モデルニテ再考』(スカイドア、2000年)」『美術フォーラム(特集〈生と死〉と芸術)』第8号、醍醐書房編、2003年11月、145-149頁(査読付)

「稲賀繁美編『伝統工芸再考 京のうちそと—過去発掘・現状分析・将来展望』(思文閣出版、2007年)」『デザイン理論』第52号、意匠学会編、2008年5月、146-148頁(査読付)

「セザンヌ研究の可能性—『ポール・セザンヌ〈サント・ヴィクトワール山〉』(ゴットフリート・ベーム著 岩城見一・実淵洋次訳 岩城見一解説、三元社、2007年)を読む』『日仏美術学会会報』第28号(2008年度)、2009年7月、33-38頁(査読付)

「宮崎克己著『西洋絵画の到来』(日本経済新聞社、2007年)」『美学』第234号第60巻第1号、2009年6月、168-170頁(査読付)

「大野芳材編著『装飾と建築：フォンテーヌブローからルーヴシエヌへ』(ありな書房、2013年)—〈場所〉で読み解く近世美術の豊饒さ』『図書新聞』第3137号、2013年11月、5面

『セザンヌ＝ゴッホ往復書簡』（法政大学出版局、2019年）偉大な芸術家二人の交流を復元する試み』『図書新聞』第3438号、2020年3月、6面

2) 新刊紹介 Présentation de nouvelles parutions

「ゴットフリート・ベーム（岩城・実淵訳）『セザンヌーサント・ヴィクトワール山』（三元社、2007年）」『美学』第233号第59巻第2号、2008年12月、172頁（査読付）

XIII. 展覧会解説 Commentaires d'expositions

1) 日本語 En japonais

「ジェリコー展 徹底したリアリストの魂」『読売新聞』1988年1月27日（夕刊）、6面

「パリ再構築への喜び 荻須高德展鑑賞の手引き」『朝日友の会 朝日メイト』第132号（1989年3月1日号）、株式会社朝日販売サービスセンター、1989年3月1日、2頁

「ヴァチカン美術館特別展 2500年の信仰と美 62点厳選」『読売新聞』1989年8月3日（夕刊）、10面

「ゴッホと日本展」『新美術新聞』第629号、1992年2月21日号、1面

「ゴッホと浮世絵 作品にみる日本とのかかわり」『滋賀民報』第1093号、1992年2月23日、4面

「「ゴッホと日本」展 日本美術を基礎としたゴッホ芸術」『文部時報』No.1382、文部省 編集、1992年2月、82頁

「ゴッホと日本展 鑑賞の手引き ふれあう美意識」『アサヒメイト』第168号、朝日友の会事務局アサヒメイト編集室、1992年3月1日、2頁

「ゴッホのジャポニズムと近代絵画運動—展覧会に寄せて」『朝日新聞』、
1992年3月4日(朝刊)、20面

「随想 『ゴッホと日本』展の教えるもの—異文化、その模倣と創造への道」
『日本工業新聞』第14389号、1992年3月23日、32面

「ゴーギャンとル・ブルデュの画家たち」展から《下》—近代絵画揺籃の地
に」『毎日新聞』1992年7月15日(夕刊)、1面

「五つのテーマでたどるピカソという巨大な宇宙」(コラムタイトル「Tea
Time Art」)『THE GOLD』10月号、第12巻第14号(通巻140号)、小学
館・第11編集部企画室／THE GOLD編集部 企画・編集、株式会社ジェー
シービー、1995年10月1日、57頁

「京都国立近代美術館「ピカソ 愛と苦悩—『ゲルニカ』への道」」『文化庁
月報』第325号、ぎょうせい、1995年10月、43頁

「セザンヌ展」『美術フォーラム 特集：21世紀へのまなざし：美術館・コ
レクター・画廊の現場から』第3号、醍醐書房 編、2000年11月、147-150
頁(査読付)

「(海外文化) セザンヌ展に仏沸く 没後100年、二つの企画」『朝日新聞』、
2006年9月4日(夕刊)、4面

「セザンヌ没後百年展：『セザンヌとピサロ 1865-1885』展(ニューヨーク
近代美術館、2005年6月-9月ほか)／『プロヴァンスのセザンヌ』展(ワ
シントン・ナショナル・ギャラリー、2006年1月-5月ほか)」『西洋美術研
究 特集「芸術家伝説」』第13号、三元社、2007年7月、249-257頁

「(海外文化) 理解しやすい画家像提示 パリ・NYでクールベ回顧展」『朝
日新聞』、2008年3月5日(夕刊)、11面

「ピカソの現代性明らかに 巨匠らとの比較展示で関連示唆」『読売新聞』、2009年1月29日（夕刊）、5面

「セザンヌ主義 父と呼ばれる画家への礼賛展」『視覚の現場 四季の綻び』Vol.1、2009年5月、34-35頁

2) 外国語 En langues étrangères

Cézanne and the Past (Exhibition Review), *SZEPMUVESZETI MUZEUM BUDAPEST, Hungary*, 2012/116-117, *SZEPMUVESZETI MUZEUM BUDAPEST*, December 2013, pp. 164-165.

XIV. 展覧会の記録記事 Articles d'archives d'expositions

「ジェリコー展」『京都国立近代美術館年報 昭和62年』京都国立近代美術館 編、1989年、54-61頁

「荻須高德遺作展」『京都国立近代美術館年報 昭和63年』京都国立近代美術館 編、1990年3月、53-56頁

「ル・サロン（1667-1881）の巨匠たち フランス絵画の精華展」『京都国立近代美術館年報 平成元・2年度』京都国立近代美術館 編、1992年11月、19-23頁

「ヴァチカン美術館特別展—古代ギリシャからルネッサンス、バロックまで」『京都国立近代美術館年報 平成元・2年度』京都国立近代美術館 編、1992年11月、30-33頁

「現代美術への視点—色彩とモノクローム展」『京都国立近代美術館年報 平成元・2年度』京都国立近代美術館 編、1992年11月、46-48頁

「モランディ」『京都国立近代美術館年報 平成元・2年度』京都国立近代

美術館 編、1992年11月、53-56頁

「ブリューゲルとネーデルラント風景画展」『京都国立近代美術館年報 平成元・2年度』京都国立近代美術館 編、1992年11月、61-64頁

「写真の過去と現在展」『京都国立近代美術館年報 平成元・2年度』京都国立近代美術館 編、1992年11月、71-75頁

「フィレンツェ・ルネサンス：芸術と修復展」『京都国立近代美術館年報 平成3年度・4年度』京都国立近代美術館 編、1994年、23-26頁

「ゴッホと日本展」『京都国立近代美術館年報 平成3年度・4年度』京都国立近代美術館 編、1994年、40-43頁

「オーストラリア絵画の200年展」『京都国立近代美術館年報 平成3年度・4年度』京都国立近代美術館 編、1994年、52-55頁

「現代美術への視点：形象のはざまに展」『京都国立近代美術館年報 平成3年度・4年度』京都国立近代美術館 編、1994年、62-64頁

「ゴッガンとボン＝タヴァン派展」『京都国立近代美術館年報 平成5年度・6年度』京都国立近代美術館 編、1996年3月、19-22頁

「柳原義達展」『京都国立近代美術館年報 平成5年度・6年度』京都国立近代美術館 編、1996年3月、33-34頁

「ルフィーノ・タマヨ展」『京都国立近代美術館年報 平成5年度・6年度』京都国立近代美術館 編、1996年3月、40-41頁

「ギュスターヴ・モロー展」『京都国立近代美術館年報 平成7年度』京都国立近代美術館 編、1997年2月、15-19頁

「ピカソ 愛と苦悩—「ゲルニカ」への道展」『京都国立近代美術館年報 平成7年度』京都国立近代美術館 編、1997年2月、37-40頁

XV. 作家、作品解説 *Présentation d'artistes, d'œuvres*

「天才画家 美の遺産 京都ジェリコー展から—オリエントの男の肖像」『毎日新聞』、1988年2月16日(火)(朝刊)、21面

「天才画家 美の遺産 京都ジェリコー展から—死んだ若者の頭部」『毎日新聞』、1988年2月17日(水)(朝刊)、20面

「天才画家 美の遺産 京都ジェリコー展から—「ボクサー」のための習作」『毎日新聞』、1988年2月18日(木)(朝刊)、20面

「天才画家 美の遺産 京都ジェリコー展から—斜め後ろから見た黒人の頭部」『毎日新聞』、1988年2月19日(金)(朝刊)、20面

「ピエト・モンドリン作『コンポジション』(1929年)」『視る』第253号、京都国立近代美術館、1988年7月、2頁

「マルク・シャガール挿絵、ゴーゴリ著『死せる魂』」『視る』第254号、京都国立近代美術館、1988年8月、4頁

「ジョアン・ミロ作『モニュメントのためのプロジェクト』」『視る』第255号、京都国立近代美術館、1988年9月、4-5頁

『ル・サロン(1667-1881)の巨匠たち フランス絵画の精華展(鑑賞のてびき)』永井隆則 著／編、日本経済新聞社、1989年6月、1-21頁

「ピエト・モンドリン作『コンポジション』(1916年頃)」『視る』第279号、京都国立近代美術館、1990年9月、8頁

「ブリューゲルとネーデルラント風景画展から—ヤーコブ・ファン・ロイス
ダール 小川の見える森の風景(1650年代) 神秘的な自然表現」『朝日新
聞』、1990年8月9日(木)(朝刊)、18面

「ブリューゲルとネーデルラント風景画展から—ヤン・ファン・ホイエン
オーフェルスニーの眺め(1635年) 自然に鋭敏な感性」『朝日新聞』、1990
年8月11日(土)(朝刊)、20面

「ブリューゲルとネーデルラント風景画展から—ピーテル・ド・モレイ
ン 田舎の道(1628年?) 天候の変化に敏感」『朝日新聞』、1990年8月17日
(金)(朝刊)、20面

「現代美術の神話展 作品紹介—梱包された雑誌」『毎日新聞』、1991年1月
24日(木)(朝刊)、20面

「須田國太郎『アーヴィラ』『視る』第304号、京都国立近代美術館、1992
年10月、8頁

「作家紹介文(ヴァラリオ・アダミ、ピエール・アレシンスキイ、カレル・
アペル、フェルナンデス・アルマン、バルテュス、ジャン・バゼーヌ、ジャ
ン・シャルル=ブレ、バルダチーニ・セザール、マルク・シャガール、ガ
ストン・シェサック、アントニ・クラヴェ、ロベール・コンバス、ジャ
ン・デュビュッフエ、オリヴィエ・ドブレ、エルベ・ディ・ローザ、モー
リス・エステーブ、ジャン・フォートリエ、クリスチャン・ガルデル、
ハンス・アルトウング、ヴァシリ・カンディンスキイ、ピーター・クラゼ
ン、ユリ・クーパー、アンドレ・ランスコイ、シャルル・ラピック、フェ
ルナン・レジェ、アンドレ・マッソン、ジョルジュ・マチユウ、アンドレ・
ミノー、ジョアン・ミロ、パブロ・ピカソ、セルジュ・ポリアコフ、ジェ
ラルール・シュネーデル、ピエール・スーラージュ、ニコラ・ド・スタール、
エルベ・テレマック、ジェラルール・ティチュ=キヤルメル、プラム・ヴァ
ン・ヴェルデ、ゲール・ヴァン・ヴェルデ、ピエラ・ダ・シルバ、ザオ・
ウーキー)(原田平作、大升克美との分担執筆)『フランス近代絵画展 フ

ランス芸術の知性と情熱』ナビオ美術館、1992年9月3日-9月30日、毎日新聞社主催、ナビオ美術館・ファンデーションカジカワ 編集、毎日新聞社、1992年、16-95頁

「ジョルジュ・スーラ グランド・ジャット島の日曜日の午後」『世界美術大全集 第23巻 後期印象派時代』（共著）、池上忠治 編、小学館、1993年3月、435頁

「ジョルジュ・スーラ アニエールの水浴」『世界美術大全集 第23巻 後期印象派時代』（共著）、池上忠治 編、小学館、1993年3月、435-436頁

「ジョルジュ・スーラ グランキャンのオック岬」『世界美術大全集 第23巻 後期印象派時代』（共著）、池上忠治 編、小学館、1993年3月、436頁

「ジョルジュ・スーラ クールブヴァワの橋」『世界美術大全集 第23巻 後期印象派時代』（共著）、池上忠治 編、小学館、1993年3月、436-437頁

「ジョルジュ・スーラ ポーズする女、正面」『世界美術大全集 第23巻 後期印象派時代』（共著）、池上忠治 編、小学館、1993年3月、437頁

「ジョルジュ・スーラ サーカスの客寄せ」『世界美術大全集 第23巻 後期印象派時代』（共著）、池上忠治 編、小学館、1993年3月、437-438頁

「ジョルジュ・スーラ シャユ踊り」『世界美術大全集 第23巻 後期印象派時代』（共著）、池上忠治 編、小学館、1993年3月、438頁

「ジョルジュ・スーラ 化粧する若い女性」『世界美術大全集 第23巻 後期印象派時代』（共著）、池上忠治 編、小学館、1993年3月、438-439頁

「ジョルジュ・スーラ サーカス」『世界美術大全集 第23巻 後期印象派時代』（共著）、池上忠治 編、小学館、1993年3月、439頁

「ポール・シニャック 井戸端の女たち」『世界美術大全集 第23巻 後期印象派時代』（共著）、池上忠治 編、小学館、1993年3月、439頁

「ポール・シニャック コリウール風景」『世界美術大全集 第23巻 後期印象派時代』（共著）、池上忠治 編、小学館、1993年3月、440頁

「ポール・シニャック フェリックス・フェネオンの肖像」『世界美術大全集 第23巻 後期印象派時代』（共著）、池上忠治 編、小学館、1993年3月、440頁

「ポール・シニャック カヌーピエの笠松」『世界美術大全集 第23巻 後期印象派時代』（共著）、池上忠治 編、小学館、1993年3月、441頁

「マクシミアン・リュス 浜辺」『世界美術大全集 第23巻 後期印象派時代』（共著）、池上忠治 編、小学館、1993年3月、441頁

「アンリ＝エドモン・クロス 山羊のいる風景」『世界美術大全集 第23巻 後期印象派時代』（共著）、池上忠治 編、小学館、1993年3月、442頁

「ヤン・トーロップ 版画愛好家」『世界美術大全集 第23巻 後期印象派時代』（共著）、池上忠治 編、小学館、1993年3月、442頁

「メキシコの巨星 タマヨ展から(1) 一月に吠える犬」『京都新聞』、1994年3月1日(火)(夕刊)、8面

「メキシコの巨星 タマヨ展から(2) 一幸福な酔っ払い」『京都新聞』、1994年3月2日(水)(夕刊)、10面

「メキシコの巨星 タマヨ展から(3) 一大銀河」『京都新聞』、1994年3月3日(木)(夕刊)、10面

「メキシコの巨星 タマヨ展から(4) 一手をあげろ」『京都新聞』、1994年

3月4日(金)(夕刊)、10面

「メキシコの巨星 タマヨ展から(5)ーロックンローラー」『京都新聞』、1994年3月5日(土)(夕刊)、8面

「名画の華 セザンヌ「青い花瓶の花」」『ミセス』通巻第477号、文化出版局、1994年11月、10頁

「41 ミノタウロス」『ピカソ 愛と苦悩ーゲルニカへの道』(展覧会図録)、京都国立近代美術館、1995年10月31日-12月17日、神吉敬三／大高保二郎 監修、永井隆則／岸本美香子 編、東武美術館／朝日新聞社、1995年10月、148-149頁

「42 ミノタウロス」『ピカソ 愛と苦悩ーゲルニカへの道』(展覧会図録)、京都国立近代美術館、1995年10月31日-12月17日、神吉敬三／大高保二郎 監修、永井隆則／岸本美香子 編、東武美術館／朝日新聞社、1995年10月、150-151頁

「43 抱擁」「44 抱擁」『ピカソ 愛と苦悩ーゲルニカへの道』(展覧会図録)、京都国立近代美術館、1995年10月31日-12月17日、神吉敬三／大高保二郎 監修、永井隆則／岸本美香子 編、東武美術館／朝日新聞社、1995年10月、152-153頁

「45 アマゾンを攻撃するミノタウロス」『ピカソ 愛と苦悩ーゲルニカへの道』(展覧会図録)、京都国立近代美術館、1995年10月31日-12月17日、神吉敬三／大高保二郎 監修、永井隆則／岸本美香子 編、東武美術館／朝日新聞社、1995年10月、154-155頁

「46 酒を飲むミノタウロスと横たわる女」「47 酒を飲むミノタウロスと二人のモデルを伴う彫刻家」『ピカソ 愛と苦悩ーゲルニカへの道』(展覧会図録)、京都国立近代美術館、1995年10月31日-12月17日、神吉敬三／大高保二郎 監修、永井隆則／岸本美香子 編、東武美術館／朝日新聞社、

1995年10月、155-157頁

「49 眠る少女の上に跪くミノタウロス」「50 女を愛するミノタウロス」『ピカソ 愛と苦悩—ゲルニカへの道』（展覧会図録）、京都国立近代美術館、1995年10月31日-12月17日、神吉敬三／大高保二郎 監修、永井隆則／岸本美香子 編、東武美術館／朝日新聞社、1995年10月、158-159頁

「48 闘牛場で若者に殺されるミノタウロス」『ピカソ 愛と苦悩—ゲルニカへの道』（展覧会図録）、京都国立近代美術館、1995年10月31日-12月17日、神吉敬三／大高保二郎 監修、永井隆則／岸本美香子 編、東武美術館／朝日新聞社、1995年10月、160-161頁

「51 ミノタウロス」『ピカソ 愛と苦悩—ゲルニカへの道』（展覧会図録）、京都国立近代美術館、1995年10月31日-12月17日、神吉敬三／大高保二郎 監修、永井隆則／岸本美香子 編、東武美術館／朝日新聞社、1995年10月、161-162頁

「52 少女に導かれる盲目のミノタウロス」「53 野生の花束を持つ少女に導かれる盲目のミノタウロスと《マラーの死》のためのスケッチ」「54 浜辺で少女に導かれる盲目のミノタウロス」「55 鳩を持つ少女に導かれる盲目のミノタウロス」「56 羽ばたきする鳩を持った少女に導かれる盲目のミノタウロス」「57 夜、羽ばたきする鳩を持った少女に導かれる盲目のミノタウロス」『ピカソ 愛と苦悩—ゲルニカへの道』（展覧会図録）、京都国立近代美術館、1995年10月31日-12月17日、神吉敬三／大高保二郎 監修、永井隆則／岸本美香子 編、東武美術館／朝日新聞社、1995年10月、162-168頁

「58 仮面をつけた人物と女の顔の鳥」『ピカソ 愛と苦悩—ゲルニカへの道』（展覧会図録）、京都国立近代美術館、1995年10月31日-12月17日、神吉敬三／大高保二郎 監修、永井隆則／岸本美香子 編、東武美術館／朝日新聞社、1995年10月、169-170頁

「59 怪物をながめる四人の子供たち」『ピカソ 愛と苦悩—ゲルニカへの道』(展覧会図録)、京都国立近代美術館、1995年10月31日-12月17日、神吉敬三／大高保二郎 監修、永井隆則／岸本美香子 編、東武美術館／朝日新聞社、1995年10月、170-171頁

「60 ミノタウロマキア」『ピカソ 愛と苦悩—ゲルニカへの道』(展覧会図録)、京都国立近代美術館、1995年10月31日-12月17日、神吉敬三／大高保二郎 監修、永井隆則／岸本美香子 編、東武美術館／朝日新聞社、1995年10月、172-174頁

「61 雌馬と仔馬を荷車で運び去るミノタウロス」 「62 荷車を引くミノタウロス-星空」『ピカソ 愛と苦悩—ゲルニカへの道』(展覧会図録)、京都国立近代美術館、1995年10月31日-12月17日、神吉敬三／大高保二郎 監修、永井隆則／岸本美香子 編、東武美術館／朝日新聞社、1995年10月、176-177頁

「65 傷ついたミノタウロス、馬と人物」『ピカソ 愛と苦悩—ゲルニカへの道』(展覧会図録)、京都国立近代美術館、1995年10月31日-12月17日、神吉敬三／大高保二郎 監修、永井隆則／岸本美香子 編、東武美術館／朝日新聞社、1995年10月、178-180頁

「64 傷ついたミノタウロス、馬に乗る人と人物」『ピカソ 愛と苦悩—ゲルニカへの道』(展覧会図録)、京都国立近代美術館、1995年10月31日-12月17日、神吉敬三／大高保二郎 監修、永井隆則／岸本美香子 編、東武美術館／朝日新聞社、1995年10月、180-181頁

「63 構成(ミノタウロスと女)」『ピカソ 愛と苦悩—ゲルニカへの道』(展覧会図録)、京都国立近代美術館、1995年10月31日-12月17日、神吉敬三／大高保二郎 監修、永井隆則／岸本美香子 編、東武美術館／朝日新聞社、1995年10月、181-182頁

「66 サテュロスと眠る女」『ピカソ 愛と苦悩—ゲルニカへの道』(展覧

会図録)、京都国立近代美術館、1995年10月31日-12月17日、神吉敬三／大高保二郎 監修、永井隆則／岸本美香子 編、東武美術館／朝日新聞社、1995年10月、183-184頁

「67 戦闘」『ピカソ 愛と苦悩—ゲルニカへの道』(展覧会図録)、京都国立近代美術館、1995年10月31日-12月17日、神吉敬三／大高保二郎 監修、永井隆則／岸本美香子 編、東武美術館／朝日新聞社、1995年10月、184-185頁

「51 ミノタウロス」『ピカソ 愛と苦悩—ゲルニカへの道』(展覧会図録)、京都国立近代美術館、1995年10月31日-12月17日、神吉敬三／大高保二郎 監修、永井隆則／岸本美香子 編、東武美術館／朝日新聞社、1995年10月、161-162頁

「68 小舟に乗る水の精たちと傷ついた牧神」『ピカソ 愛と苦悩—ゲルニカへの道』(展覧会図録)、京都国立近代美術館、1995年10月31日-12月17日、神吉敬三／大高保二郎 監修、永井隆則／岸本美香子 編、東武美術館／朝日新聞社、1995年10月、186-187頁

「ピカソ 愛と苦悩 — 「ゲルニカ」への道 (1) —闘牛 闘牛士の死」『朝日新聞』、1995年11月2日(朝刊)、28面

「ピカソ 愛と苦悩 — 「ゲルニカ」への道 (2) —磔死」『朝日新聞』、1995年11月3日(朝刊)、26面

「ピカソ 愛と苦悩 — 『ゲルニカ』への道 (3) —ミノタウロマキア」『朝日新聞』、1995年11月7日(朝刊)、24面

「ピカソ 愛と苦悩 — 「ゲルニカ」への道 (4) —ドラ・マールの肖像」『朝日新聞』、1995年11月9日(朝刊)、28面

「ピカソ 愛と苦悩 — 「ゲルニカ」への道 (5) —静物—パレット、燭台、

ミノタウロスの頭部』『朝日新聞』、1995年11月10日(朝刊)、26面

「スーラ《サーカス》」『パリで出会う名画50』高階秀爾 監修、小学館、1996年、70-71頁

「フランク・ステラ《モービー・ディック(ウエーブ・シリーズ)》」『視る』第359号、京都国立近代美術館、1997年6月、6頁

「マックス・エルンスト作『博物誌』」『視る』第367号、京都国立近代美術館、1998年2月、6頁

「セザンヌ」『パリ・オランジュリー美術館展』(展覧会図録)、京都国立近代美術館、1999年9月21日-11月14日、木島俊介 編、日本テレビ/文化村ザ・ミュージアム、1998年11月、1998年11月、196頁

「1 ポール・セザンヌ 赤い屋根のある風景あるいはレスタックの松」『パリ・オランジュリー美術館展』(展覧会図録)、京都国立近代美術館、1999年9月21日-11月14日、木島俊介 編、日本テレビ/文化村ザ・ミュージアム、1998年11月、1998年11月、196-197頁

「2 ポール・セザンヌ 草上の昼食」『パリ・オランジュリー美術館展』(展覧会図録)、京都国立近代美術館、1999年9月21日-11月14日、木島俊介 編、日本テレビ/文化村ザ・ミュージアム、1998年11月、197頁

「3 ポール・セザンヌ りんごとビスケット」『パリ・オランジュリー美術館展』(展覧会図録)、京都国立近代美術館、1999年9月21日-11月14日、木島俊介 編、日本テレビ/文化村ザ・ミュージアム、1998年11月、197頁

「4 ポール・セザンヌ 庭のセザンヌ夫人」『パリ・オランジュリー美術館展』(展覧会図録)、京都国立近代美術館、1999年9月21日-11月14日、木島俊介 編、日本テレビ/文化村ザ・ミュージアム、1998年11月、197頁

「5 ポール・セザンヌ 青い花瓶の花」『パリ・オランジュリー美術館展』（展覧会図録）、京都国立近代美術館、1999年9月21日-11月14日、木島俊介 編、日本テレビ／文化村ザ・ミュージアム、1998年11月、197頁

「6 ポール・セザンヌ 花と果物」『パリ・オランジュリー美術館展』（展覧会図録）、京都国立近代美術館、1999年9月21日-11月14日、木島俊介 編、日本テレビ／文化村ザ・ミュージアム、1998年11月、197-198頁

「7 ポール・セザンヌ 果物、ナプキン、ミルク入れ」『パリ・オランジュリー美術館展』（展覧会図録）、京都国立近代美術館、1999年9月21日-11月14日、木島俊介 編、日本テレビ／文化村ザ・ミュージアム、1998年11月、198頁

「8 ポール・セザンヌ 画家の息子の肖像」『パリ・オランジュリー美術館展』（展覧会図録）、京都国立近代美術館、1999年9月21日-11月14日、木島俊介 編、日本テレビ／文化村ザ・ミュージアム、1998年11月、198頁

「9 ポール・セザンヌ 樹木と家」『パリ・オランジュリー美術館展』（展覧会図録）、京都国立近代美術館、1999年9月21日-11月14日、木島俊介 編、日本テレビ／文化村ザ・ミュージアム、1998年11月、198頁

「10 ポール・セザンヌ セザンヌ夫人の肖像」『パリ・オランジュリー美術館展』（展覧会図録）、京都国立近代美術館、1999年9月21日-11月14日、木島俊介 編、日本テレビ／文化村ザ・ミュージアム、1998年11月、198-199頁

「11 ポール・セザンヌ 小舟と水浴する女」『パリ・オランジュリー美術館展』（展覧会図録）、京都国立近代美術館、1999年9月21日-11月14日、木島俊介 編、日本テレビ／文化村ザ・ミュージアム、1998年11月、199頁

「12 ポール・セザンヌ わらひもを巻いた壺、砂糖壺、りんご」『パリ・オランジュリー美術館展』（展覧会図録）、京都国立近代美術館、1999年9

月21日-11月14日、木島俊介 編、日本テレビ／文化村ザ・ミュージアム、1998年11月、199頁

「13 ポール・セザンヌ 赤い岩」『パリ・オランジュリー美術館展』（展覧会図録）、京都国立近代美術館、1999年9月21日-11月14日、木島俊介 編、日本テレビ／文化村ザ・ミュージアム、1998年11月、199頁

「14 ポール・セザンヌ シャトー・ノワールの庭の中」『パリ・オランジュリー美術館展』（展覧会図録）、京都国立近代美術館、1999年9月21日-11月14日、木島俊介 編、日本テレビ／文化村ザ・ミュージアム、1998年11月、199頁

「54 カミーユ・ピサロ シデナムの並木道」『ロンドン・ナショナル・ギャラリー展』（展覧会図録）、国立西洋美術館、2020年6月18日-10月18日、川瀬佑介／パート・コーネリス 監修、川瀬佑介 編、読売新聞東京本社／国立西洋美術館、2020年3月、206頁

「55 ピエール＝オーギュスト・ルノワール 劇場にて（初めてのお出かけ）」『ロンドン・ナショナル・ギャラリー展』（展覧会図録）、国立西洋美術館、2020年6月18日-10月18日、川瀬佑介／パート・コーネリス 監修、川瀬佑介 編、読売新聞東京本社／国立西洋美術館、2020年3月、208頁

「56 エドガー・ドガ バレエの踊り子」『ロンドン・ナショナル・ギャラリー展』（展覧会図録）、国立西洋美術館、2020年6月18日-10月18日、川瀬佑介／パート・コーネリス 監修、川瀬佑介 編、読売新聞東京本社／国立西洋美術館、2020年3月、212頁

「57 クロード・モネ 睡蓮の池」『ロンドン・ナショナル・ギャラリー展』（展覧会図録）、国立西洋美術館、2020年6月18日-10月18日、川瀬佑介／パート・コーネリス 監修、川瀬佑介 編、読売新聞東京本社／国立西洋美術館、2020年3月、214頁

「58 フィンセント・ファン・ゴッホ ひまわり」『ロンドン・ナショナル・ギャラリー展』（展覧会図録）、国立西洋美術館、2020年6月18日-10月18日、川瀬佑介／バート・コーネリス 監修、川瀬佑介 編、読売新聞東京本社／国立西洋美術館、2020年3月、218頁

「59 ポール・ゴーガン 花瓶の花」『ロンドン・ナショナル・ギャラリー展』（展覧会図録）、国立西洋美術館、2020年6月18日-10月18日、川瀬佑介／バート・コーネリス 監修、川瀬佑介 編、読売新聞東京本社／国立西洋美術館、2020年3月、222頁

「60 ポール・セザンヌ プロヴァンスの丘」『ロンドン・ナショナル・ギャラリー展』（展覧会図録）、国立西洋美術館、2020年6月18日-10月18日、川瀬佑介／バート・コーネリス 監修、川瀬佑介 編、読売新聞東京本社／国立西洋美術館、2020年3月、224頁

「61 ポール・セザンヌ ロザリオを持つ老女」『ロンドン・ナショナル・ギャラリー展』（展覧会図録）、国立西洋美術館、2020年6月18日-10月18日、川瀬佑介／バート・コーネリス 監修、川瀬佑介 編、読売新聞東京本社／国立西洋美術館、2020年3月、226頁

XVI. 翻訳 Traductions

ベルナール・モンゴルフィエ (Bernard de Montgolfier) 「荻須とパリ (Oguiss et Pairs)」『荻須高德遺作展』（展覧会図録）、京都国立近代美術館、1989年2月14日-3月19日、京都国立近代美術館／神奈川県立近代美術館／朝日新聞社 編、1988年、22-24頁

「作品解説」（分担：TNで担当箇所を標示）『ル・サロンの巨匠達-フランス絵画の精華』（展覧会図録）、池上忠治 監修、京都国立近代美術館、1989年6月6日-7月16日、福岡市美術館／アジア太平洋博覧会協会／日本経済新聞社 編、1989年、160-292頁

アラン・サヤグ (Alain Sayag) 「古い魅力の復活 (Le retour des vieilles séductions)」『移行するイメージ：1980年代の映像表現』(展覧会図録)、京都国立近代美術館、1990年8月28日-9月16日、京都国立近代美術館(河本信治)編、11-13頁

レイチェル・バーズ編著 (Edited by Rachel Barnes) 『セザンヌ (Cézanne by Cézanne: Artists by Themselves)』日本経済新聞社、1991年

リチャード・シフ (Richard Shiff) 「近代芸術におけるデジタル体験 (Digital Experience in Modern Art)」『京都工芸繊維大学工芸学部紀要 人文』第51号、京都工芸繊維大学、2003年3月、77-84頁

ジャン・クロード・レーベンシュテイン (Jean-Claude Lebensztejn) 「セザンヌ・夢の中のように (Cézanne comme dans un rêve)」『探求と方法 フランス近現代美術史を解剖する一文献学・美術館行政から精神分析・ジェンダー論以降へ』永井隆則 編、晃洋書房、2014年3月、1-16頁

「バルナール宛セザンヌ書簡」『コートールド美術館展 魅惑の印象派』(展覧会図録)、東京都美術館、2019年9月10日-12月15日、東京都美術館／朝日新聞社／NHK／NHKプロモーション、2019年9月、75-98頁

XVII. 発表要旨 Résumés de présentations orales

Le problème du support chez Cézanne, 『美學』第150号第38巻第2号、1987年秋、78頁

Matiérisme/Modernité—Le phénomène de symbiose des techniques du dessin et de la peinture au XIXe siècle—, 『美學』第177号第45巻第1号、1994年夏、79頁

「日本のセザンヌ—1920年代日本の人格主義セザンヌ像の美的根拠とその形成に関する思想及び美術制作の文脈について—」『美術史』第144冊、

Vol. XLVII, No. 2、1998年3月、246-247頁

「1930年代日本のセザンヌ受容—「人格」から「造型」へ」『美学』第195号第49巻第33号、1998年12月、54頁

「セザンヌとゾラの創造的関係を再考する」(趣旨説明)『日仏美術学会会報』第38号(2018年度)、2019年5月、40頁

「ゾラはペンで、セザンヌは絵筆で弾劾する」『日仏美術学会会報』第38号(2018年度)、2019年5月、44頁

XVIII. 学会口頭発表

Présentations orales dans des réunions savantes

1) 日本語 En japonais

「セザンヌに於ける地の問題」美学会西部会例会、京都大学文学部1階第6講義室、1987年5月23日(土)

「マティエリスム／モデルニテ：19世紀半ば以降のフランス美術に於ける素描技法の絵画技法への侵入」美学会西部会例会、京都造形芸術短期大学直心館3階J35教室、1992年11月28日(土)

「日本のセザンヌ—1920年代人格主義的セザンヌ像の形成の美的根拠と思想上の文脈について」美術史学会西部会例会、大阪市東洋陶磁美術館地下1階講堂、1997年1月25日(土)

「1930年代日本におけるセザンヌ受容「人格」から「造型」へ」美学会第49回全国大会、京都大学法経本館1階法経第4教室、1998年年10月10日(土)

「アンリ・マティスの絵画と装飾」意匠学会大会、京都造形芸術短期大学直心館4階J41講義室、1998年11月7日(土)

「セザンヌと時間」美学会第52回全国大会 特別企画「第15回国際美学会議2001」の報告 研究報告I 分科会 3 美術史、早稲田大学文学学術院 戸山キャンパス 36号館3階AV2 (382) 教室、2001年10月7日(日)

『「セザンヌ受容の研究」と今後の展望』日仏美術学会第106回例会、大阪大谷大学文学部博物館棟2階201教室、2007年11月24日(土)

2) 外国語 En langues étrangères

Cézanne and Time, *International Congress for Aesthetics*, Kanda University of International Studies, 30 August 2001.

XIX. シンポジウム口頭発表

Présentations orales dans des colloques

1) 日本語 En japonais

「セザンヌ研究の現在—研究史から見る今日のセザンヌ像」(基調講演)『シンポジウム「セザンヌ—パリとプロヴァンス」展から見る今日のセザンヌ』(「国立新美術館開館5周年 セザンヌ—パリとプロヴァンス展」記念シンポジウム)国立新美術館主催、国立新美術館3階講堂、2012年5月26日(土)

「アール・ヌーヴォーと女性、植物」『シンポジウム「植物≠女性—イメージは世界をかける」』京都工芸繊維大学美術工芸資料館／中部大学主催、中部大学不言実行館1階アクティヴホール、2015年10月21日(水)

「ゴーギャンのセザンヌ」『ダリオ・ガンボニー教授来日記念講演会およびシンポジウム「ゴーギャンとルドンに関する最新研究」』日仏美術学会主催、京都大学文学部新館1階第2講義室、2016年7月30日(土)

「アンガジュモンとしてのゾラの美術批評」『国際シンポジウム「ゾラ的美術批評を再考する」』京都工芸繊維大学デザイン・建築学系造形史研究室／日仏美術学会主催、京都工芸繊維大学松ヶ崎キャンパス東構内東3号館

1階K-101教室、2016年12月17日(土)

「セザンヌに変身するピカソ」『国際シンポジウム「ピカソと人類の美術—模倣と創造」』京都工芸繊維大学デザイン・建築学系造形史研究室／日仏美術学会、京都工芸繊維大学松ヶ崎キャンパス西構内1号館1階0111教室、2017年11月11日(土)

「ゾラはペンでセザンヌは絵筆で弾劾する」『国際シンポジウム「セザンヌとゾラの創造的関係を再考する」』京都工芸繊維大学デザイン建築学系造形史研究室／日仏美術学会、京都工芸繊維大学松ヶ崎キャンパス東構内東3号館1階K-101教室、2018年12月2日(日)

2) 外国語 En langues étrangères

«How Cézanne rejected the fini concept», *Kyoto Art History Colloquium Appreciating the Traces of an Artist's Hand*, organized by Dr. Toshiharu NAKAMURA, Kyoto University, Underground conference room at Kyoto University, 25 September 2016.

«Cezanne et Jas de Bouffan-Représentation de l'intimité», *Les actes du colloque international: Cezanne, Jas de Bouffan-Art et Histoire*, organisé par la Société de Paul Cezanne, Salle de conférence à l'université d'Aix-Marseille I, Aix-en-Provence, 21 septembre 2019.

XX. 学術講演会 Conférences scientifiques

「デトロイト美術館の名品から」京都市美術館主催市民講座、京都市美術館講演室、1989年2月11日(土)

「セザンヌ芸術の特異性と魅力」倉敷美術館市民講座、倉敷市美術館講堂、1990年5月6日(日)

「ゴッガンと近代絵画」京都市美術館主催市民講座、京都市美術館講演

室、1991年8月1日(木)

「ゴッホと日本」京都市美術担当教員連絡会主催、京都国立近代美術館講堂、1992年2月18日(火)

「ゴーギャンとポン＝タヴェン派―転換期の美術―」京都国立近代美術館／東京新聞主催、京都国立近代美術館講堂、1993年6月19日(土)

「南フランスの自然と近代美術」日経レディースフォーラム主催、新阪急ビル12階スカイルーム(大阪、梅田)、1994年8月27日(土)

「ギュスターヴ・モローとその時代」NHK京都放送局主催、ウイングス京都、1995年6月9日(金)

「ギュスターヴ・モロー 神秘と幻想-アカデミズムの中の近代」NHKメンバーズ・クラブ主催、京都国際会議場講堂、1995年6月17日(土)

「ギュスターヴ・モローの近代性」NHK京都放送局主催、京都国立近代美術館講堂、1995年6月18日(日)

「ピカソ芸術の本質と魅力」朝日新聞社／京都国立近代美術館主催、京都国立近代美術館講堂、1995年11月18日(土)

「20世紀の美術―身体と芸術」NHK京都放送局主催、京都会館会議場、1996年6月11日(火)

「19世紀フランス美術に於ける身体表現の諸相」NHK京都放送局主催、京都国立近代美術館講堂、1996年6月22日(土)

「パリと近代美術―近代と反近代のモメントとしてのパリ」京都国立博物館主催夏期講座、京都国立博物館講堂、1996年8月2日(金)

「フィラデルフィア美術館所蔵 ルノワールの《大水浴図》」朝日カルチャーセンター芦屋主催、特別公開講座「名画を読む」、朝日カルチャーセンター芦屋ラポルテ4階、1996年10月12日（土）、15:15-17:00

「パリと近代美術」京都市美術館主催、「京都の100年・パリの100年 第2部 都市の肖像展」記念講演会、みやこめっせ大会議室、1998年11月22日（日）、14:00-15:30

「1920年代日本の人格主義的セザンヌ像の美的根拠とその形成に関する思想及び美術制作の文脈について」文化財研究所（東京）美術部・情報資料部研究会主催講演会、文化財研究所（東京）講演室、1999年11月19日（金）

「セザンヌと日本」愛知県立美術館主催「セザンヌ展」記念講演会、愛知県立美術館講堂、2000年2月5日（土）

「エコール・ド・パリとピカソ」京都市美術館／読売テレビ主催、「ピカソとエコール・ド・パリ展」記念講演会、京都市美術館講演室、2002年9月21日（土）

「セザンヌの素描と身体」ブリヂストン美術館主催土曜講座、ブリヂストン美術館講堂、2004年2月7日（土）

「ゴッホと日本」NHK近畿メディアプラン主催「ゴッホー孤高の画家の原風景展」記念講演会、豊中市中央公民館、2005年5月14日（土）

「フランス近代美術から現代美術へー葛藤と創造の場」京都文化博物館主催、「印象派と西洋絵画の巨匠たち展」記念講演会、京都文化博物館講堂、2006年6月24日（土）

「フランス近代美術と日本（1）ーフランス近代美術から現代美術へー葛藤と創造の場」倉敷市美術館主催、倉敷市美術館講堂、2007年4月8日（日）

「フランス近代美術と日本 (2) ーフランス近代美術と日本」 倉敷市美術館主催、倉敷市美術館講堂、2007年5月13日 (日)

「フランス近代美術と日本 (3) ーセザンヌと日本」 倉敷市美術館主催、倉敷市美術館講堂、2007年6月3日 (日)

「フランス近代美術と日本 (4) ーゴッホと日本」 倉敷市美術館主催、倉敷市美術館講堂、2007年7月1日 (日)

「日本に於けるセザンヌ」ブリヂストン美術館主催、土曜講座「セザンヌ4つの魅力展」記念講演会、ブリヂストン美術館講堂、2007年10月13日 (土)

「セザンヌ主義の発生と変遷」横浜美術館主催、「セザンヌ主義展」記念講演会、横浜美術館講堂、2008年11月24日 (月・祝)

「自著を語る セザンヌ受容の研究」京都工芸繊維大学附属図書館連続企画第3回、附属図書館1階グローバルcommons、2018年7月24日 (火)、16:10～17:40

「セザンヌの芸術と思想」東京都美術館／朝日新聞社主催、「コートールド美術館展」記念講演会、東京都美術館1階講堂、2019年11月30日 (土)

「セザンヌの衝撃」諸橋近代美術館主催、もろ美大学 第4回講演会、2020年10月24日 (土)、18:00～19:30、【Zoom 講演会】

XXI. シンポジウム座長 *Président de colloque*

「シンポジウム『美術フォーラム21』ーフランシスム研究の構築に向けてー」美術フォーラム21 刊行会主催／醍醐書房共催、京都国立近代美術館講堂、2011年11月13日 (日)、13:00～16:00

「シンポジウム〈セザンヌーパリとプロヴァンス〉展から見る今日のセザンヌ」(「国立新美術館開館5周年 セザンヌーパリとプロヴァンス展」記念シンポジウム) 国立新美術館主催、国立新美術館講堂、2012年5月26日(土)、13:00~17:00

「シンポジウム〈近代絵画の父ーセザンヌ〉を再考する」(京都工芸繊維大学SGU事業国際化モデル研究室支援事業) 京都工芸繊維大学デザイン・建築学系造形史研究室/日仏美術学会主催、京都大学文学部新館1階第2講義室、2015年6月13日(土)、14:00~17:30

XXII. シンポジウム、学会のコメンテーター

Commentateur de colloque, de réunions savantes

「国際シンポジウム：〈近代絵画の父ーセザンヌ〉を再考する」(京都工芸繊維大学SGU事業国際化モデル研究室支援事業) 京都工芸繊維大学デザイン・建築学系造形史研究室/日仏美術学会主催、京都大学文学部新館1階第2講義室、2015年6月13日(土)、14:00~17:30

「ルドン、ゴッガン：象徴主義研究の新たな方向性ーダリオ・ガンボニを出発点としてー」

日仏美術学会第134回例会、日仏美術学会主催、京都大学文学部新館2階第6講義室、2014年12月20日(土)、14:00~17:30

「20世紀における日仏美術交流ー未刊行の日記、書簡からの新知見ー」日仏美術学会第151回例会、日仏美術学会主催、京都大学人文科学研究所本館1階セミナー室1、2019年2月23日(土)、14:30~17:15

XXIII. シンポジウムの司会 Animateur de colloque

「国際シンポジウム：ジャン・クロード・レーベンシュテイン教授来日記念シンポジウムーフランス近現代美術史研究の可能性ー」 京都工芸繊維大学デザイン建築学系造形史研究室/日仏美術学会主催、京都工芸繊維大学

松ヶ崎キャンパス西構内1号館3階大学院会議室、2009年9月5日(土)、9:20~17:40

XXIV. 学会の司会 *Animateur de réunions savantes*

「研究発表 若手研究者フォーラム」第55回美学会全国大会、京都工芸繊維大学松ヶ崎キャンパス西構内3号館2階0323教室、2004年10月9日(土)、16:10-18:10

「研究発表 分科会III 西洋近代美術」第59回美学会全国大会、同志社大学今出川校地・新町キャンパス尋真館3階Z31教室、2008年10月11日(土)、13:30-16:10

「研究発表 3 分科会3-B [美術おける植民地と自然]」第61回美学会全国大会、関西学院大学上ヶ原キャンパスB号館2階203教室、2010年10月10日(日)、13:00-15:20

「研究発表 第二分会 西洋美術史」第64回美術史学会全国大会、同志社大学京田辺校地夢告館、2011年5月21日(土)、13:15-16:45

「研究発表 西洋美術」第62回美学会全国大会、東北大学川内文系キャンパス文学研究棟視聴覚教室、2011年10月15日、14:00-17:45

「研究発表分科会3 分科会C 西洋近代美術」第63回美学会全国大会、京都大学文学部吉田キャンパス文学部校舎2階第7講義室、2012年10月7日(日)、13:00-15:10

「研究発表 第二分会 西洋美術史」第66回美術史学会全国大会、関西大学千里山キャンパス社会学部 [第3学舎] A201教室、2013年5月12日(日)、10:00-12:00

「若手研究者フォーラム〈会場7〉西洋美術史2」第65回美学会全国大会、

九州大学文系講義棟 204教室、2014年10月12日、9:40-12:00

「研究発表 2〈分科会 C〉造形美術 3」第66回美学学会全国大会、早稲田大学文学学術院戸山キャンパス36号館5階581教室、2015年10月11日(日)、12:40-14:50

「研究発表 分科会I 西洋美術史」第70回美術史学会全国大会、関西学院大学上ヶ原キャンパスB号館1階101号室、2017年5月20日(土)、10:00-12:50

XXV. 研究プロジェクト Projets de recherche

1) 国費 Budget de l'État

『1910年代前後の日本におけるセザンヌ(セザンヌ芸術の受容と紹介)』1989(平成元)年度文部省科学研究費補助金 奨励研究(A)

『1930-40年代の日本におけるセザンヌの受容』1998(平成10)-2001(平成13)年度文部省科学研究費補助金 基盤研究(C)(2)

『1930-40年代日本に於けるセザンヌ解釈誕生の環境』2003(平成15)-2004(平成16)年度独立行政法人日本学術振興会科学研究費補助金 基盤研究(C)

『セザンヌ受容の研究』(中央公論美術出版、平成19年3月刊行)2006(平成18)年度独立行政法人日本学術振興会科学研究費補助金 研究成果公開促進費(学術図書)

『セザンヌ複製の研究』2007(平成19)年度京都工芸繊維大学教育研究推進事業

『セザンヌに於ける、アンチ・モダニズムの思想』2012(平成24)-2014(平成26)年度独立行政法人日本学術振興会科学研究費助成事業 挑戦的萌芽

研究

『セザンヌの〈芸術論〉に関する総合的研究』2015（平成27）-2018（平成30）年度独立行政法人日本学術振興会科学研究費助成事業 基盤研究（C）

『ポスト印象主義におけるユートピア芸術論に関する総合的研究』2019（平成31）-2021（令和3）年度独立行政法人日本学術振興会科学研究費助成事業 基盤研究（C）

『絵画における真実－近代化社会に対するセザンヌの実践の意味』（三元社、令和4年3月刊行）2021（令和3）年度独立行政法人日本学術振興会科学研究費助成事業 研究成果公開促進費（学術図書）

2) 民間 Budget de fondations privées

「1920年代初頭のフランスと日本のセザンヌ－知覚主義からフォルマリズムへ／知覚主義から人格主義へ」1995（平成7）年度公益財団法人鹿島美術財団「美術に関する調査研究助成」

「近代日本に於けるセザンヌ複製の研究」2006（平成18）年度メトロポリタン東洋美術研究センター東洋美術研究振興基金研究助成

「日本所蔵のセザンヌ作品に関する調査（大阪市、鹿児島市、広島市、倉敷市、東京都内、八王子市、笠間市、足柄下郡箱根町、下田市、横浜市）及びセザンヌを中心とするフランス近代美術史研究の可能性」（パリ第一大学名誉教授、ジャン・クロード・レーベンシュティン博士との共同研究）2009（平成21）年度財団法人平和中島財団「外国人研究者等招致助成」

「近代日本の美術展におけるセザンヌ・オリジナル作品展示の歴史」2009（平成21）年度メトロポリタン東洋美術研究センター東洋美術研究振興基金研究助成

「セザンヌ芸術の展開にジャズ・ド・ブッフアンのセザンヌ家邸宅を中心と

するエクス・アン・プロヴァンスの環境がもたらした創造的作用に関する研究」2019（令和元）年度公益財団法人鹿島美術財団「美術に関する国際交流援助」（海外派遣）（2019年9月11日-9月25日、パリ、エクス・アン・プロヴァンス）

XXVI. 海外での調査研究活動

Activités de recherche à l'étranger

特別展事前調査（1993年1月30日-2月14日、パリ、ローマ、ミラノ、チューリッヒ、バーゼル、ベルリン、ロンドン）

「ピカソーゲルニカへの道展」企画のための調査と出品交渉：（1994年7月24日-8月3日、パリ、アンチーブ、ヴァロリス、ニース、エクス・アン・プロヴァンス、パリ）

「ピカソーゲルニカへの道展」企画のための調査と出品交渉：（1995年3月5日-3月19日、パリ、バルセロナ、マドリッド、デュッセルドルフ、パリ、ニューヨーク）

「セザンヌ展」（パリ、グラン・パレ）の調査とセザンヌ・コロックの聴講（パリ、オルセー美術館）（1995年11月26日-12月4日、パリ）

助成：1995（平成7）年度公益財団法人鹿島美術財団「美術に関する調査研究助成」

「Classic Cézanne展」（ニュー・サウス・ウエールズ美術館）の調査（1999年2月27日-3月2日、シドニー）

助成：1998（平成10）年度京都工芸繊維大学学長裁量経費

セザンヌの作品と資料の調査（1999年10月30日-11月6日、パリ、オルセー美術館資料室、フランス国立図書館、ロンドン、ロンドン大学図書館、コートールド美術研究所）

助成：『1930-40年代の日本におけるセザンヌの受容』1998（平成10）-2001

(平成13) 年度文部科学省科学研究費補助金 基盤研究 (C) (2)

セザンヌの作品と資料の調査 (2000年9月6日-9月21日、ロサンゼルス、ゲッティ・センター、ニューヨーク近代美術館、メトロポリタン美術館、グッゲンハイム美術館、オースティン、テキサス大学、ハーバード大学図書館、フォッグ美術館、ボストン美術館、ワシントン・ナショナル・ギャラリー資料室、フィリップス・コレクション)

助成：『1930-40年代の日本におけるセザンヌの受容』1998 (平成10) -2001 (平成13) 年度文部科学省科学研究費補助金 基盤研究 (C) (2)

セザンヌの作品と資料の調査、産業革命期の機械製品とウィリアム・モリス作品調査 (2003年9月15日-9月24日、パリ、オルセー美術館資料室他、ロンドン、科学博物館、ヴィクトリア&アルバート美術館他)

助成：『1930-40年代日本に於けるセザンヌ解釈誕生の環境』2003 (平成15) -2004 (平成16) 年度独立行政法人日本学術振興会科学研究費補助金 基盤研究 (C)

「セザンヌとピサロ展」の調査 (2006年3月31日-4月5日、パリ、オルセー美術館)

「セザンヌとプロヴァンス展」とエクス市内のセザンヌゆかりの場所の調査 (2006年7月2日-7月9日、パリ、エクス・アン・プロヴァンス、グラネ美術館)

セザンヌ関係資料収集 (パリ、オルセー美術館資料室他)、「クールベ展」の調査、クールベ・コロックの聴講とアール・ヌーヴォー建築の調査 (2007年12月3日-12月11日、パリ、グラン・パレ、オルセー美術館)

助成：『セザンヌ複製の研究』2007 (平成19) 年度京都工芸繊維大学教育研究推進事業

「ピカソと巨匠たち展」の調査、他 (2009年1月5日-1月10日、パリ、グラン・パレ、ルーヴル美術館、コンピエーニュ城美術館)

「セザンヌと後世代展」の調査（フィラデルフィア美術館）、セザンヌ作品調査（ワシントン、ナショナル・ギャラリー）、リンダ・ノックリン教授招聘交渉（2009年5月28日-6月4日、フィラデルフィア、ワシントンD.C.、ニューヨーク）

「セザンヌ／ピカソ展」（グラネ美術館）とエクス市内のセザンヌゆかりの場所の調査、「20世紀のルノワール展」（グラン・パレ）の調査（2009年9月24日-10月1日、パリ、エクス・アン・プロヴァンス）

「セザンヌとパリ展」（パリ、リュクサンブール美術館）、「マティス、セザンヌ、ピカソ―スタイン兄弟の冒険展」（パリ、グラン・パレ）、「南仏のアトリエ展」（ミラノ、パラツォ・レアレ）、アール・デコ建築（ミラノ）の調査（2011年10月28日-11月5日、パリ、ミラノ）

「セザンヌ素描帖」（モーガン・アート・ライブラリー、ニューヨーク）、「アルカディア展」（フィラデルフィア美術館）、バーンズ財団美術館の調査（2012年8月27日-9月3日、ニューヨーク、フィラデルフィア）

助成：『セザンヌに於ける、アンチ・モダニズムの思想』2012（平成24）-2014（平成26）年度独立行政法人日本学術振興会科学研究費助成事業 挑戦的萌芽研究

パリ、エジェジップ・モロー街のヴィラ・デ・ザールのセザンヌのアトリエ、「印象派とモード展」（オルセー美術館）、セザンヌ資料収集（オルセー美術館資料室）、「セザンヌと過去展」（ハンガリー、ブダペスト西洋美術館）の調査（2012年11月20日-12月2日、パリ、ブダペスト）

助成：『セザンヌに於ける、アンチ・モダニズムの思想』2012（平成24）-2014（平成26）年度独立行政法人日本学術振興会科学研究費助成事業 挑戦的萌芽研究

セザンヌゆかりの場所（パリの住居、エクス・アン・プロヴァンスの制作地）調査、「南仏の巨大なアトリエ展」（マルセイユ美術館、マルセイユ）調

査、「セザンヌ—南仏のアトリエ・シンポジウム」(ジャズ・ド・ブッフアン、エクス・アン・プロヴァンス) 聴講、「セザンヌとクールベ展」(オルナン)とクールベゆかりの場所の調査(オルナン)、セザンヌの手紙手稿調査(オルセー美術館資料室と「手紙と手稿博物館」、パリ)(2013年9月11日-9月26日、パリ、マルセイユ、エクス・アン・プロヴァンス、オルナン)

助成：『セザンヌに於ける、アンチ・モダニズムの思想』2012(平成24)-2014(平成26)年度独立行政法人日本学術振興会科学研究費助成事業 挑戦的萌芽研究

セザンヌ書簡手稿調査(オルセー美術館、パリ)、「エミール・ベルナール展」(オランジュリー美術館、パリ)、ポントワーズのセザンヌゆかりの地調査、「セザンヌと現代性展」(グラネ美術館、エクス・アン・プロヴァンス)、ドイツ近現代美術、デザイン、建築の調査(レンバッハ美術館、ピナコテーク・デア・モデルネ、ノイエ・ピナコテーク、ミュンヘン)他(2014年9月14日-26日、パリ、ポントワーズ、エクス・アン・プロヴァンス、ミュンヘン)

助成：『セザンヌに於ける、アンチ・モダニズムの思想』2012(平成24)-2014(平成26)年度独立行政法人日本学術振興会科学研究費助成事業 挑戦的萌芽研究

「マチス展」(ニューヨーク近代美術館、ニューヨーク)、「セザンヌ夫人展」(メトロポリタン美術館、ニューヨーク)の調査、「セザンヌオンラインカタログ開設記念式典」(メトロポリタン美術館、2014年11月20日18:00-20:00)出席、「セザンヌ静物画展」(ハミルトン美術館、ハミルトン)の調査(2014年11月18日-26日、ニューヨーク、トロント、ハミルトン)

助成：『セザンヌに於ける、アンチ・モダニズムの思想』2012(平成24)-2014(平成26)年度独立行政法人日本学術振興会科学研究費助成事業 挑戦的萌芽研究

「セザンヌ素描帖の調査」(ワシントン・ナショナル・ギャラリー素描室、ワシントン)、「デュラン・リュエル展」(フィラデルフィア美術館、フィラ

デルフィア)、テキサス大学教授、リチャード・シフ博士との意見交換、セザンヌ素描と手紙手稿の調査(テキサス大学図書館、オースティン)(2015年9月2日-11日、ワシントン、フィラデルフィア、オースティン)

助成:2013(平成25)-2016(平成28)年度日本学術振興会科学研究費助成事業基盤研究(B)『「作品における制作する手の顕在化」をめぐる歴史的研究』(研究代表者:中村俊春〔京都大学文学部〕)

ベルリン、ユーゲントシュティールの調査、セザンヌ書簡の調査(手紙と手稿の博物館、パリ/メジャヌ図書館、エクス・アン・プロヴァンス)、「アンリ・ファンタン=ラトゥール展」の調査(リュクサンブール美術館、パリ)、「シャルル・カモワン展」の調査(グラネ美術館、エクス・アン・プロヴァンス)、セザンヌゆかりの場所(シャトー・ヌワール、ブルゴン街のアパート)の調査(エクス・アン・プロヴァンス)(2016年9月7日-20日、ベルリン、エクス・アン・プロヴァンス)

助成:『セザンヌの〈芸術論〉に関する総合的研究』2015(平成27)-2018(平成30)年度独立行政法人日本学術振興会科学研究費助成事業 基盤研究(C)

ウイーン分離派とウイーン工房のデザイン、建築の調査、「セザンヌ肖像画展」調査(オルセー美術館、パリ)、「ピサロ展」(マルモタン美術館、パリ)、「ピサロ展」(リュクサンブール美術館、パリ)調査、「シスレー展」調査(コーモン・アート・センター、エクス・アン・プロヴァンス)、(2017年6月6日-20日、ウイーン、パリ、エクス・アン・プロヴァンス)

助成:『セザンヌの〈芸術論〉に関する総合的研究』2015(平成27)-2018(平成30)年度独立行政法人日本学術振興会科学研究費助成事業 基盤研究(C)

ダルムシュタット派(ユーゲントシュティール)の調査(ダルムシュタット)、アール・ヌーヴォーとアール・デコ建築群、ストックレー邸の調査(ブリュッセル)、「クノップ展」(プティ・パレ、パリ)、「ミュシャ展」(リュクサンブール美術館、パリ)、「ピカソの青とバラ色の時代展」(オルセー美術館、パリ)、「キュビズム展」(ボンビドー・センター、国立近

代美術館、パリ) 調査 (2018年12月10日-24日、フランクフルト、ダルムシュタット、ブリュッセル、パリ)

助成：『セザンヌの〈芸術論〉に関する総合的研究』2015 (平成27)-2018 (平成30)年度独立行政法人日本学術振興会科学研究費助成事業 基盤研究 (C)

「ベルト・モリゾ展」(オルセー美術館、パリ)、「先史美術と近代美術展」(ボンピドゥー・センター、国立近代美術館、パリ)、「グッゲンハイム美術館展」(コーモン・アート・センター、エクス・アン・プロヴァンス)、ル・コルビジエ作「ユニテ・ダビタシオン」(マルセイユ)の調査、国際シンポジウム「セザンヌとジャズ・ド・ブッフアン 美術と歴史」(エクス・アン・プロヴァンス、エクス・マルセイユ大学講堂)での発表 (2019年9月11日-25日)

助成：「セザンヌ芸術の展開にジャズ・ド・ブッフアンのセザンヌ家邸宅を中心とするエクス・アン・プロヴァンスの環境がもたらした創造的作用に関する研究」2019 (令和元)年度公益財団法人鹿島美術財団「美術に関する国際交流の援助」(海外派遣) (2019年9月11日-9月25日、パリ、エクス・アン・プロヴァンス)

XXVII. 外国人招聘事業

Projets d'invitation de chercheurs étrangers

テキサス大学教授、リチャード・シフ (Richard Shiff) 博士

期間：2001 (平成13)年9月27日-10月8日

助成：独立行政法人国際交流基金文化人招へいプログラム

協力：武蔵大学、林道郎教授

パリ第一大学名誉教授、ジャン・クロード・レーベンシュテイン (Jean-Claude Lebensztejn) 博士

期間：2004 (平成16)年6月29日-7月12日

助成：『1930-40年代日本に於けるセザンヌ解釈誕生の環境』2003 (平成15)-2004 (平成16)年度独立行政法人日本学術振興会科学研究費補助金 基盤

研究 (C)

協力：東京大学大学院総合文化研究科、三浦篤助教授

パリ第一大学名誉教授、ジャン・クロード・レーベンシュテイン (Jean-Claude Lebensztejn) 博士

期間：2009 (平成 21) 年 9 月 3 日 - 9 月 16 日

助成：2009 (平成 21) 年度財団法人平和中島財団外国人研究者等招致助成

協力：東京大学大学院総合文化研究科、三浦篤教授

ニューヨーク大学名誉教授、リンダ・ノクリン (Linda Nochlin) 博士

期間：2009 (平成 21) 年 10 月 17 日 - 10 月 27 日

助成：財団法人鹿島美術財団 2008 (平成 20) 年度「美術に関する国際交流援助」(外国人研究者招致) / 2009 (平成 21) 年度財団法人カシオ科学振興財団第 27 回研究会助成

協力：早稲田大学文学学術院、坂上桂子教授

プリンストン大学教授、イヴ・アラン・ボワ (Yve-Alain Bois) 博士

期間：2010 (平成 22) 年 9 月 6 日 - 9 月 9 日

助成：2010 (平成 22) 年度京都工芸繊維大学国際交流奨励基金外国人研究者招へい (学術講演)

協力：東京大学大学院総合文化研究科博士課程、近藤学

オルセー美術館学芸員、イザベル・カーン (Isabelle Cahn)

期間：2015 (平成 27) 年 6 月 11 日 - 6 月 15 日

助成：2015 (平成 27) 年度京都工芸繊維大学スーパーグローバル大学創成支援事業国際化モデル研究室支援事業

テキサス大学教授、リチャード・シフ (Richard Siff) 博士

期間：2016 (平成 28) 年 12 月 15 日 - 12 月 19 日

助成：2016 (平成 28) 年度公益財団法人村田学術振興財団第 32 回研究会 (学会) 助成金

ペルージャ大学名誉教授、カテリナ・ザッピア (Caterina Zappia) 博士、フランス文化財主任学芸員、ロランス・マドリーヌ (Laurence Madeline)

期間：2017 (平成 29) 年 11 月 8 日 - 11 月 15 日

助成：2017 (平成 29) 年度公益財団法人ポーラ美術振興財団「美術に関する国際交流助成」／2016 (平成 28) 年度公益財団法人鹿島美術財団「美術に関する国際交流援助」(外国人研究者招致)

協力：上智大学、松原典子教授

ポール・セザンヌ協会会長、ドニ・クターニュ (Denis Coutagne)

期間：2018 (平成 30) 年 11 月 28 日 - 12 月 3 日

助成：2018 (平成 30) 年度美術史学会辻佐保子美術史学振興基金

エクス・マルセイユ大学 I 名誉教授、ジャン・アルーユ (Jean Arrouye) 博士

期間：2018 (平成 30) 年 11 月 28 日 - 12 月 3 日

助成：2018 (平成 30) 年度笹川日仏財団助成金

ジュネーヴ大学教授、ダリオ・ガンボーニ (Dario Gambini) 博士、ペンシルヴァニア大学准教授、アンドレ・ドンブロウスキー (André Dombrowski) 博士

期間：2019 (令和元) 年 6 月 20 日 - 6 月 25 日

助成：2019 (令和元) 年度京都工芸繊維大学シンポジウム等開催助成支援事業／2019 (令和元) 年度京都工芸繊維大学 OPEN TECH シンポジウム支援事業／『ポスト印象主義におけるユーロピア芸術論に関する総合的研究』2019 (令和元) - 2021 (令和 3) 年度独立行政法人日本学術振興会科学研究費助成事業 基盤研究 (C)

オクスフォード大学教授、ヤシュ・エルスナー (Jàs Elsner) 博士、米国の美術史家、エメ・ブラウン・プライス (Aimée Brown Price) 博士

期間：2020 (令和 2) 年 11 月 28 日 Zoom Meeting (オンライン)

助成：2020 (令和 2) 年度公益財団法人村田学術振興財団第 36 回研究会 (学会) 助成金／2020 (令和 2) 年度京都工芸繊維大学 OPEN TECH シンポジウム

ム等開催支援事業

ジヴェルニー、印象派美術館名誉館長、マリナ・フェレッティ (Marina Ferretti) 氏、デラウエア大学名誉教授、ニナ・マリア・アタナソグルー・カルマイヤー (Nina Maria Athanassoglou-Kallmyer) 博士、パリ、ナンテール大学教授、レミ・ラブリュス (Rémi Labrusse) 博士

期間：2021 (令和3) 年11月27日、28日 Zoom Webinar (オンライン)

助成：2020 (令和2) 年度公益財団法人吉野石膏美術振興財団国際交流助成／2021 (令和3) 年度公益財団法人村田学術振興財団第37回研究会 (学会) 助成金／京都市芸繊維大学 R3 年度__国際化モデル研究室支援事業／京都市芸繊維大学 R3 年度__OPEN TECH シンポジウム支援事業

XXVIII. 学術行事の企画・開催

Organisation d'évènements académiques

1) シンポジウム Colloques

国際シンポジウム「フランス近代美術史研究の可能性」

主催：京都工芸繊維大学大学院工芸科学研究科造形工学部門

日時：2009 (平成21) 年9月5日 (土) 9:20-17:40

会場：京都工芸繊維大学松ヶ崎キャンパス西構内1号館3階会議室

登壇者：ジャン・クロード・レーベンシュテイン (Jean-Claude Lebensztejn) (パリ第一大学名誉教授)、稲賀繁美 (国際日本文化研究センター教授)、林道郎 (上智大学教授)、吉田典子 (神戸大学教授)、岡部あおみ (武蔵野美術大学教授)、高橋明也 (三菱一号館美術館館長)、宮崎克己 (美術史家)

助成：2009 (平成21) 年度財団法人平和中島財団外国人研究者等招致助成

国際シンポジウム「〈近代絵画の父＝セザンヌ〉を再考する」

主催：日仏美術学会／京都工芸繊維大学デザイン・建築学系造形史研究室

日時：2015 (平成27) 年6月13日 (土) 14:00-17:30

会場：京都大学文学部新館1階第2講義室

登壇者：イザベル・カーン (Isabelle Cahn) (オルセー美術館学芸員)、工

藤弘二（ポーラ美術館学芸員）、浅野春男（美術史家）、大木麻利子（美術史家）

助成：2015（平成27）年度京都工芸繊維大学スーパーグローバル大学創成支援事業国際化モデル研究室支援事業

国際シンポジウム「ゾラの美術批評を再考する」

主催：日仏美術学会／京都工芸繊維大学デザイン・建築学系造形史研究室

日時：2016（平成28）年12月17日（土）13:00-17:20

会場：京都工芸繊維大学松ヶ崎キャンパス東構内東3号館1階K-101教室

登壇者：リチャード・シフ（Richard Schiff）（テキサス大学教授）、吉田典子（神戸大学教授）、石谷治寛（京都市立芸術大学芸術資源研究センター研究員）、寺田寅彦（東京大学教授）、永井隆則（京都工芸繊維大学准教授）

助成：2016（平成28）年度公益財団法人村田学術振興財団第32回研究会（学会）助成金

国際シンポジウム「ピカソと人類の美術」

主催：京都工芸繊維大学デザイン・建築学系造形史研究室／日仏美術学会

日時：2017（平成29）年11月11日（土）10:00-18:00

会場：京都工芸繊維大学松ヶ崎キャンパス西構内1号館1階0111教室

登壇者：大高保二郎（早稲田大学名誉教授）、ロランス・マドリヌ（Laurence Madeline）（フランス文化財主任学芸員）、カテリナ・ザッピア（Caterina Zappia）（ペルージャ大学名誉教授）、松田健児（慶應義塾大学准教授）、永井隆則（京都工芸繊維大学准教授）、松井裕美（名古屋大学YLC特任助教）、大久保恭子（京都橘大学教授）、町田つかさ（和泉市久保惣記念美術館学芸員）

助成：2017（平成29）年度公益財団法人ポーラ美術振興財団「美術に関する国際交流助成」／2016（平成28）年度公益財団法人鹿島美術財団「美術に関する国際交流援助」（外国人研究者招致）／2017（平成29）年度京都工芸繊維大学シンポジウム等開催助成支援事業

国際シンポジウム「セザンヌとゾラの創造的関係を再考する」

主催：日仏美術学会／京都工芸繊維大学デザイン・建築学系造形史研究室

／神戸大学大学院国際文化学研究科吉田典子研究室

日時：2018（平成30）年12月2日（日）10:00-18:00

会場：京都工芸繊維大学松ヶ崎キャンパス東構内東3号館1階K-101教室

登壇者：ジャン・アルーユ（Jean Arrouye）（プロヴァンス大学名誉教授）、
ドニ・クターニュ（Denis Coutagne）（ポール・セザンヌ協会会長）、
浅野春男（美術史家）、永井隆則（京都工芸繊維大学准教授）、アラン・
パジェス（Alain Pagès）（パリ第三大学名誉教授）、吉田典子（神戸大
学教授）、寺田寅彦（東京大学教授）、高橋愛（法政大学准教授）

助成：2018（平成30）年度笹川日仏財団助成金／2018（平成30）年度京都工
芸繊維大学シンポジウム等開催助成支援事業／独立行政法人日本学術
振興会科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）基盤研究（C）
（一般）「近代芸術形成期における文学と絵画の協働に関する研究」（研
究代表者：吉田典子）

若手シンポジウム「印象主義研究の現在」

主催：日仏美術学会／京都工芸繊維大学デザイン・建築学系造形史研究室

日時：2019年6月22日（土）13:30-18:00

会場：京都工芸繊維大学松ヶ崎キャンパス東構内東3号館1階K-101教室

登壇者：石谷治寛（京都市立芸術大学芸術資源研究センター研究員）、亀田
晃輔（神戸大学大学院博士後期課程）、深尾茅奈美（神奈川県立近代美
術館非常勤学芸員）、鈴木慈子（兵庫県立美術館学芸員）

国際シンポジウム「ポスト印象派におけるユートピアの表象」

主催：日仏美術学会／京都工芸繊維大学デザイン・建築学系造形史研究室

日時：2019（令和元）年6月24日14:30-17:20

会場：京都工芸繊維大学松ヶ崎キャンパス東構内60周年記念館1階記念
ホール

登壇者：ダリオ・ガンボーニ（Dario Gambini）（ジュネーヴ大学教授）、ア
ンドレ・ドンブロウスキー（André Dombrowski）（ペンシルベニア大
学准教授）、冨府寺司（大阪大学教授）

助成：2019（令和元）年度京都工芸繊維大学シンポジウム等開催助成支援事
業／2019（令和元）年度京都工芸繊維大学OPEN TECHシンポジウム

支援事業／『ポスト印象主義におけるユートピア芸術論に関する総合的研究』2019（平成31）-2021（令和3）年度独立行政法人日本学術振興会科学研究費助成事業 基盤研究（C）

国際シンポジウム「西洋美術におけるユートピアの表象」

主催：日仏美術学会／京都工芸繊維大学デザイン・建築学系造形史研究室

日時：2020（令和2）年11月27日（土）19:00-23:00

会場：ZOOM Meeting（オンライン）

登壇者：ヤシュ・エルスナー（Jas Elsner）（オクスフォード大学教授）、倉持充希（神戸学院大学講師）、エメ・ブラウン・プライス（Aimée Brown Price）（米国、美術史家）、吉田朋子（京都ノートルダム女子大学准教授）

助成：2020（令和2）年度公益財団法人村田学術振興財団第36回研究会（学会）助成金／2020（令和2）年度京都工芸繊維大学シンポジウム等開催支援事業

国際シンポジウム「ポスト印象派から後世に継承されたユートピアの表象」

主催：日仏美術学会／京都工芸繊維大学デザイン・建築学系造形史研究室

日時：2021（令和3）年11月27日（土）、28日（日）

会場：ZOOM Webinar（オンライン）

登壇者：マリナ・フェレッティ（Marina Ferretti）（ジベルニー、印象派美術館名誉館長）、ニナ・マリア・アタナソグルー・カルマイヤー（Nina Maria Athanassoglou-Kallmyer）（デラウェア大学名誉教授）、レミ・ラブリュス（Rémi Labrusse）（パリ、ナンテール大学教授）、正田倫顕（ゴッホ研究者）、小泉順也（一橋大学教授）

助成：2020（令和2）年度公益財団法人吉野石膏美術振興財団国際交流助成／2021（令和3）年度公益財団法人村田学術振興財団第37回研究会（学会）助成金／京都工芸繊維大学R3年度__国際化モデル研究室支援事業／京都工芸繊維大学R3年度__OPEN TECHシンポジウム支援事業

2) 学術講演会 Conférences scientifiques

1. 外国人 (Étrangers)

リチャード・シフ (Dr. Richard Schiff) (テキサス大学教授)

演題:「モダン・アートにおけるデジタル体験 (Digital Experience in Modern Art)」(英語)

日時: 2001年9月22日(土) 15:00-17:00

会場: 京都工芸繊維大学松ヶ崎キャンパス西構内1号館3階大学院会議室

ジャン・クロード・レーベンシュテイン (Dr. Jean-Claude Lebensztejn)
(パリ第一大学名誉教授)

演題:「パレルゴンとマニエール (Parergon et manière)」(仏語)

日時: 2004年7月1日(木) 14:00-15:30

会場: 京都工芸繊維大学松ヶ崎キャンパス西構内1号館3階大学院会議室

ジャン・クロード・レーベンシュテイン (Dr. Jean-Claude Lebensztejn)
(パリ第一大学名誉教授)

演題:「セザンヌのエチュード (Étude cézannienne)」(仏語)

日時: 2004年7月2日(金) 14:00-15:30

会場: 京都工芸繊維大学松ヶ崎キャンパス西構内1号館3階大学院会議室

ジェラルド・チプリアーニ (Dr. Gerald Cipriani) (セントラル・イングラ
ンド大学助教授)

演題:「メルロ・ポンティ、セザンヌ、可視性の「場所」 (Merleau-Ponty,
Cézanne and the Basis of the Visible)」(英語)

日時: 2005年6月29日(水) 15:00-18:00

会場: 京都工芸繊維大学松ヶ崎キャンパス西構内1号館3階大学院会議室

ジャン・クロード・レーベンシュテイン (Dr. Jean-Claude Lebensztejn)
(パリ第一大学名誉教授)

演題:「セザンヌの夢 (Rêve de Cézanne)」(仏語)

日時: 2009年9月5日(土) 9:30-11:00

会場: 京都工芸繊維大学松ヶ崎キャンパス西構内1号館3階大学院会議室

リンダ・ノックリン (Dr. Linda Nochlin) (ニューヨーク大学名誉教授)
演題：「ルイズ・ブルジョワ (Old Age Style: Late Louise Bourgeois)」
(英語)

日時：2009年10月22日(木) 16:00-18:00

会場：京都工芸繊維大学松ヶ崎キャンパス西構内1号館3階大学院会議室

イヴ・アラン・ボワ (Dr. Yve-Alain Bois) (プリンストン高等研究院歴史
研究科教授)

演題：「セザンヌとマティス (Cézanne et Matisse)」(仏語)

日時：2010年9月7日(火) 16:00-18:00

会場：京都工芸繊維大学松ヶ崎キャンパス東構内60周年記念館1階記念
ホール

邵宏 (Dr. Shao Hong) (広州美術学院教授)

演題：「モダニズム以前の西洋美術に於ける東洋的要素 (Some Oriental
Elements in Western Art before Modernism)」(英語)

日時：2015年5月11日(月) 14:30-16:00

会場：京都工芸繊維大学松ヶ崎キャンパス東構内東1号館1階E111教室

ドニ・クターニュ (Denis Coutagne) (グラネ美術館元館長兼学芸課長)

演題：「セザンヌとジャズ・ド・ブッフアン (Cézanne and Jas de Bouffan)」
(英語)

日時：2016年5月11日(水) 17:50-19:20

会場：京都工芸繊維大学松ヶ崎キャンパス東構内東1号館2階E121教室

リチャード・シフ (Dr. Richard Schiff) (テキサス大学教授)

演題：「物質性と精神性：セザンヌの残した重要な遺産 (Materiality and
Morality: Cézanne's Critical Fortune)」(英語)

日時：2016年12月16日(金) 16:10-17:40

会場：京都工芸繊維大学松ヶ崎キャンパス東構内東1号館2階E121教室

ジェイムズ・ルービン (Dr. James H. Rubin) (ニューヨーク州立大学、ストーニーブルック校教授)

演題：「モネの庭に走った列車 (The Train that Ran Through Monet's Garden)」(英語)

日時：2016年6月20日(月) 16:10-17:40

会場：京都工芸繊維大学松ヶ崎キャンパス東構内東1号館2階E121教室

カテリーナ・ザッピア (Caterina Zappia) (ペルージャ大学名誉教授)、ロランス・マドレーヌ (Laurence Madeline) (フランス文化財主任学芸員)

学術講演会「ピカソ再考」

演題I：「ピカソとマネ (Picasso et Manet)」(Laurence Madeline) (仏語)

演題II：「ピカソとイタリア：芸術家、知識人、政治家たち (Picasso et les italiens : artistes, intellectuels, hommes politiques)」(Caterina Zappia) (仏語)

日時：2017年11月14日(火) 13:00-16:40

会場：上智大学中央図書館9階 L-921

マリナ・フェレッティ (Marina Ferretti) (ジヴェルニー、印象派美術館名誉館長)

学術講演会「芸術と科学：新印象主義の場合 (Art et science, l'exemple du néo-impressionnisme)」(仏語)

日時：2022年1月7日(金) 16:20-17:50

会場：Webex Meeting (オンライン)

2. 日本人 (Japonais)

田中淳 (東京文化財研究所美術部第二室長)

演題：「日本近代美術における「受容」史研究の課題」

日時：2000年7月21日(金) 14:00-15:30

会場：京都工芸繊維大学工芸学部松ヶ崎キャンパス西構内8号館5階502演習室

稲賀繁美 (国際日本文化研究センター助教授)

演題：「モーリス・ドニと日本」

日時：2001年7月28日（土）15:00-18:00

会場：京都工芸繊維大学工芸学部松ヶ崎キャンパス西構内8号館地下1階
映像スタジオ

山梨絵美子（独立行政法人東京文化財研究所美術部広領域研究室長）

演題：「日本近代洋画とアジア美術との関係—明治初期から1930年代までの概観」

日時：2003年10月21日（火）14:00-16:00

会場：京都工芸繊維大学松ヶ崎キャンパス西構内1号館3階大学院会議室

辻成史（大手前大学人文科学部教授／西宮市大谷記念美術館館長）

演題：「素描 歴史の風景：むさしの、そして『武蔵野』まで—不同舎とpre-自然主義文学の関係、徳富蘇峰の社会思想の変遷とその社会背景」

日時：2004年1月10日（土）14:00-16:00

会場：京都工芸繊維大学松ヶ崎キャンパス東構内東2号館5階デジタル・メディア・スタジオ

鈴木麻之（朝日新聞社企画事業本部文化事業部長）

演題：「朝日新聞社企画事業本部文化事業部の仕事について」

日時：2021年12月15日（水）19:30-21:00

会場：Webex Meeting（オンライン）

3) 「アート・メディア・テクノロジー（デザイン・建築学課程造形史研究室企画連続講演会）」

Série de conférences ; *Art, média, technologie*, organisée par le laboratoire d'histoire de l'art et de design

2007（平成19）年度

第1回：坂上桂子（早稲田大学文学学術院准教授）

演題：「近代美術とテクノロジー」

日時：2007年12月22日（土）14:00-16:00

会場：京都工芸繊維大学松ヶ崎キャンパス東構内東1号館1階E111教室

第2回：松本透（東京国立近代美術館企画課長）

演題：「現代美術とテクノロジー」

日時：2008年1月12日（土）14:00-16:00

会場：京都工芸繊維大学松ヶ崎キャンパス東構内東1号館1階E111教室

第3回：吉岡洋（京都大学大学院文学研究科教授）

演題：「アート、メディア、テクノロジーに関する考察」

日時：2008年1月15日（火）16:10-18:10

会場：京都工芸繊維大学松ヶ崎キャンパス東構内東1号館1階E111教室

2008（平成20）年度

第1回：三浦篤（東京大学大学院総合文化研究科教授）

演題：「近代絵画と鉄道」

日時：2008年10月7日（火）16:10-17:40

会場：京都工芸繊維大学松ヶ崎キャンパス東構内東1号館1階E111教室

第2回：室井尚（横浜国立大学教育人間科学部教授）

演題：「メディア・テクノロジーとアートの変質」

日時：2008年10月14日（火）16:10-17:40

会場：京都工芸繊維大学松ヶ崎キャンパス東構内東1号館1階E111教室

2009（平成21）年度

第1回：長谷川祐子（東京都現代美術館学芸課長／多摩美術大学芸術学科
特任教授）

演題：「デュアル・リアリティ（dual reality）時代における感性のありか—
アート・メディア・テクノロジーに関する考察—」

日時：2010年1月12日（火）16:10-17:40

会場：京都工芸繊維大学松ヶ崎キャンパス東構内東1号館1階E111教室

第2回：住友文彦（横浜国際映画祭2009事務局）

演題：「日本の戦後美術とテクノロジー」

日時：2010年1月19日（火）16:10-17:40

会場：京都工芸繊維大学松ヶ崎キャンパス東構内東1号館2階E121教室

2010（平成22）年度

第1回：長谷川祐子（東京都現代美術館学芸課長／多摩美術大学芸術学科
特任教授）

演題：「アート／建築／映像の新しい関係」

日時：2010年11月2日（火）16:10-17:40

会場：京都工芸繊維大学松ヶ崎キャンパス東構内60周年記念館1階記念
ホール

第2回：中林和雄（東京国立近代美術館美術課長）

演題：「ビデオの時間」

日時：2010年11月16日（火）16:10-17:40

会場：京都工芸繊維大学松ヶ崎キャンパス東構内60周年記念館1階記念
ホール

第3回：太田泰人（神奈川県立近代美術館普及課長）

演題：「西洋美術における身体表象とテクノロジー」

日時：2010年11月30日（火）16:10-17:40

会場：京都工芸繊維大学松ヶ崎キャンパス東構内60周年記念館1階記念
ホール

2011（平成23）年度

第1回：森山朋絵（東京都現代美術館学芸員）

演題：「メディア芸術の過去と未来—文化施設における課題と展望」

日時：2011年11月29日（火）16:10-17:40

会場：京都工芸繊維大学松ヶ崎キャンパス東構内東1号館2階E121教室

第2回：柏木博（武蔵野美術大学教授）

演題：「視覚表現／コミュニケーション／メディア」

日時：2011年12月6日（火）16:10-17:40

会場：京都工芸繊維大学松ヶ崎キャンパス東構内東1号館2階E121教室

第3回：河本信治（京都国立近代美術館特任研究員）

演題：「映像技術のアーキオロジー：ウィリアム・ケントリッジ作品における近代（史）再考」

日時：2011年12月13日（火）16:10-18:10

会場：京都工芸繊維大学松ヶ崎キャンパス東構内東1号館2階E121教室

2012（平成24）年度

第1回：篠原資明（京都大学教授）

演題：「村上隆をめぐる」

日時：2013年1月8日（火）16:10-17:40

会場：京都工芸繊維大学松ヶ崎キャンパス東構内東1号館2階E121教室

第2回：深井晃子（京都服飾文化研究財団理事、チーフ・キュレーター）

演題：「ファッションの変容とテクノロジー：日本ファッションの未来性」

日時：2013年1月22日（火）16:10-17:40

会場：京都工芸繊維大学松ヶ崎キャンパス東構内東1号館2階E121教室

第3回：岸文和（同志社大学教授）

演題：「テレビCMの芸術学—レトリックの視点から」

日時：2013年1月29日（火）16:10-18:10

会場：京都工芸繊維大学松ヶ崎キャンパス東構内東1号館2階E121教室

2013（平成25）年度

第1回：樋田豊郎（秋田公立美術大学学長）

演題「メディアとテクノロジーと地方分権」

日時：2014年1月14日（火）16:10-17:40

会場：京都工芸繊維大学松ヶ崎キャンパス東構内東1号館2階E121教室

第2回：岸文和（同志社大学教授）

「テレビCMの芸術学—「かわいい」商品を買わせる技術」

日時：2014年1月21日（火）16:10-17:40

会場：京都工芸繊維大学松ヶ崎キャンパス東構内東1号館2階E121教室

第3回：米村典子（九州大学芸術工学院准教授）

演題「モノとしての絵画：19世紀におけるテクノロジーの変化と芸術」

日時：2014年1月28日（火）16:10-17:40

会場：京都工芸繊維大学松ヶ崎キャンパス東構内東1号館2階E121教室

第4回：岩城見一（京都大学名誉教授／京都国立近代美術館元館長）

演題「宇宙時代のアート—ISS「きぼう」におけるいくつかの実験について—」

日時：2014年2月4日（火）16:10-17:40

会場：京都工芸繊維大学松ヶ崎キャンパス東構内東1号館2階E121教室

2014（平成26）年度

第1回：加須屋明子（京都市立芸術大学美術学部准教授）

演題：「液晶絵画の行方」

日時：2015年1月23日（金）16:10-17:40

会場：京都工芸繊維大学松ヶ崎キャンパス東構内東1号館2階E121教室

第2回：西村清和（國學院大学文学部教授）

演題：「電脳遊戯が開く美的文化の諸相」

日時：2015年1月30日（金）16:10-17:40

会場：京都工芸繊維大学松ヶ崎キャンパス東構内東1号館2階E121教室

2015（平成27）年度

第1回：仕方幸子（キュレーター／多摩美術大学・東京造形大学客員教授）

演題：「環境的無意識：自然・社会・精神のエコロジー」

日時：2016年1月8日（金）16:10-17:40

会場：京都工芸繊維大学松ヶ崎キャンパス東構内東1号館2階E121教室

第2回：前川修（神戸大学教授）

演題：「テクノロジーと心霊表象の変遷」

日時：2016年1月29日（金）16:10-17:40

会場：京都工芸繊維大学松ヶ崎キャンパス東構内東1号館2階E121教室

4) 「デザイン学特別講義」(A:前期、B:後期)(デザイン学専攻主催)

Cours spécial de science du design (A: premier semestre, B: deuxième semestre) organisé par la section Design

イザベル・カーン (Dr. Isabelle Cahn) (オルセー美術館絵画部門主任学芸員)

演題:「オルセー美術館に於ける展示、保存、修復 (Exhibit, Conserve, Restore in the Orsay Museum Paris)」(英語)

日時:2015年6月12日(金)5限16:10-17:40(A)

会場:京都工芸繊維大学松ヶ崎キャンパス東構内60周年記念館1階記念ホール

杉山菜穂子(三菱一号館美術館学芸員)

演題:「美術館と学芸員～三菱一号館美術館を例に」

日時:2015年11月10日(火)5限16:10-17:40(B)

会場:京都工芸繊維大学松ヶ崎キャンパス東構内東1号館5階E1-501演習室

大向務(大向デザイン事務所代表)

演題:「展覧会におけるグラフィックデザインの役割」

日時:2016年6月6日(月)5限16:10-17:40(A)

会場:京都工芸繊維大学松ヶ崎キャンパス東構内東1号館2階E121教室

池田裕子(京都国立近代美術館学芸課長)

演題:「見えないものを見えるようにすること、そして考えるようにすること 美術館でのキュレーション、京都国立近代美術館の場合」

日時:2017年5月15日(月)5限16:10-17:40(A)

会場:京都工芸繊維大学松ヶ崎キャンパス東構内東1号館2階E121教室

西岡勉(グラフィック・デザイナー)

演題:「展覧会のグラフィック」

日時:2017年12月1日(金)6限17:50-19:20(B)

会場：京都工芸繊維大学松ヶ崎キャンパス東構内東1号館2階E121教室

新畑泰秀（石橋財団ブリヂストン美術館学芸課長）

演題：「石橋財団ブリヂストン美術館のこれまでとこれから」

日時：2018年5月21日（月）5限 16:10-17:40（A）

会場：京都工芸繊維大学松ヶ崎キャンパス東構内東1号館2階E121教室

長屋光枝（国立新美術館学芸課長）

演題：「キュレーションー国立新美術館の例」

日時：2019年5月31日（金）5限 16:10-17:40（A）

会場：京都工芸繊維大学松ヶ崎キャンパス東構内東3号館2階K-201教室

松山沙樹（京都国立近代美術館特定研究員）

演題：「美術館と〈人〉をつなぐー教育普及の現場から」

日時：2019年12月24日（金）5限 16:10-17:40（B）

会場：京都工芸繊維大学松ヶ崎キャンパス東構内東3号館2階K-201教室

松山沙樹（京都国立近代美術館特定研究員）

演題：「美術館と〈人〉をつなぐー教育普及の現場から」

日時：2020年12月15日（火）5限 16:10-17:40（B）

会場：Webex Meeting（オンライン）

富田章（東京ステーション・ギャラリー館長）

演題：「東京ステーション・ギャラリーの戦略」

日時：2021年7月26日（月）5限 16:20~17:50（A）

会場：京都工芸繊維大学松ヶ崎キャンパス東構内東3号館2階K-201教室

／オンライン同時配信

5) 学会（京都工芸繊維大学）

Réunions savantes à l'Institut de Technologie de Kyoto

第273回美学会西部会例会 2009年6月6日（土）

第280回美学会西部会例会 2010年12月4日（土）

美術史学会西支部例会 2012年3月17日(土)
第291回美学会西部会例会 2012年12月15日(土)
第305回美学会西部会例会 2015年9月19日(土)
第311回美学会西部会例会 2016年12月3日(土)
美術史学会西支部例会 2017年3月18日(土)
第322回美学会西部会例会 2019年3月16日(土)
2019年度第72回美術史学会全国大会 2019年5月17日(金) -19日(日)

XXIX. 受賞歴 Histoire des prix

大阪府文化振興財団主催第5回カタログコンクール(1992年)優秀賞:『ゴッホと日本展』 展覧会図録、テレビ朝日/世田谷美術館との共同受賞

大阪府文化振興財団主催第8回カタログコンクール(1997年)優秀賞:『ピカソ 愛と苦悩—ゲルニカへの道展』 展覧会図録、東武美術館/朝日新聞社東京本社との共同受賞

XXX. 書評対象著作物 Ouvrages destinés au compte-rendu

(太字が書評対象著作物で発表年月日順に記載 ☆印が書評記事で発表年月日順に記載)

『モダン・アート論再考—制作の論理から』 思文閣出版、2004年4月(2017年3月、2刷)

☆三浦篤「絵画の物質性読み直す」『読売新聞』2004年7月25日、17面

☆篠原資明「43人へのアンケート「2004年上半期の収穫から」」『週刊読書人』第2547号、2004年7月30日、6面

『フランス近代美術史の現在—ニュー・アート・ヒストリー以後の視座から』(共著) 三元社、2007年8月(2013年4月、2刷)

☆高山宏「高山宏の「読んで生き、書いて死ぬ。」」『紀伊國屋・書評空間』web掲載(2008年4月11日付)

https://booklog.kinokuniya.co.jp/takayama/archives/2008/04/post_64.html

Web掲載のため号数、頁付けなし

☆鈴木杜幾子「書評 永井隆則 編『フランス近代美術史の現在—ニュー・アート・ヒストリー以後の視座から』」『IMAGE & GENDER』Vol. 8、2008年3月、131-133頁

『〈場所〉で読み解くフランス近代美術』（共著）三元社、2016年10月

☆天野知香「2016年下半期読書アンケート」『図書新聞』第3284号、2016年12月24日号、6面

☆執筆者不明、記事名なし『World 旅のひろば』（ワールド航空サービス広報誌）、2017年2月号、102頁

☆石谷治寛「会員の出版した本（編著／共著）」『REPRE』第30号（2017年、表象文化論学会Newsletter）Web掲載（2017年7月29日付）

<https://www.repre.org/repre/vol30/books/editing-multiple/basho/>
Web掲載のため号数、頁付けなし

『セザンヌ 近代絵画の父、とは何か？』（国際共著）三元社、2019年7月

☆荻野哉「新たなセザンヌ像を切り開く：「近代絵画の父」像からの脱出」『週刊読書人』第3319号、2019年12月13日、7面

☆吉田典子「丁寧に検証したセザンヌの受容史、評価史研究：セザンヌ芸術の新たな理解へのヒント」（「文学・芸術：学術・思想」の欄）『図書新聞』第3418号、2019年10月12日、6面

☆執筆者不明「近代絵画の父に迫る「セザンヌ大全」」『美術の窓』第38巻12号（通巻455号）、2019年12月号、115頁

☆近藤亮介「Book新着のアート&カルチャー本から」『美術手帖』Vol.72 No.1080、2020年2月号、231頁

『ピカソと人類の美術』（国際共著、大高保二郎との共編）三元社、2020年3月

☆宮田徹也「私達はピカソの何を知っているだろう：本書はピカソ、芸術を通り越して複雑怪奇な人間を知る機運となる」（「Books」の欄）『図書新聞』第3455号、2020年7月11日号、8面

☆執筆者不明、記事名なし『月刊アートコレクターズ』13巻7号（通巻127

号)、2020年7月号、96頁

☆執筆者不明「Art Books：新刊情報」『月刊美術』No. 539、2020年8月号、161頁

☆執筆者不明「21世紀を迎えて生き続ける巨匠」『美術の窓』第39巻8号(通巻463号)、2020年8月号、124頁

☆河本真理「危機の時代の美術とその変容：ウィズコロナ年の収穫」(「2020年回顧特集」)『週刊読書人』第3370号、2020年12月18日、9面

☆大島徹也「大高保二郎・永井隆則 編『ピカソと人類の美術』三元社」『美術フォーラム21』第42号、2020年12月、131-133頁

XXXI. 被引用論文一覧表

Liste des ouvrages et articles cités par d'autres chercheurs

(太字が被引用文献で発表年月日順に記載 ☆印が引用先文献で発表年月日順に記載)

1) 論文、著書の中での引用

Citations dans des articles et ouvrages académiques

『1910年代前後の日本におけるセザンヌ(セザンヌ芸術の受容と紹介) “Cézannism in Japan, 1902-1921”』1989(平成元)年度文部省科学研究費補助金 奨励研究(A)研究成果報告書、永井隆則 編、永井隆則(京都国立近代美術館)、1990年3月、1-34頁

☆陰里鉄郎「日本におけるセザンヌ受容」『セザンヌ展』(展覧会図録)横浜美術館、1999年9月11日-12月19日、横浜美術館、10頁

☆中村尚明「伝習の調停者マネ、近世人中の近世人たるセザンヌ—ユリウス・マイヤー=グレーフェと木下空太郎：「絵画の約束」の背後に」『セザンヌ展』(展覧会図録)横浜美術館、1999年9月11日-12月19日、横浜美術館、167頁

☆新畑泰秀「明治・大正期美術雑誌所蔵「セザンヌ」関連記事一覧『セザンヌ展』(展覧会図録)横浜美術館、1999年9月11日-12月19日、横浜美術館、191頁

☆古田浩俊「有島生馬と島崎藤村—セザンヌ受容史の中で」『國文學：解釈

と教材の研究』第45巻第8号、2000年7月、73、75、78、79頁

☆井尻樂『1910年代前後の日本におけるカンディンスキー像—カンディンスキー芸術の受容と紹介』京都大学博士論文(人間・環境学)(学位記番号:人博第264号)、2005年1月24日、112-113頁

☆南明日香「セザンヌ変奏—有島生馬の描いた美術家像」『現代文学』季刊'05第72号、2005年12月、36、54頁

「ゴッホの油彩画・デッサンと日本美術—ゴッホが日本美術に見たもの」『ゴッホと日本』(展覧会図録)京都国立近代美術館、1992年2月18日-3月29日、永井隆則 編、テレビ朝日、1992年2月、169-181頁

☆原田平作「日本とファン・ゴッホ、その序論的考察」『待兼山論叢美学篇』第29号、1995年12月、9、18、11、21、22頁

☆谷新「20世紀—変革のパノラマ」『宇都宮美術館開館記念 20世紀美術の冒険 アムステルダム市立美術館コレクション展』(展覧会図録)宇都宮美術館、1997年3月23日-5月18日、宇都宮美術館、25頁

「新印象主義」『世界美術大全集 第23巻 後期印象派時代』池上忠治 編、小学館、1993年、253-272頁

☆松下由里(YM)「タッチ、タッチ、プラン」(III印象派の絵画と技法)『開館20周年記念 群馬県人口200万人達成記念 印象派展』(展覧会図録)1994年9月21日-11月6日、群馬県立近代美術館、167頁

☆北村陽子「フェネオンにとっての新印象主義と象徴主義—美術史家・宮川淳のための「無駄」—」『早稲田大学大学院文学研究科紀要 第2分冊』第58号、2012年、21頁

「日本に於けるセザンヌ受容史の一断面—1920年代初頭の人格主義的セザンヌ像の形成と行方」『ユリイカ』第28巻第11号、1996年9月、188-198頁

☆古田浩俊「有島生馬と島崎藤村—セザンヌ受容史の中で」『國文學:解釈と教材の研究』第45巻第8号、2000年7月、73、75、78、79頁

☆亀井祐美「美術史における芸術家—植田壽藏『近代繪畫史論』に潜む社会的役割を問題化する—」『文化学年報』第52輯、2003年3月15日、358-362、

373頁

☆南明日香「セザンヌ変奏—有島生馬の描いた美術家像」『現代文学』季刊'05第72号、2005年12月、36、54頁

「1920年代初頭のフランスと日本のセザニスム—知覚主義からフォルマリズムへ／知覚主義から人格主義へ—」『鹿島美術研究』年報13号別冊、財団法人鹿島美術財団編、1996年11月、173-187頁

☆古田浩俊「有島生馬と島崎藤村—セザンヌ受容史の中で」『國文學：解釈と教材の研究』第45巻第8号、2000年7月、73、75、78、79頁

「日本のセザニスム—1920年代日本の人格主義セザンヌ像の美的根拠とその形成に関する思想及び美術制作の文脈について」『美術史』第144冊、Vol. XLVII、No.2、1998年3月、246-247頁

☆古田浩俊「有島生馬と島崎藤村—セザンヌ受容史の中で」『國文學：解釈と教材の研究』第45巻第8号、2000年7月、73、75、78、79頁

☆亀井祐美「美術史における芸術家—植田壽藏『近代繪畫史論』に潜む社会的役割を問題化する—」『文化学年報』第52輯、2003年3月15日、358-362、373頁

「1930年代日本のセザンヌ受容—「人格」から「造型」へ」『美学』第195号、第49巻第33号、1998年12月、54頁

☆亀井祐美「美術史における芸術家—植田壽藏『近代繪畫史論』に潜む社会的役割を問題化する—」『文化学年報』第52輯、2003年3月15日、358-362、373頁

「1930年代日本のセザンヌ受容—「人格」から「造型」へ」『美学・芸術学の今日的課題「日本に於ける美学・芸術学の歩みと課題」+〈病〉の感性学』美学会編、1999年3月、17-26頁

☆古田浩俊「有島生馬と島崎藤村—セザンヌ受容史の中で」『國文學：解釈と教材の研究』第45巻第8号、2000年7月、73、75、78、79頁

☆亀井祐美「美術史における芸術家—植田壽藏『近代繪畫史論』に潜む社会的役割を問題化する—」『文化学年報』第52輯、2003年3月15日、358-362、

「日本におけるセザンヌ受容史」『美術手帖 特集 新セザンヌ解剖学—いま「近代絵画の父」から何を学べるか?』第51巻第777号、1999年10月号、68-69頁

☆古田浩俊「有島生馬と島崎藤村—セザンヌ受容史の中で」『國文學：解釈と教材の研究』第45巻第8号、2000年7月、73、75、78、79頁

☆亀井祐美「美術史における芸術家—植田壽藏『近代繪畫史論』に潜む社会的役割を問題化する—」『文化学年報』第52輯、2003年3月15日、358-362、373頁

「アンリ・マティスの絵画と装飾」『デザイン理論』第38号、意匠学会編、2000年1月、1-14頁

☆利根川由奈「裸婦・装飾・快樂—アンリ・マティスとルネ・マグリットの比較から」『ユリイカ』第53巻第5号（通巻第773号）、2021年5月号、162頁

『1930-40年代の日本におけるセザンヌ受容 Cézannisme in Japan 1922・1-1947・1』1998（平成10）-2001（平成13）年度文部省科学研究費補助金基盤研究（C）研究成果報告書、永井隆則 編、永井隆則（京都工芸繊維大学）、2002年3月、1-94頁

☆井尻樂『1910年代前後の日本におけるカンディンスキー像—カンディンスキー芸術の受容と紹介』京都大学博士論文（人間・環境学）（学位記番号：人博第264号）、2005年1月24日、112-113頁

☆阿部真弓「ポスト印象派の用語について」『オルセー美術館展2010「ポスト印象派」』（展覧会図録）2010年5月26日-8月16日、国立新美術館、225頁

「1920年代日本の人格主義セザンヌ像の美的根拠とその形成に関する思想及び美術制作の文脈について」『美術研究』第375号、独立行政法人文化財研究所 東京文化財研究所 編、2002年3月、38-56（336-354）頁

☆六人部昭典「高村光太郎『印象主義の思想と藝術』に関する一考察」『大

手前大学人文科学部論集』第3巻、2002年、7、8、12頁

☆六人部昭典「高村光太郎の言説における「生」」『大手前大学人文科学部論集』第4巻、2003年、13頁

「1910-20年代京都に於ける美術批評と芸術論」『シリーズ・近代日本の知第4巻 芸術／葛藤の現場』岩城見一 編、晃洋書房、2002年11月、103-120頁

☆井尻樂『1910年代前後の日本におけるカンディンスキー像—カンディンスキー芸術の受容と紹介』京都大学博士論文(人間・環境学)(学位記番号：人博第264号)、2005年1月24日、53-54頁

☆井尻樂「京都に於けるカンディンスキーの受容」『京都産業大学論集』第34号、2006年3月、66頁

☆齊藤陽介「須田国太郎の芸術論形成—師・深田康算の影響から—」『須田国太郎—珠玉の上原コレクション—』公益財団法人上原近代美術館、2012年、97頁

『モダン・アート論再考—制作の論理から—』思文閣出版、2004年4月

☆八田典子「芸術受容の「場」の変容—「大地の芸術祭」に見る「展覧会」の新しいかたち—」『総合政策論叢』第13号、島根県立大学総合政策学会編、2007年3月、145頁

☆大木麻利子「技法」『セザンヌ—近代絵画の父とは何か?』永井隆則 編、三元社、2019年、34、41頁

☆孝岡睦子「パブロ・ピカソの作品における層と時間」『ピカソと人類の美術』大高保二郎／永井隆則 編、三元社、2020年、105頁

「セザンヌと後世代」『モダン・アート論再考—制作の論理から—』思文閣出版、2004年4月、126-144頁

☆長屋光枝「セザンヌからマティスへ—《3人の水浴の女たち》を手がかりに」『国立新美術館開館5周年 セザンヌ—パリとプロヴァンス』(展覧会図録)国立新美術館、2012年3月28日(水) -6月11日(月)、国立新美術館、2012年、157頁

「セザンヌの塗り残しの問題」『モダン・アート論再考—制作の論理から—』
思文閣出版、2004年4月、98-113頁

☆工藤弘二「セザンヌの塗り残し」『印象派、記憶への旅 ポーラ美術館×
ひろしま美術館』（展覧会図録）ポーラ美術館、2019年3月23日（土）-7月
28日（日）、青幻社、141-142頁

☆大木麻利子「技法」『セザンヌ—近代絵画の父とは何か？』永井隆則 編、
三元社、2019年7月、34-35頁

「ピカソとミノタウロス」『モダン・アート論再考—制作の論理から—』思
文閣出版、2004年4月、145-157頁

☆天野知香「ピカソとマティス—1930年代における挿絵、版画作品を中心
とした古典的・神話的テーマをめぐる交感」『ピカソと人類の美術』大高保二
郎／永井隆則 編、三元社、2020年、285、286頁

「『日本主義』のセザンヌ受容とその思想環境」『京都工芸繊維大学工芸学部
紀要 人文』第54号、2006年3月、79-112頁

☆楠本衣里佳「南画再評価からみる日本に於ける中国評価の変遷」『京都精
華大学紀要』第50号、2017年3月、53頁

『セザンヌ受容の研究』中央公論美術出版、2007年3月

☆南明日香「高村光太郎のセザンヌをめぐる造形と言葉」『國語と國文学』
第86巻第6号通巻1027号、2009年6月1日、50頁

☆濱崎礼二「『白樺』派の画家たち—「自己の為の芸術」とその「道程」—
『『白樺』誕生100年 白樺派の愛した美術』（展覧会図録）京都文化博物館、
2009年6月6日（土）-7月20日（月・祝）、京都文化博物館、154、159頁

☆阿部真弓「ポスト印象派の用語について」『オルセー美術館展2010「ポ
スト印象派」』（展覧会図録）、国立新美術館、2010年5月26日-8月16日、
国立新美術館、225頁

☆泰井良「児島善三郎《箱根》についての考察」『静岡県立美術館 紀要』
第26号 平成22年度、静岡県立美術館、2011年3月、16頁

☆齊藤陽介「須田国太郎のセザンヌ論に関する一考察」『静岡県博物館協会
研究紀要』第36号、静岡県博物館協会 編、2012年、59、60頁

☆齊藤陽介「須田国太郎の芸術論形成一師・深田康算の影響から一」『須田国太郎一珠玉の上原コレクション一』公益財団法人上原近代美術館、2012年、97頁

☆稲賀繁美『絵画の臨界 近代東アジア美術史の桎梏と命運』名古屋大学出版会、2014年、282頁、289頁、注119頁、注120頁、注121頁、注123頁

☆山岸恒雄『セザンヌと鉄斎 同質の感動とその由縁』思文閣出版、2015年、279、280頁

☆清水康次「『白樺』における西洋美術一初期数年間の西洋美術紹介を中心に一」『大阪大学文学研究科紀要』第57巻、2017年3月、176頁

☆大木麻利子「ポール・セザンヌは、いつ、どのようにポスト印象主義者となるか？一マイア=グレーフェのセザンヌ一マレー比較論」『セザンヌ一近代絵画の父とは何か？』永井隆則 編、三元社、2019年7月、114、115頁

「セザンヌの素描と身体 精神分析美術史を越えて」『フランス近代美術史の現在 ニュー・アート・ヒストリー以後の視座から』永井隆則 編、三元社、2007年8月、120-161頁

☆荒川徹「セザンヌ、1902-06年一絵画的出来事」(2007年度 超域文化科学専攻・表象文化論文分野 31-66101 東京大学大学院総合文化研究科修士学位論文)、2007年、86頁

☆秋丸知貴『ポール・セザンヌと蒸気鉄道一近代技術による視覚の変容』晃洋書房、2013年、179-180頁

「竹喬のセザンヌ受容再考」『東京国立近代美術館ニュース 現代の眼 特集 「生誕120年 小野竹喬」展によせて 竹喬と西洋近代絵画一そこから何を学んだか』第580号、独立行政法人東京国立近代美術館、2010年2-3月、2-3頁

☆稲賀繁美『絵画の臨界 近代東アジア美術史の桎梏と命運』名古屋大学出版会、2014年、121頁(注)

「須田国太郎と西洋近現代美術一孤立か共鳴か？」『美術フォーラム21』第23号、2011年5月、153-158頁

☆齊藤陽介「須田国太郎のセザンヌ論に関する一考察」『静岡県博物館協会研究紀要』第36号、静岡県博物館協会 編、2012年、59、60頁

☆齊藤陽介「須田国太郎の芸術論形成一師・深田康算の影響から一」『須田国太郎一珠玉の上原コレクション』公益財団法人 上原近代美術館、2012年、97頁

☆橋秀文「須田国太郎による動物園での『スケッチブック』その他」『神奈川県立近代美術館年報2012 ANNUAL REPORT』神奈川県立近代美術館、2014年3月、52-54頁

☆橋秀文「須田国太郎にとってのスペイン」『美術フォーラム21』第43号、2021年6月、112頁

「日本に於けるフランス—創造的受容「フランスシスム」研究の構築に向けて」『美術フォーラム 21 特集：日本におけるフランス—創造的受容』第23号、醍醐書房 編、2011年5月、24-26頁

☆ Kenji Matsuda/Tsukasa Machida, LA RECEPCIÓN DEL ARTE ESPAÑOL EN EL JAPÓN DE LAS PRIMERAS TRES DÉCADAS DEL SIGLO XX, MIGUEL CABAÑAS BRAVO/WIFREDO RINCÓN GARCÍA (eds.), *IMAGINARIOS EN CONFLICTO: LO ESPAÑOL EN LOS SIGLOS XIX Y XX, XVIII Jornadas Internacionales de Historia del Arte*, Madrid, 14-16 de septiembre, 2016, p. 97.

「セザンヌ研究の現在—研究史から見る今日のセザンヌ像」『シンポジウム記録集「セザンヌ—パリとプロヴァンス」展から見る今日のセザンヌ』（記録集）（共著）、国立新美術館 編・刊、2013年3月、8-33頁

☆秋丸知貴『セザンヌと蒸気鉄道—近代技術による視覚の変容』晃洋書房、2013年、193頁

「セザンヌの友情の行方をにぎる手紙を解説せよ！」『美術手帖 特集：世界一受けたい印象派の授業』第66巻第1008号、2014年8月、82-87頁

☆吉田典子「ゾラの美術批評校訂版小史」『近代』第112号、2015年3月、53頁

「セザンヌとジャズ・ド・ブッフアン—〈親密さ〉の表象」『〈場所〉で読み解くフランス近代美術』永井隆則 編、三元社、2016年10月、97-140頁

☆工藤弘二「アトリエ」『セザンヌ—近代絵画の父とは何か?』永井隆則 編、三元社、2019年7月、63頁

☆大木麻利子「セザンヌの人生」『セザンヌ—近代絵画の父とは何か?』永井隆則 編、三元社、2019年7月、75頁

☆浅野春男「形式主義」『セザンヌ—近代絵画の父とは何か?』永井隆則 編、三元社、2019年7月、109頁

What Copying Meant to Cézanne, 国際版『美学』*Aesthetics* (オンライン版), No.21, 美学会, February 2018, pp.111-15.

☆ Christopher Riopelle with Sylvie Patry, *Bathers at Rest, Cézanne in the Barnes Foundation*, Edited by André Dombrowski, Nancy Ireson, and Sylvie Patry, Rizzoli Electa in association with the Barnes Foundation, Philadelphia, 2021, p. 87, 95.

「感覚の実現」『セザンヌ 近代絵画の父、とは何か?』永井隆則 編、三元社、2019年7月、24-26頁

☆深尾茅奈美「カミーユ・ピサロ作《小川に足を浸ける女》に関する考察—自然回帰思想からの影響と画家の芸術理念を中心に—」『日仏美術学会会報』第40号、2020年11月、89頁

2) 文献表に引用された論文、著作 Citations dans des bibliographies

「文献目録」(太田泰人との共編)

『荻須高德遺作展 OGUISS 1901-1986』(展覧会図録) 京都国立近代美術館、1989年2月14日-3月19日、朝日新聞社、1988年、199-211頁

☆「文献目録 Bibliographie」『Oguiss 荻須高德展』(展覧会図録) 東京、渋谷・Bunkamura ザ・ミュージアム、1996年8月23日-9月23日、朝日新聞社、1996年、178-194頁

『1910年代前後の日本におけるセザンヌ (セザンヌ芸術の受容と紹介)

“Cézannisme I Japan, 1902-1921”』1989（平成元）年度文部省科学研究費補助金 奨励研究（A）研究成果報告書、永井隆則 編、永井隆則（京都国立近代美術館）、1990年3月、1-34頁

☆新畑泰秀 編「参考文献『セザンヌ展』（展覧会図録）横浜美術館、1999年9月11日-12月19日、横浜美術館、198頁

☆井尻樂『1910年代前後の日本におけるカンディンスキー像—カンディンスキー芸術の受容と紹介』京都大学博士論文（人間・環境学）（学位記番号：人博第264号）、2005年1月24日、154頁

☆岩崎美千子 編「主要参考文献」『国立新美術館開館5周年 セザンヌ—パリとプロヴァンス』（展覧会図録）2012年3月28日-6月11日、国立新美術館、173頁

「ゴッホの油彩画・デッサンと日本美術—ゴッホが日本美術に見たもの」『ゴッホと日本』（展覧会図録）京都国立近代美術館、1992年2月18日-3月29日、永井隆則 編、テレビ朝日、1992年2月、169-181頁

☆井尻樂『1910年代前後の日本におけるカンディンスキー像—カンディンスキー芸術の受容と紹介』京都大学博士論文（人間・環境学）（学位記番号：人博第264号）、2005年1月24日、154頁

☆国立西洋美術館学芸課 編「参考文献」『ロンドン・ナショナル・ギャラリー展』（展覧会図録）読売新聞東京本社／国立西洋美術館、2020年6月18日-10月18日、読売新聞東京本社、325頁

「新印象主義」、「スーラ、シニャック、リュス、クロス作品解説」『世界美術大全集 第23巻 後期印象派時代』池上忠治 編、小学館、1993年3月、253-272、435-442頁

☆三谷里華「25スーラ [グランド・ジャット島の日曜日の午後] 芸術と近代科学の出会い」『ヨーロッパ美術史』野口栄子 監修、昭和堂、1997年、301頁

☆セゴレーヌ・ルメン著／吉田紀子訳『スーラとシェレー画家、サーカス、ポスター』三元社、2013年、210頁

「日本に於けるセザンヌ受容史の一断面—1920年代初頭の人格主義的セザン

- ヌ像の形成と行方』『ユリイカ』第28巻第11号、1996年9月、188-198頁
- ☆新畑泰秀 編「参考文献『セザンヌ展』(展覧会図録)横浜美術館、1999年9月11日-12月19日、横浜美術館、198頁
- ☆田中淳「後期印象派・考—1912年前後を中心に(上)」『美術研究』第368号、1997年12月、157頁
- ☆片多祐子 編「主要参考文献表 Selected Bibliography」『セザンヌ主義父と呼ばれる画家への礼賛』(展覧会図録)2009年2月7日-4月12日、横浜美術館、196頁
- ☆岩崎美千子 編「主要参考文献」『国立新美術館開館5周年 セザンヌ—パリとプロヴァンス』(展覧会図録)2012年3月28日-6月11日、国立新美術館、176頁

「1920年代初頭のフランスと日本のセザンヌ—知覚主義からフォルマリズムへ／知覚主義から人格主義へ」『鹿島美術研究』年報第13号別冊、財団法人鹿島美術財団 編、1996年11月、173-187頁

- ☆新畑泰秀 編「参考文献」『セザンヌ展』(展覧会図録)横浜美術館、1999年9月11日-12月19日、横浜美術館、198頁
- ☆岩崎美千子 編「主要参考文献」『国立新美術館開館5周年 セザンヌ—パリとプロヴァンス』(展覧会図録)2012年3月28日-6月11日、国立新美術館、173頁

An Aspect of Cézanne Reception in Japan—The Formation and Development of “Personalist” Interpretation of Cézanne in the 1920’s, 国際版『美学』 *Aesthetics* Vol. 8, 美学会, March 1998, pp. 79-91.

☆Alex Danchev, *Cézanne a life*, Pantheon Books, New York, 2012, p. 462.

「1930年代日本のセザンヌ受容—「人格」から「造型」へ」『美学・芸術学の今日的課題「日本に於ける美学・芸術学の歩みと課題」+〈病〉の感性学』美学会 編、1999年3月、17-26頁

- ☆新畑泰秀 編「参考文献」『セザンヌ展』(展覧会図録)横浜美術館、1999年9月11日-12月19日、横浜美術館、198頁

「日本に於けるセザンヌ受容史」『美術手帖 特集 新セザンヌ解剖学—いま「近代絵画の父」から何を学べるか?』第51巻第777号、1999年10月号、68-69頁

☆片多祐子 編「主要参考文献表 Selected Bibliography」『セザンヌ主義父と呼ばれる画家への礼賛』（展覧会図録）2009年2月7日-4月12日、横浜美術館、196頁

☆岩崎美千子 編「主要参考文献」『国立新美術館開館5周年 セザンヌ—パリとプロヴァンス』（展覧会図録）2012年3月28日-6月11日、国立新美術館、176頁

Cézanne and Time, XVth-International Congress for Aesthetics, 2001 (CD-ROM), Society of Aesthetics International, March 2002.

☆ Selected Bibliography, *Cézanne in the Barnes Foundation*, Edited by André Dombrowski, Nancy Ireson, and Sylvie Patry, Rizzoli Electa in association with the Barnes Foundation, Philadelphia, 2021, p. 396.

「1920年代日本の人格主義セザンヌ像の美的根拠とその形成に関する思想及び美術制作の文脈について」『美術研究』第375号、独立行政法人文化財研究所 東京文化財研究所 編、2002年3月、38-56 (336-354) 頁

☆岩崎美千子 編「主要参考文献」『国立新美術館開館5周年 セザンヌ—パリとプロヴァンス』（展覧会図録）2012年3月28日-6月11日、国立新美術館、173頁

『1930-40年代の日本におけるセザンヌ受容 Cézannisme in Japan 1922・1-1947・1』1998 (平成10)-2001 (平成13) 年度文部省科学研究費補助金基盤研究(C) 研究成果報告書、永井隆則 編、永井隆則 (京都工芸繊維大学)、2002年3月、1-94頁

☆井尻樂『1910年代前後の日本におけるカンディンスキー像—カンディンスキー芸術の受容と紹介』京都大学博士論文(人間・環境学)(学位記番号:人博第264号)、2005年1月24日、154頁

☆岩崎美千子 編「主要参考文献」『国立新美術館開館5周年 セザンヌ—パリとプロヴァンス』（展覧会図録）2012年3月28日-6月11日、国立新美

術館、173頁

「『写実』のセザンヌ受容とその思想環境」『京都工芸繊維大学工芸学部 紀要 人文』第52号、京都工芸繊維大学、2004年3月、43-72頁

☆岩崎美千子 編「主要参考文献」『国立新美術館開館5周年 セザンヌーパリとプロヴァンス』（展覧会図録）2012年3月28日-6月11日、国立新美術館、173頁

『モダン・アート論再考—制作の論理から』思文閣出版、2004年4月

☆片多祐子 編「主要参考文献表 Selected Bibliography」『セザンヌ主義父と呼ばれる画家への礼賛』（展覧会図録）2009年2月7日-4月12日、横浜美術館、195頁

☆岩崎美千子 編「主要参考文献」『国立新美術館開館5周年 セザンヌーパリとプロヴァンス』（展覧会図録）2012年3月28日-6月11日、国立新美術館、174頁

☆秋丸知貴『セザンヌと蒸気鉄道—近代技術による視覚の変容』晃洋書房、2013年、202頁

☆池野絢子「第14章 印象派とその周辺 近代の幕あけ」水野千依 編『西洋の芸術史 造形篇 II 盛期ルネサンスから一九世紀末まで』（芸術教養シリーズ6）、京都造形芸術大学／東北芸術工科大学出版局／藝術学舎、2013年、205頁

☆坂上桂子『ジョルジュ・スーラ 点描のモデルニテ』ブリュッケ、2014年、308頁

☆立野陽子「多層色面による絵画空間構築—プッサンとセザンヌに見る方法論的系譜—Constructing Pictorial Space with Multilayered Color Planes—Methodological Genealogy from Poussin to Cézanne—」京都造形芸術大学大学院芸術研究科芸術専攻博士論文、2015年度

☆廣田治子「主要参考文献」『中空の彫刻—ポール・ゴーギャンの立体作品に関する研究』三元社、2020年、77頁

「ピカソとミノタウロス」『モダン・アート論再考—制作の論理から—』思文閣出版、2004年4月、145-157頁

☆久保田有寿 編「ピカソ文献目録 和文文献」『ピカソと人類の美術』（大高保二郎／永井隆則 編、三元社、2020年、21頁

「**「造型」のセザンヌ受容とその思想環境**」『京都工芸繊維大学工芸学部紀要 人文』第53号、京都工芸繊維大学、2005年3月、63-92頁

☆岩崎美千子 編「主要参考文献」『国立新美術館開館5周年 セザンヌーパリとプロヴァンス』（展覧会図録）2012年3月28日-6月11日、国立新美術館、173頁

『**1930-40年代日本に於けるセザンヌ解釈誕生の環境**』2003（平成15）-2004（平成16）年度独立行政法人日本学術振興会科学研究費補助金 基盤研究（C）研究成果報告書、永井隆則 編、永井隆則（京都工芸繊維大学）、2005年3月、1-92頁

☆岩崎美千子 編「主要参考文献」『国立新美術館開館5周年 セザンヌーパリとプロヴァンス』（展覧会図録）2012年3月28日-6月11日、国立新美術館、173頁

「**「日本主義」のセザンヌ受容とその思想環境**」『京都工芸繊維大学工芸学部紀要 人文』第54号、2006年3月、79-112頁

☆岩崎美千子 編「主要参考文献」『国立新美術館開館5周年 セザンヌーパリとプロヴァンス』（展覧会図録）2012年3月28日-6月11日、国立新美術館、173頁

『**セザンヌ受容の研究**』中央公論美術出版、2007年3月

☆片多祐子 編「主要参考文献表 Selected Bibliography」『セザンヌ主義 父と呼ばれる画家への礼賛』（展覧会図録）2009年2月7日-4月12日、横浜美術館、195頁

☆阿部真弓「ポスト印象派の用語について」『オルセー美術館展 2010「ポスト印象派」』（展覧会図録）2010年5月26日-8月16日、国立新美術館、225頁

☆泰井良「児島善三郎《箱根》についての考察」『静岡県立美術館 紀要』第26号 平成22年度、静岡県立美術館、2011年3月、20頁

☆岩崎美千子 編「主要参考文献」『国立新美術館開館5周年 セザンヌーパリとプロヴァンス』（展覧会図録）2012年3月28日-6月11日、国立新美術館、173頁

☆秋丸知貴『セザンヌと蒸気鉄道—近代技術による視覚の変容』晃洋書房、2013年、202頁

「セザンヌ没後100年展『セザンヌとピサロ1865-1885』展（ニューヨーク近代美術館、2005年6月-9月他）『プロヴァンスのセザンヌ』展（ワシントン・ナショナル・ギャラリー、2006年1月-5月ほか）」（展覧会評）『西洋美術研究 特集「芸術家列伝」』第13号、三元社、2007年7月、249-257頁

☆岩崎美千子 編「主要参考文献」『国立新美術館開館5周年 セザンヌーパリとプロヴァンス』（展覧会図録）2012年3月28日-6月11日、国立新美術館、173頁

『フランス近代美術史の現在—ニュー・アート・ヒストリー—以後の視座から』永井隆則 編、三元社、2007年8月

☆秋丸知貴『セザンヌと蒸気鉄道—近代技術による視覚の変容』晃洋書房、2013年、202頁

☆池野絢子「第15章 ポスト印象派から世紀末へ—印象主義の遺産とその超克」水野千依 編『西洋の芸術史 造形篇 II 世紀ルネサンスから一九世紀末まで』（芸術教養シリーズ6）、京都造形芸術大学／東北芸術工科大学出版局／藝術学舎、2013年、219頁

☆『モネとマティス もう一つの楽園展』（展覧会図録）2020年6月1日-11月3日、ポーラ美術館、219頁

「セザンヌの素描と身体—精神分析美術史を越えて」『フランス近代美術史の現在—ニュー・アート・ヒストリー—以後の視座から』永井隆則 編、三元社、2007年8月

☆片多祐子 編「主要参考文献表 Selected Bibliography」『セザンヌ主義 父と呼ばれる画家への礼賛』（展覧会図録）2009年2月7日-4月12日、横浜美術館、195頁

☆岩崎美千子 編「主要参考文献」『国立新美術館開館5周年 セザンヌーパリとプロヴァンス』(展覧会図録)2012年3月28日-6月11日、国立新美術館、173頁

Recherche sur la Réception de Cézanne au Japon et ses perspectives à venir『日仏美術学会会報 (*Bulletin de la société franco-japonaise d'art et d'archéologie*)』第27号(2007年度)、日仏美術学会 編、2008年5月31日、33-44頁

☆岩崎美千子 編「主要参考文献」『国立新美術館開館5周年 セザンヌーパリとプロヴァンス』(展覧会図録)2012年3月28日-6月11日、国立新美術館、173頁

「セザンヌ研究の可能性—『ポール・セザンヌ〈サント・ヴィクトワール山〉』(ゴットフリート・ベーム著 岩城見一・美淵洋次訳 岩城見一解説)を読む」(書評)『日仏美術学会会報 (*Bulletin de la société franco-japonaise d'art et d'archéologie*)』第28号(2008年度)、2009年7月、33-38頁

☆岩崎美千子 編「主要参考文献」『国立新美術館開館5周年 セザンヌーパリとプロヴァンス』(展覧会図録)2012年3月28日-6月11日、国立新美術館、173頁

「竹喬のセザンヌ受容再考」『東京国立近代美術館ニュース 現代の眼 特集「生誕120年 小野竹喬」展によせて 竹喬と西洋近代絵画—そこから何を学んだか』第580号、独立行政法人東京国立近代美術館、2010年2-3月、2-3頁

☆岩崎美千子 編「主要参考文献」『国立新美術館開館5周年 セザンヌーパリとプロヴァンス』(展覧会図録)2012年3月28日-6月11日、国立新美術館、173頁

「シャピロからカルマイヤーまで—セザンヌの社会史研究の可能性」『探求と方法：フランス近現代美術史を解剖する 文献学・美術館行政から精神分析・ジェンダー論以降へ』永井隆則 編、晃洋書房、2014年3月、163-186頁

☆国立西洋美術館学芸課 編「参考文献」『ロンドン・ナショナル・ギャラリー一展』（展覧会図録）読売新聞東京本社／国立西洋美術館、2020年6月18日-10月18日、325頁

「セザンヌに於ける〈模写〉の意味」『美術フォーラム21 特集：模写と臨書—模写と臨書—日本を基調にして東西の視覚文化の特性を考えてみる』第31号、醍醐書房 編、2015年5月、114-123頁

☆ Selected Bibliography, *Cézanne in the Barnes Foundation*, Edited by André Dombrowski, Nancy Ireson, and Sylvie Patry, Rizzoli Electa in association with the Barnes Foundation, Philadelphia, 2021, p. 396.

『〈場所〉で読み解くフランス近代美術』永井隆則 編、三元社、2016年10月

☆『モネとマティス もう一つの楽園展』（展覧会図録）、ポーラ美術館、2020年6月1日-11月3日、ポーラ美術館、221頁

☆ Selected Bibliography, *Cézanne in the Barnes Foundation*, Edited by André Dombrowski, Nancy Ireson, and Sylvie Patry, Rizzoli Electa in association with the Barnes Foundation, Philadelphia, 2021, p.396.

『セザンヌ—近代絵画の父、とは何か？』永井隆則 編、三元社、2019年7月

☆国立西洋美術館学芸課 編「参考文献」『ロンドン・ナショナル・ギャラリー一展』（展覧会図録）、国立西洋美術館、2020年6月18日-10月18日、読売新聞東京本社、325頁

☆佐藤優「178 美術・建築 セザンヌ（1839-1906）自然を立体的に捉え、20世紀芸術を切り開いた画家」『人物で読み解く世界史365人』

<https://books.google.co.jp/books?id=DZkQEAAAQBAJ&pg=PA218&lpg=PA218&dq=%E6%B0%B8%E4%BA%95%E9%9A%86%E5%89%87&source=bl&ots=rC3EJe03AX&sig=ACfU3U1ymfWg1HvhC-ZgreR6rAbxnc07dA&hl=ja&sa=X&ved=2ahUKEwjSmdK8oLPyAhVaZd4KHV04Dlw4PBD0AXoECBQQAww#v=onepage&q=%E6%B0%B8%E4%BA%95%E9%9A%86%E5%89%87&f=false>

新星出版社、2020年、18頁

XXXII. Curriculum Vitae

Takanori NAGAI

Date et lieu de naissance

né le 29 mai 1956 à Kurayoshi, Préfecture Tottori, Japon

Formation et diplômes

1980 : Licence à l'université de Kyoto (Faculté de Lettres). Sujet : De l'art de Cézanne, sous la direction du Pr. Ken'jiro YOSHIOKA.

1982 : Maîtrise à l'université de Kyoto. Sujet : L'Activité plastique de Cézanne dans ses dernières années : la signification et la position de ses recherches dans son œuvre, sous la direction du Pr. Ken'jiro YOSHIOKA.

1982-1987 : Doctorant à l'université de Kyoto, sous la direction du Pr. Ken'jiro YOSHIOKA.

1984 : Diplôme d'études approfondies à l'Université de Provence. Sujet : Le problème de la marge chez Cézanne pour l'introduction de l'histoire des matières et des matériaux picturaux aux XIXe et XXe siècles, sous la direction du Pr. Gérard MONNIER.

1984-1987 : Doctorant à l'Ecole des Hautes Etudes en Sciences Sociales, sous la direction du Pr. Hubert DAMISCH.

2006 : Doctorat en littérature à l'université de Kyoto. Sujet : La Réception de Cézanne au Japon, sous la direction des Pr. Toshiharu NAKAMURA

(Président), Pr. Ken'ichi IWAKI, et Pr. Ken'suke NEDACHI. Mention très honorable à l'unanimité.

2012-2018 : Doctorant à l'Ecole des Hautes Etudes en Sciences Sociales, sous la direction du Pr. Éric Michaud.

Carrière

1) Conservateur de musée

1987-1995 : Conservateur au musée national d'art moderne de Kyoto.

1995-1998 : Conservateur senior au musée national d'art moderne de Kyoto.

2) Enseignement universitaire

1998-2022 : Professeur adjoint à l'Institut de technologie de Kyoto (national) .

1987 : Enseignant vacataire à l'Université des beaux-arts de Kyoto (privée) .

1994, 1999-2000, 2006-2022 : Enseignant vacataire à l'université de Kyoto (nationale) .

2001-2008, 2014-2019 : Enseignant vacataire à l'université du Kansai (privée) .

2002 : Enseignant vacataire à l'université de Kobe (nationale) .

2007-2010, 2015-2018, 2021-2022 : Enseignant vacataire à l'université de Dôshisha, Kyoto (privée) .

2006-2022 : Enseignant vacataire à l'université pédagogique de Nara (nationale) .

2020-2022 : Enseignant vacataire à l'Université municipale des beaux-arts de Kyoto (municipale) .

Bourses

1984-1985 : La fondation Rotary Club International (Aix-en-Provence) .

Invitations

1991 : International Visitor par le Département d'Etat aux Etats-Unis (Washington D.C., Dallas, Fortworth, New York, Philadelphia, Boston, Los Angeles)

Conférences

11 février 1989 : Les chefs-d'œuvre de la collection du musée de Detroit, Musée municipal d'art de Kyoto.

6 mai 1990 : L'essence et le charme de l'art de Cézanne, Musée municipal d'art de Kurashiki, préf. d'Okayama.

1 août 1991 : Gauguin et l'art moderne, Musée municipal d'art de Kyoto.

18 février 1992 : Vincent van Gogh et le Japon, Musée national d'art moderne de Kyoto.

19 juin 1993 : Gauguin et l'école de Pont-Aven : l'art au temps de la révolution, Musée national d'art moderne de Kyoto.

27 août 1994 : Les paysages provençaux et l'art moderne, Salle de conférence du building Shin'han'kyu., Osaka.

9 juin 1995 : Gustave Moreau et son temps, Centre culturel Wings, Kyoto.

17 juin 1995 : Gustave Moreau, le mystère et l'illusion—le moderne dans l'académisme, Centre culturel international de Kyoto.

18 novembre 1995 : L'essence et le charme de l'art de Picasso, Musée national d'art moderne de Kyoto.

11 juin 1996 : Le corps dans l'art du XXème siècle, Centre culturel de Kyoto.

22 juin 1996 : L'expression du corps dans l'art moderne français au XIXè siècle, Musée national d'art moderne de Kyoto.

2 août 1996 : L'art moderne et Paris, Musée national de Kyoto.

12 octobre 1996 : Les grandes baigneuses au musée d'art de Philadelphie, Centre culturel du Journal Asahi, Ashiya.

22 novembre 1998 : L'art moderne et Paris, Musée municipal d'art de Kyoto.

19 novembre 1999 : Le fondement esthétique de l'image personnaliste de Cézanne dans les années 1920s et le contexte des idées et de la pratique de sa formation, Centre de recherche sur les trésors culturels, Tokyo.

5 février 2000 : Cézanne et le Japon, Musée préfectoral d'art, Aichi.

21 septembre 2002 : L'école de Paris et Picasso, Musée municipal d'art de

Kyoto.

7 février 2004 : Les dessins cézanniens et le corps, Musée d'art Bridgstone à Tokyo.

14 mai 2005 : Vincent van Gogh et le Japon, Musée national d'art d'Osaka.

24 juin 2006 : De la peinture moderne française à l'art contemporain : lieu de lutte et de création, Musée préfectoral d'art et de culture de Kyoto.

8 avril 2007 : De la peinture moderne française à l'art contemporain : lieu de lutte et de création, Musée municipal d'art de Kurashiki, préf. d'Okayama.

13 mai 2007 : La peinture moderne française et le Japon, Musée municipal d'art de Kurashiki, préf. d'Okayama.

3 juin 2007 : Cézanne et le Japon, Musée municipal d'art de Kurashiki, préf. d'Okayama.

1e juillet 2007 : Vincent van Gogh et le Japon, Musée municipal d'art de Kurashiki, préf. d'Okayama.

13 octobre 2007 : Cézanne au Japon, Musée d'art Bridgstone à Tokyo.

24 novembre 2007 : Étude sur la réception de Cézanne et la perspective à venir, réunion régulière de la société franco-japonaise d'art et d'archéologie, Université Osaka-ohtani.

24 novembre 2008 : La naissance et le développement du Cézannisme, Musée préfectoral d'art de Yokohama.

26 mai 2012 : État des connaissances sur Cézanne à nos jours et l'image cézannienne actuelle, conférence fondamentale pour *le colloque sur Cézanne*, Centre national d'art de Tokyo.

30 juillet 2016 : Cézanne chez Gauguin, communication pour le colloque international : *De la recherche actuelle sur Gauguin et Redon*, Université de Kyoto.

25 septembre 2016 : How Paul Cézanne rejected the fini concept, communication pour le colloque international : *Appreciating the Traces of an Artist's Hand*, Université de Kyoto.

17 décembre 2016 : Critique d'art chez Émile Zola en tant qu'engagement, communication pour le colloque international : *Critique d'art—Émile Zola*, Institut de Technologie de Kyoto.

11 novembre 2017 : Picasso se transformant en Cézanne, communication pour le colloque international : *Picasso et l'art de l'humanité*, Institut de Technologie de Kyoto.

2 décembre 2018 : Zola accuse par sa plume, Cézanne par son pinceau, communication pour le colloque international : *Peut-on parler d'une amitié créative entre Cézanne et Zola?*, Institut de Technologie de Kyoto.

21 septembre 2019 : Cézanne et Jas de Bouffan—la représentation de l'intimité, communication pour le colloque international : *Cézanne et Jas de Bouffan, Histoire et Art*, Salle de conférence à l'université d'Aix-Marseille, rue Gaston de Saporta à Aix-en-Provence.

30 novembre 2019 : L'art et l'idée cézanniens, conférence commémorative pour l'exposition de la collection du musée Courtauld, Londres, Musée d'art métropolitain de Tokyo

24 octobre 2020 : L'impact cézannien, conférence commémorative pour l'exposition "Le défi cézannien dans sa jeunesse" au musée d'art moderne Morohashi, Fukushima

Publications

1) Livres

Cézanne (en japonais), éditions Bijutsushuppan, Tokyo, 1988.

Guide de l'esthétique et de l'histoire de l'art (en japonais), éditions Keisoshobo, Tokyo, 1989.

La théorie et l'histoire de l'art(en japonais), éditions Shibun'kakushuppan, Kyoto, 1990.

L'art du monde Post-Impressionniste (en japonais), éditions Shogakukan, Tokyo, 1993.

Forum de l'esthétique et de l'histoire de l'art (en japonais), éditions Keisôshobô Tokyo, 1995.

Guide de la collection du musée national d'art moderne, Kyoto (en japonais), Musée national d'art moderne de Kyoto, 1994, 1995, 1997.

La Muséologie contemporaine(en japonais), éditions Shôwadô, Kyoto, 2002.

Le contexte de la pensée artistique japonaise moderne(en japonais), éditions Kôyôshobô, Kyoto, 2002.

La plastique transcendante entre l'art et le design (en japonais), éditions Kôyôshobô, Kyoto, 2003.

Reconsidération de la théorie de l'art moderne (en japonais), éditions Shibun'kakushuppan, Kyoto, 2004.

La Réception de Cézanne au Japon (en japonais, résumé en anglais), éditions Chûôkôronbijutsushuppan, Tokyo, 2007.

Le courant de l'histoire de l'art moderne français (en japonais), éditions Sangen'sha, Tokyo, 2007.

La force du design (en japonais), éditions Kôyôshobô, Kyoto, 2010.

Forum de l'esthétique et de l'histoire de l'art : De la France vers le Japon—Réception Créative (en japonais), éditions Daigoshobô, Kyoto, 2011.

Mieux connaître Cézanne (en japonais), éditions Tôkyôbijutsu, Tokyo, 2012.

Recherche et méthode: Analyses de l'histoire de l'art français moderne, contemporain—de la Philologie, l'administration muséale au-delà de la Psychanalyse, "la théorie du genre" (en japonais), éditions Kôyôshobô, Kyoto, 2014.

Le <Bashô> dans l'art moderne français (en japonais), éditions Sangen'sha, Tokyo, 2016.

Cézanne—le père de l'art moderne? (en japonais), éditions Sangen'sha, Tokyo, 2019.

Picasso et l'art de l'humanité (en japonais) (Co-édité avec Yasujirô Ohtaka), éditions Sangen'sha, Tokyo, 2020.

La vérité en peinture—Cézanne face à la société modernisante, éditions

Sangen'sha, Tokyo, 2022.

2) Écrits sur Cézanne

Sur l'art de Cézanne, Mémoire de licence à l'université de Kyoto, Faculté de Lettres (en japonais), 1980, pp. 1-50.

L'activité plastique de Cézanne dans ses dernières années : la signification et la position de ses recherches dans son œuvre, Mémoire de maîtrise à l'université de Kyoto, 1982, pp. 1-409.

«Cézanne et la postérité», *Le bulletin de l'esthétique et l'histoire de l'art*, Faculté des lettres de l'université de Kyoto, pp. 23-53.

Le problème de la marge chez Cézanne pour l'introduction de l'histoire des matières et des matériaux picturaux aux XIXe et XXe siècles(en français), Mémoire de diplôme d'études approfondies, Université de Provence (Aix-en-Provence, France), 1984, pp. 1-60.

«Cézanne et Aix-en-Provence» (en japonais), *Cézanne*, éditions Bijutsushuppan, Tokyo, 1988, pp. 83-84.

«Le problème de la réserve chez Cézanne»(en japonais), *L'Esthétique*, No. 150, Vol. 8, No. 2, octobre 1987, pp. 49-63.

«Le problème de la temporalité chez Cézanne»(en japonais), *La théorie et l'histoire de l'art*, éditions Shibun'kakushuppan, Kyoto, 1990, pp. 385-394.

«An aspect of Cézanne Reception in Japan—The Formation and Development of “Personalist” Interpretation of Cezanne in the 1920's» (en anglais), *Bigaku (Aesthetics International)*, Vol. 8, 1998, pp. 79-91.

«Cézanne and Time» (en anglais), *XVth International Congress for*

Aesthetics, 2001 (CD-ROM), Society of Aesthetics International, 2003.

«Cézanne's Reception in Japan During the 1930s From "Personality (Jinkaku) "to"Plastique (Formality/Zokei) "» (en anglais), *The Report on Research conducted under the Auspices of the Scientific Research Grants For 1998-2001, Base Research (c) (2) by Ministry of Education, Culture, Sports, Science, and Technology*, 2002 march, pp. 67-74.

«Cézanne et le modern design» (en japonais), *La plastique transcendante entre l'art et le design*, éditions Kôyôshobô, Kyoto, 2003, pp. 28-45.

La Réception de Cézanne au Japon (en japonais), *Thèse de Doctorat à l'université de Kyoto*, mai 2005, pp. 1-443.

La Réception de Cézanne au Japon (en japonais, résumé en anglais), éditions Chûôkôronbijutsushuppan, Tokyo, 2007.

«Recherche sur la réception de Cézanne au Japon et ses perspectives à venir» (en français), *Bulletin de la société franco-japonaise d'art et d'archéologie*, No. 27, 2007, pp. 33-44.

«Les dessins cézanniens et le corps»(en japonais), *Le courant de l'histoire de l'art moderne français*, éditions Sangen'sha, Tokyo, 2007, pp. 119-161.

«Cézannisme in Japan: A Study of the reception of Cézanne by Japanese Artists (1905-45)» (en anglais), *Homage to Cézanne—His Influence on the Development of Twentieth Century Painting* (Exh. Cat.), Yokohama Museum of Art/Nippon Television Network Corporation , 2008, pp. 205-210.

Mieux connaître Cézanne(en japonais), éditions Tôkyôbijutsu, Tokyo, 2012.

«Les images féminines chez Cézanne» (en japonais), *Eureka*, No. 609, Vol. 44-4, April 2012, pp. 80-97.

«Ce que le séjour de Cézanne à Paris lui a apporté» (en japonais), *Bulletin du Centre national des arts de Tokyo*, Tokyo, No. 22, mai 2012, pp. 1-2.

«Une possibilité de recherche de l'histoire sociale de l'art de Cézanne— depuis Meyer Schapiro jusqu'à Nina Maria Athanassoglou-Kallmyer» (en japonais), *Recherche et méthode : Analyses de l'histoire de l'art français moderne, contemporain, de la Philologie, l'administration muséale au-delà de la Psychanalyse, "la théorie du genre"*, éditions Kôyôshobô, Kyoto, 2014, pp. 163-186.

«Cézanne et Le Jas de Bouffan—Représentation de l'intimité», *Le (Basho) dans l'art moderne français* (en japonais), éditions Sangensha, Tokyo, 2016, pp. 2-32.

«How Paul Cézanne rejected the fini concept» (en anglais), *Kyoto Studies in Art History*, No. 2, March 2017, pp. 133-147.

«What Copying Meant to Cézanne» (en anglais), *Aesthetics International*, No. 21, May 2017, pp. 133-148.

«État actuel de l'élaboration d'un environnement documentaire sur Cézanne» (en japonais), *Le Forum des Beaux-arts 21*, No. 35, Mai 2017, pp. 7-33

«La création du centre de recherche et de documentation sur Cézanne à Aix-en-Provence», *Occasional Opinions on Visual Facts, Suda Memorial*, No. 1, novembre 2019, pp. 83-85.

«Lettres de Cézanne à Émile Bernard (avec leurs traductions en japonais

par Nagai) », *Masterpieces of Impressionism : The Courtauld Collection*, Musée d'art métropolitain de Tokyo, 2019, pp. 75–98.

«Arcadia chez Cézanne—Provence» (en japonais), *Masterpieces of Impressionism : The Courtauld Collection*, Musée d'art métropolitain de Tokyo, 2019, pp. 68–73.

“Cézanne”, *Dictionnaire de la philosophie et des idées françaises*, éditions Minerva shobô, Kyoto, 2023 (à paraître) .

«Cezanne et Jas de Bouffan», *Les actes du colloque international : Cezanne, Jas de Bouffan Art et Histoire*, 21&22 septembre 2019 Salle Maynier d'Oppède, 23 Rue Gaston de Saporta, Aix-en-Provence, Le site de la Société Paul Cezanne.

<https://www.societe-cezanne.fr/2020/02/14/cezanne-et-jas-de-bouffan-representation-de-lintimite-takanori-nagai/>

«Une sociologie de la collection de Cézanne» (en japonais), *Le Forum des Beaux-Arts 21*, No. 42, December 2020, pp. 28–35.

«Cézanne chez Gauguin», *Aesthetics International*, Vol. 24, April 2021, pp. 27–46.

Cezanne's Arcadia—Provence (in English), *La page d'accueil de la société de Paul Cezanne*, 18 juillet 2021,<https://www.societe-cezanne.fr/2021/07/18/cezannes-arcadia-provence-takanori-nagai/>

«L'idée de l'anti-modernisation sociale chez Cézanne» *BULLETIN OF KYOTO INSTITUTE OF TECHNOLOGY*, No. 14, February 2022, pp. 71–107.

3) Catalogues d'expositions

Vincent van Gogh et le Japon (en japonais et en anglais), Musée national d'art moderne de Kyoto, 1992.

Picasso, amour et angoisse—la voie vers Guernica (en japonais et anglais), Musée national d'art moderne de Kyoto, 1995.

Le Musée de l'Orangerie à Paris (en japonais), Musée national d'art moderne de Kyoto, 1998.

Cézannisme—Hommage au peintre considéré comme un père (en japonais et en anglais), Musée préfectoral d'art de Yokohama, 2008.

Masterpieces of Impressionism : The Courtauld Collection, Musée d'art métropolitain de Tokyo, 2019.

Masterpieces from the National Gallery, London, Musée national d'art occidental, Tokyo, 2020.

Projet de recherche avec les subventions de recherche scientifique

1) Subventions d'État

Le Cézannisme au Japon dans les années 1910. Subvention de recherche scientifique par le ministère de l'éducation du gouvernement japonais, 1989.

Les dessins cézanniens des musées étrangers. Subvention de recherche scientifique par le ministère de l'éducation—Recherche à l'étranger (Etats-Unis, France, UK) .

Le cézannisme au Japon dans les années 1930-40. Subvention de

recherche scientifique par le ministère de l'éducation, 1998–2001.

Invitation du Dr. Richard Schiff, Professeur à l'université du Texas, U.S.A., par la fondation japonaise des échanges internationaux, attachée au ministère des affaires étrangères du gouvernement japonais, 2001.

Les conditions de la naissance d'une interprétation de Cézanne au Japon dans les années 1930–40. Subvention de recherche scientifique par le ministère de l'éducation, 2003–2004.

Recherche sur la réception de Cézanne. Subvention de recherche scientifique pour la publication d'un livre par le ministère de l'éducation (publication), 2006.

Recherche sur la reproduction des Cézanne. Subvention de recherche scientifique par l'Institut de Technologie de Kyoto, 2007.

L'idée de l'anti-modernisme chez Cézanne. Subvention de recherche scientifique par le ministère de l'éducation, 2012–2014.

Recherche sur la théorie de l'art chez Cézanne. Subvention de recherche scientifique par le ministère de l'éducation, 2015–2018.

Recherche globale sur la théorie de l'art de l'utopie chez les postimpressionnistes, Subvention de recherche scientifique par le ministère de l'éducation, 2019–2021.

Invitation du Dr. Rémi Labrusse, Professeur à l'Université Paris Nanterre, France, pour le colloque international—Utopie dans les postimpressionnistes, Subvention de recherche scientifique par le ministère de l'éducation, 2019–2021.

Recherche sur La vérité en peinture—Cezanne face à la société modernisante, Subvention de recherche scientifique pour la publication d'un livre par le ministère de l'éducation (publication), 2021.

2) Subventions privées

Recherche sur la reproduction des Cézanne. Subvention de recherche scientifique par la fondation Metropolitan pour la recherche sur l'art oriental, 2006.

Invitation du Dr. Jean-Claude Lebensztejn, Professeur à l'université Paris I, France, pour l'Enquête sur les Cézanne au Japon et pour le colloque international—la possibilité de recherche sur l'histoire de l'art moderne français, Subvention de recherche scientifique par la fondation Heiyanakajima, 2009.

Recherche sur l'histoire des expositions de Cézanne. Subvention de recherche scientifique par la fondation Metropolitan pour la recherche sur l'art oriental, 2009.

Invitation du Dr. Linda Nochlin, Professeur à l'université de New York, U.S.A. Subvention par la fondation Kajima, 2009.

Invitation du Dr. Richard Schiff, Professeur à l'université Texas, Austin, pour le colloque international—la critique d'art chez Émile Zola; Subvention de recherche scientifique par la fondation scientifique Murata-gakujutsushinko-zaidan, 2016.

Invitation du Dr. Caterina Zappia, Professeur émérite à l'université de Pérouse, Italie, pour le colloque international—Picasso et l'art de l'humanité, Subvention par la fondation d'art de Pola, 2017.

Invitation de Mme Laurence Madeline conservatrice du Patrimoine

français, France, pour le colloque international—Picasso et l'art de l'humanité, Subvention par la fondation Kajima, 2017.

Invitation du Dr. Jean Arrouye, Professeur émérite à l'université d'Aix-Marseille I, France, pour le colloque international—Peut-on parler d'une amitié créative entre Cézanne et Zola?, Subvention par la fondation Sasakawa, 2018.

Invitation du Président de la société de Paul Cezanne, Denis Coutagne pour le colloque international—Peut-on parler d'une amitié créative entre Cézanne et Zola?, Subvention de la société japonaise d'histoire de l'art, 2018.

Recherche sur les sites cézanniens en France (11 septembre au 25 septembre 2019), Subvention par la fondation Kajima, 2019.

Invitation du Dr. Aimée Brown Price, Historienne d'art, pour le colloque international—Utopie dans l'art occidental, Subvention de recherche scientifique par la fondation scientifique Murata-gakujutsushinko-zaidan, 2020.

Invitation de Mme Marina Ferretti, Directrice émérite du musée des impressionnistes Giverny, France, pour le colloque international—Utopie dans les postimpressionnistes, Subvention par Yoshino Gypsum Art Foundation, 2020.

Invitation du Dr. Nina Maria Athanassoglou Kallmyer, Professeure émérite à l'université Delaware, États-Unis d'Amérique, pour le colloque international—Utopie dans les postimpressionnistes, Subvention de recherche scientifique par la fondation scientifique Murata-gakujutsushinko-zaidan, 2021.

*謝辞 Remerciements

本目録を作成するにあたって、書誌情報の同定や確認作業について、京都工芸繊維大学附属図書館の業務を委託されている丸善雄松堂株式会社所属の司書の方々、特に、柴田洋子さんに大変お世話になった。また、フランス語表記については、京都工芸繊維大学大学院博士後期課程で博士号(造形科学専攻、日本建築史)を取得されたイルハム・サーバン(Mme Ilham Sahban)女史に校正並びに助言をお願いした。記して満腔の感謝を捧げたい。

回顧

Rétrospective, 1978・4-2022・3

2022年3月20日 発行

著者：永井隆則

非売品

製作：合同会社小さ子社

〒606-8233 京都市左京区田中北春菜町26-21
TEL 075-708-6834

